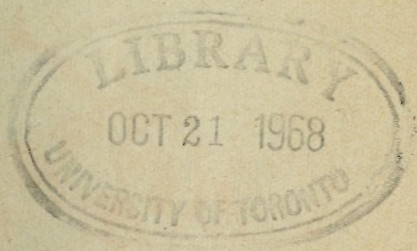
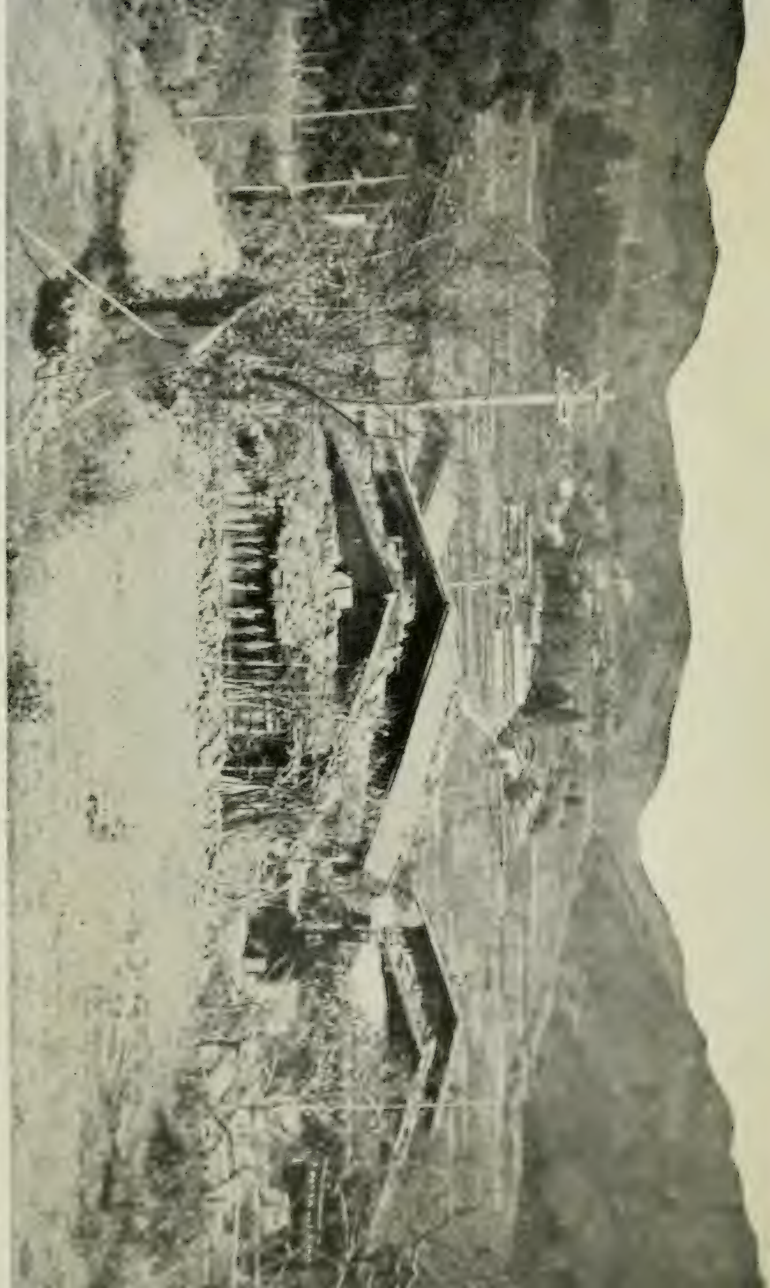
馬籠

馬籠（まごめ）

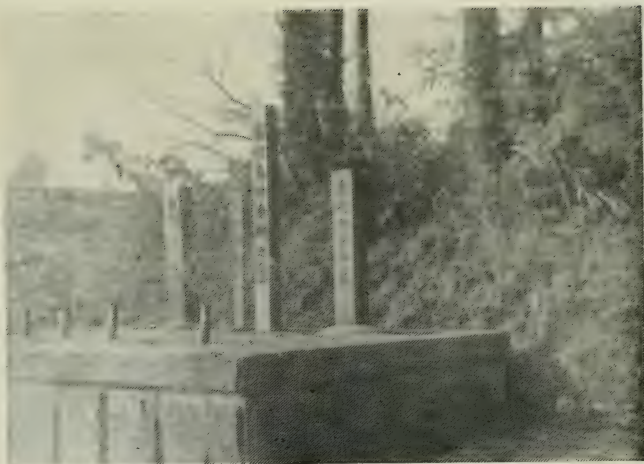
藤村先生のふるさと

菊池重三郎

東京出版

木曾路を歩いて荒町から馬籠を望む（左の森は永昌寺、馬籠の右上、山稜の一番低いところが馬籠峠にあたり、一路妻籠へ下りとなる）

馬籠に辿りつかうとして最後の坂である。車屋の坂の上から見た惠那山。
（四月下旬撮影）

馬籠の中を奥へ妻籠の方へ抜ける中仙道（左側二段目の石崖の上、村の松の木の下に明治天皇記念碑があり、その背後が本陣跡となる）

恵那山を背景にした馬籠、中央二つの白壁土藏の間が本陣跡裏に當る。左白壁土藏は大黒屋、右のは綿屋。
（永昌寺裏の丘陵より谷間を距てゝ、四月下旬撮影）

右より島崎冬子の墓、島崎春樹之墓、楠雄さんの子供の墓、島崎みどり、孝子、縫子の墓。（永昌寺）

馬籠本陣跡、右奥の中二階屋は隠居所　（四月下旬撮影）

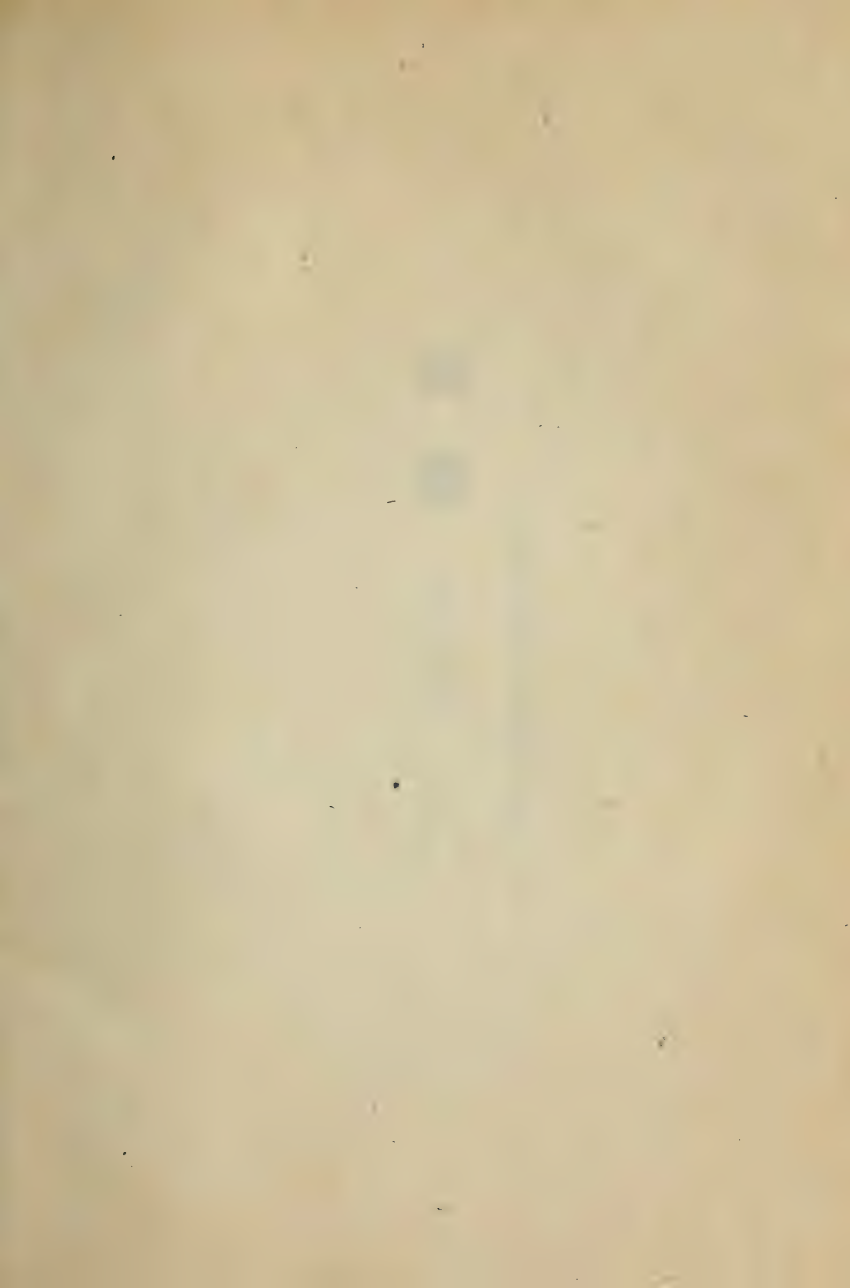
血につながるふるさと
心につながるふるさと
言葉につながるふるさと

――藤村――

目次

装幀　鈴木保德
寫眞　著者

馬籠（まごめ）

――藤村先生のふるさと――

椰子の實

それでも朝夕は少し涼しくなつたかな、そんなことがやつと思へるところまできた。立秋の日はとつくに過ぎてゐたが、夏はまだ日中は湯氣をたててゐるほどの著さだつた。數年來つづけてきた仕事がいよいよ終に近くなつたことには、わたしもその頃、いくぶん氣をよくしてゐたが、一方長い著さには流石に疲れが出るし、そのために思ふやうに捗らない仕事を焦ると、ジリジリするやうな焦躁を覺えるのであつた。

八月二十二日は日曜日であつた。日頃、わたしが仕事の能率をあげるのは午前中、それも早朝から朝飯前後なので、明日こそは……と氣負つて寢につく土

曜日の晩くらゐ、心たのしいことはない。午前中仕事が出來る、やらうと思へば午後も晩も。とにかく丸々勤めから開放されて、一日を自分の好きな、またゝしなければならない仕事に費せるのだと考へるくらゐ當時のわたしにとつて嬉しいことはなかつた。現在はさうではない、とはいはない。が、すくなくとも藤村先生が御健在で朝夕お目にかかれた頃のことを思ふと、なんとなく、あの頃のやうなハリが無くなつてしまつた、そんな氣がする。どうしてだか知らない。先生がお在でになつたところで、別に書いたもの、譯したものを見ていただいたわけではないのだから、考へやうによつては、これは可笑しなことかも知れないが、それが可笑しいどころか、妙に寂しくてならない。昔、先生がまだ飯倉にお住ひのころ、御挨拶に行つたことがある。殘暑きびしい頃であつたが、この夏をどうしてお過しになつたかと思つてである。その時、先生は玄關にぴたりと坐つて、

「この夏は一生懸命勉強しましたよ」

と仰有つたのを覺えてゐる。憔悴されてゐた。この言葉は、その時も勿論さうであつたが、きびしい暑さが漸く終つて凉風がたつころになると、怠けて夏を過してしまひがちなわたしの反省に泛んで嚴しい鞭となるのが慣しであつた。有難いといふか何といふか、年齢とともに、そんな後悔をくりかへすことが少くなつた。あながち勉強を一生懸命やつて酷暑の候を凌いできたといふのではなく、ぼんやり暮してきても、そのぼんやりの後味がわるくない、そんなためでもあらうか。

で、八月二十二日の日曜の朝のことに戻るが、わたしはうつらうつらとしながら、一日の豫定をあれこれと考へて、心愉しい目覺めであつた。臺所でコトコトといふ音も始まり、一番の上り急行も通つた。小鳥の聲が裏山にある。波の音のする方に發動機船もポンポンと忙しい。(——さて、起きようかな)……

その時のことだ。誰か耳なれない女の聲が玄關の方にした。二度目に、臺所から妻が返事をした。そそくさと玄關に出て鍵を開ける音、（今頃いつたい誰だらう）……澄ますともなく聽き耳をたててゐると、訪問者はわたしの在否を確めてゐるらしい。やがて妻が枕もとに立つて言つた。

「島崎先生からです、玄關にお出になつて下さい。」

聲に見當のつかなかつたのも無理はない。先生の家の家政婦の山本さんの娘である。蒼白い顏は見なれてゐたから氣にならなかつたが、口を利くと、思つたよりは賑やかな筈の娘が、言葉少く沈鬱な顏をして、ハトロン紙の封筒をさし出した。表書は鉛筆で宛名だけ、奥さんからとわかつた。

昨日ひる頃主人急に倒れ、そのまま昏睡狀態にて意識かへらず、今日零時三十五分永眠、それまでお知らせ出來なかつた事をおわびします。

二十二日午前二時　島崎靜子

と走り書。わたしは、も一度くりかへして讀んだ。……それから、少女が自分の前に立つてゐることに、氣がついた。とつさに何も言ふこともなかつた、その沈鬱な若さが感染してくるやうな寒さを覺えて、少女の顏を凝つと視た。

「……立派な御最期でございました。」

と、少女が事の内容に觸れて言つたことはこれだけであつた。わたしは少女が歸つて行つた後も玄關に坐つたまま、ぼんやり考へこんでゐた。たうとうくるものが來た、そんな思ひに、再び起ちあがれないやうな重いものを體に感じた。かねてこのことのある日を豫感しなかつたわけではなかつたから、冷靜に事實を受け入れることの出來たわたしではあつたが、それでも事の容易ならないことが、いつまでも茫然としてゐることを許さなかつた。

「……先生が……亡くなられたんだつてさ。……」

妻にさう言ひ、まだ眠つてゐる女の子に叫んだ。時計を見ると五時半を少し廻つたところである。いづれ葬式といへば忙しいにきまつてゐる。いくら人手があつても、あり過ぎて困るなどといふことはないに決つてゐる。が、それにしても訃を聞いて駈けつける人は、この大磯では第一がわたしよりほかにない。わたしは葬式がすむまでのここ四五日不眠不休を覺悟した。そこで、飯は後刻握つてでも持つて來てくれ、然るべき時間を見て、何か用事が出來るかもわからないから、時々樣子を見に來てくれ、と言ひ殘し、上衣を掴んだまま襯衣一枚で自家を出た。

路を慌しく急ぎながら――先生が亡くなられた亡くなられた……亡くなられた、と、そんな一つ言(こと)を氣狂ひのやうに繰返し呟いてゐるわたしだつた。

驛を中心に町の西端れへ約四五丁。やがて先生の假寓(すまひ)の玄關に立つて見ると、

平常と變つたことがあるとも思へないひつそりした氣配だが、思ひなしか空氣が冷たく沈滯してゐる。奥さんに案内されて奥の四疊半に通された。「東方の門」を執筆されてゐた書齋である。

床の間の前に先生は枕を北にして横になつてをられた。白い布が顔にかけてなければ、寐息が聞こえるといつても嘘ではなささうな安息の姿である。そんな先生のそばで、奥さんは昨日からの經過を、沈痛な顔して静かにお話になつた。その後で、進歩といふことについて平常先生が仰有つてゐたことを語られた。

後日、疲勞甚だしく青山高樹町の病院に入院されたとき「一人の甥*に與ふる手紙」といふものを書かれたが、それにこの時の話と同じことをさらに詳しく誌して、

たしか九時半頃、茶の間の前の廊下に立つて庭を見ていらつしやる、またあすこを書いてるんだよ、しかしこんどは思ふやうに出來たと思ふ、讀んでもらはうか、あすこが出來てしまへばあとは雜作ない、和助が東京を立つだけだからね。前日來客があつたのでめづらしくそれは朝の中のことでした。茶の間の伯母さんの小さい机の上を伯父さまは片手でかたづけはじめました。例の青い布に包まれた原稿が片手に見えました。伯母さんが急いで拭き淨めた上に、青い布のまゝ原稿が置かれました。ここからだよ、原稿を開いて示されました。讀んでしまつたら、けふはお菓子をつくつて貰はう。とも言はれました。伯母さんは茶棚をうしろに机にむかひ伯父さまは机をはさんで端坐して、おつと聞いていらつしやる─青山半藏等には中世の否定といふことがあつた─その行から三四行讀んだと思ひます。ひどい頭痛。一言、けれども身がるく立つて、すぐ伯母さんのうしろの茶棚

の中にいつも藥が入つてゐるので茶棚の戸をお開けになつた。お開けになる音を聞いたところまでしかはつきりしません。驚いたからではありません。頭痛だと言はれても、常の通り、大變がおこつたと思ひもしないうちに、伯父さまを抱いて一緒にはげしく机の上に倒れてしまひました。伯父さまが倒れかゝつたとも思はれません、伯母さんがさゝへようとしたとも思はれません、非常な眩暈が自分に來たとその時伯母さんは瞬間思ひちがへました。それ程急にひどく倒れたのでせう。伯父さまの上半身をやうやく抱き起して、伯母さんは自分には何事もおこつたのではないとやがて氣がつきました。伯父さまの全身は全くきかないやうです。どうしたんだらうね。いつもの通りのしづかなお言葉です。伯母さんのすぐわきに藥が散つてゐます。藥は深い鑵に入れてあるので、そつと開けなければ開く筈はありません。伯父さまが蓋をお開けになつた程の時を茶棚の戸が開く音が

して、それから一緒に倒れるまでの間に想像してみることは出來ませぬ。強心劑の一包を片手でやうやくあけましたらお口をあけて待つていらつしやる。口中に藥を注ぎこそしましたが口もとも平常の通りです。茶棚のわきに水指がありました。水は一人ではあがれませんでしたが、飲み込む樣子も平常の通りです。氣分もよくなつてきた。頭痛もしないよ、涙を拭いてもらはうか、眼まひはちつともしない。原稿が間に合ふかね、全身がきかぬことにお氣がつかれないやうです。さう、五十枚あるし、あそこで第三章の骨は出てゐるしね、暫くお言葉もありません。あいにくあのお手傳の少女も使ひに出たばかりでした。伯母さんは半身をしつかり支へて、ただお顏を注意してゐました。何のたるみもなく、顏色もいつもの通りです。茶の間は近頃東の方からいつもいい風が來ます。そちらのお庭に眼をやつてぢつと見てゐます。涼しい風だね。實に氣もちよささうです。そのまゝ、

東の方のお庭に眼をやつたまゝ見つめていらつしやいます。また同じ言葉をお仰つて涼風のすぎるのをおつと感じていらつしやる樣子です。そのまま深い昏睡、意識はつひにかへりませんでした。呼吸は翌日零時半頃までありましたが、燃えつくした炎の餘燼にすぎませんでした。

（以下略――＊加藤一朗君を指す）

と報せられ、なほ進步といふことについては、日頃、

俺は近頃かういふことを考へてきた、肉體は亡びても人類の進步はある、俺はいつかは死ぬさ、しかし永久に俺は進步してゐる、云々。

と仰有つてゐたとある。「私は毎日進步してゐる、私の本領はこれだ」さう

セザンヌ翁がエミール・ベルナールに向つて揚言したのを思ひ合はせた。

書齋からさがつて先生が倒れられた八疊の茶の間に入つた。平常ならここが居間になつてゐて、萬事先生の好みにしたがつて整頓してゐるのだが、流石に取亂れてゐる。部屋の隅に誰やら行儀わるく仰向けにひつくり返つてゐる洋服の人がゐる。二男の鷄二君だつた。鷄二君はお客が來たと思つたのか、むつくり起きあがつて、充血した眼をこすりながら、わたしの方に向いた。

「よう、菊池さんか。……」

わたしは默つて頭をさげた。

土葬にするか火葬にするか、これが先づ大問題であつた。奥さんの話によれば、先生は亡くなつた土地に土葬にして欲しいと仰有つてゐたさうである。先生の御希望だから一も二もなくこれを尊重すべきだが、さて實際問題として今どき果してそんなことがこの土地で許可されるか、どうかである。小磯の方に

在る共同墓地なら出來なくもないといふ話で下見分もされたが、墓地にする地所にも、どうやら先生の好みが生前あつたらしく、それが町中の地福寺の境内、門を入つて直ぐ左崖下の、まるで墓地になつてゐない普通の地所であるから、厄介なのである。ともあれこの事については有島生馬さんにも御意見があらうから、いづれお出を待つて決めることにしたがよいと、未解決のまま、それはそれで、それ以前にすべきことが色々あつた。

「菊池さん、ひとつ會計の方をお願ひします。」

奥さんの依頼であつた。ところが土地の事情に一番明るいのはわたしだつたので、自然、會計だけをじつと見てすましてゐるわけにはいかないのである。電話は隣りの高宮さんにお願ひして使はして貰ふことにした。その上で、東京へ全部至急報。先づ有島さんに訃を知らした。日光に寫生旅行中。山崎斌さんにもかけたが、輕井澤に旅行中など、これが先づ先生が亡くなられた朝、大磯

から出た電話の皮切りであつた。

「兄貴はどうしたんだらうなあ……」

鷄二君は楠雄さんを待ち草疲れてゐる樣子だが、どうしても會社の方に電話が通じない。

「翁助さんはどうしたんです。」

わたしは尋ねる。たしか澁谷の何番だがとのことで、かけて見る。いつから要領を得ない。

「あいつのことだから、どこに行つてゐるかもわかんないが、ニュースで放送されたんなら、どつかで聞いて飛んでくるだらう、ま、いいや。」

聞けば楠雄さんも翁助さんも、まだ一度も大磯に來たことがない、さういふ鷄二君が初めてだと言ふ。先生の大磯在住が二年半にもなるのに、これはまたどうしたことだらう。わたしは觸れたくない先生の家庭生活の內をちらつと覗

いた氣がした。

「蠟燭がどこかで何とかなりませんか。」

「線香を少し餘分に求めておかないとあとで困りあしませんか。」

「死亡診斷書が二通入用ですが……」

「役場に屆出て、證明書を貰つておかなければ、火葬土葬いづれにしても必要になるんぢやありませんかな。」

などと、わたしに求められる用事は、時刻がたつにしたがつて、暑さと共に殖える一方であつた。

わたしは蠟燭の無心をしに出掛けた。その足で飯久保といふ醫者に急いだ。恰度、東海道に出て、鴫立澤の方へ坂を下り、照ヶ崎海岸の入口あたりを小走りしてゐると、ラジオの合唱が、わたしと一緒に走つて來ながら、

……………

實をとりて胸にあつれば
新なり流離の憂
海の日の沈むを見れば
たぎり落つ異郷の涙
思ひやる八重の汐々
いづれの日にか國に歸らむ

「……七時半だな。あの合唱は。……」
歌に誘はれて、ぐつと呼吸がつまるやうな悲しさがこみ上げてきた。
醫者から一度戻つて、こんどは役場へ急いだ。下り列車が著いたと見えて、一本道を驛の方から來る人の顔には土地の臭ひがない。訃を聞いて東京から來た人々であらうと思つた。中でもひときは目を惹いた和服の老人があつた。老

人とはいつでも堂々たる體軀の人で、巖丈な緒い顔に特長があつた。(文學者ではないらしいが……或ひは先生の家に行く人ではないのかも知れない) さう思ひながら、それでも妙に氣にしながら行き過ぎ、驛の前まで行くと、

「やあ——、」

と明るく聲をかける人がある。高倉テルさんだつた。いつものやうにニコニコと、どこで聞いたか、いきなり「土葬にするんださうですな。」

と仰有る。返事にまごついてゐると、間髪を入れず、

「土葬とは、めづらしい。アナクロニズムですな。ハハハハ」

と、なんだか英迦に御機嫌だつた。

役場で用をすまして歸つて見ると、さつき道で逢つた老人が茶の間に正坐して見える。悠々せまらず扇子を使つてゐる樣子から察すると、親戚のかたにちがひないと思つたが、一應鷄二君にそつと訊いて見たら、吉村樹さんだよと教

へてくれた。千曲川スケッチの扉に吉村樹君にさゝぐ、とあるその人である。島崎先生におんぶさつて遊ばして貰つたといふ人だが、話が反對ぢやないかなと言つて見たいほど逞しい。

織田正信、勝本清一郎さんたちを初め、出版社の人も陸續と見えた。楠雄さんも家族をつれ、また靜子夫人の親戚の方々も。列車が著くたびの人々だつたから、混雜にもそれに應じて波があつた。八疊、六疊、四疊半の三間しかない家に弔問客が溢れた。著さがここだけは一倍に思はれた。

土葬にするか火葬にするかは、まだ決まらない。

山崎さんが息せき切るやうにして駈けつけた。待たれるのは、そこで、有島さんだけだつたが、これは遂に翌二十三日午後三時著の列車になつた。

改めて土葬說・火葬說、神葬說・佛葬說と色々の說がこんがらかつて問題になり、中には先生は昔クリスチャンでもあつたんだがなどと言ひ出して見る人

もあつた。結局遺言どほり土葬說に話が傾き、佛式によらうといふことにほゞ決つた。が、次は土葬する土地、寺の問題である。第一の候補地は前に話したやうに大礒町の中にある地福寺であつた。この境内には先生のふるいお馴染の天明老人が住み、また閑寂なここの梅林を先生が好まれたいはれがあるので、意見の一致を見た。しかし、寺の敷地が官有になつてゐる、拂下げを願ひ出て許可がおりるにしても二日や三日で片がつくものではなからうといふ點で、また話が停滯した。隣りの高宮さんがそのことを心配して、晚、自宅に町長、署長、地福寺の住職を招いた。その席には鷄二君、山崎さん、わたしも出て色々話合つたが、遺憾ながらこの人たちの力ではどうにもなりさうもないことがわかり、協議の結果はかねて先生に好意を寄せてをられる縣知事の近藤壤太郎氏に縋つて見ようといふことになつた。二十二日の夜はもう十二時近かつた。

近藤知事からどんな返事があるかわからない。が、よしんば火葬やむなしと

いふことになるとしても、この暑さに遺骸をそのままにしておくのは宜しくない。臭ひが出るといふ。そこで二十三日はドライ・アイス探しである。大磯には勿論無い。附近の町にもない。神奈川縣で製造してゐるところが無い。東京なら確かだが、さて時局柄果して入手出來るかどうか、とまあここまで事情がわかるには、殆んど半日かかつてしまつた。幸ひこれについても知事の心配をいただき、その紹介で漸く願望が達せられることになつたが、築地まで、それも一度では持ち切れないし、二度に取りに行かなければ、一度にさう澤山買つて來ても無駄になつてしまふといふ。今、當時の手帖を見ると、ドライ・アイス三十圓とあるから、それだけ買つて來たものらしい。

有島さんがいらした頃には、近藤知事から地福寺土葬の件につき許可の電話があつた。葬儀屋から棺が運びこまれる時がきた。が、見れば、いくら資材が乏しくなつたとはいへ、これは又ボール紙製のやうに薄手の棺である。一應、

先生をこの中に移して、ドライ・アイスの一回分を詰めたものの、その脆弱さが思ひやられた。
「ね君、いいかい、わしらはあれを擔いで行くんだよ、毀れたらどうする。土葬にするんだよ、すぐ腐つちまわあな。……だからさ、君の方の事情もさうだらう、それあよーくわかつた。けれどもだな、ね君、ここはそんな無情なことは言はずとさ、あれはあれとしてだ、賴む、何とかも一つ、一とまはり大きいのを搜してくれよ、そして二重になつてもいいぢやないか、隙間が出來たらおが屑でも詰めればいいだらう。なあ賴む、わし恩を被る、な、な、これこのとほり、……」
額緣に入れたら、そのまま平田篤胤といつても佐久間象山といつても、成程といはれさうな風采の山崎さん、兩手をついたわけではないが、頭を下げての愛嬌ある交涉ぶりである。葬儀屋は呑まれて、笑つてしまふ。

次は墓標である。初め持ちこんできたのは鐵道の枕木ほどのものである。これにも吃驚りした山崎さん、が、これも拜み倒して先づ註文どほりのものに換へさせた。

有島さんが筆を揮はれた。藤村島崎春樹墓。

翁助さんはどうしたんだらう。今もつて姿が見えない。どことかに來てゐるといふことを耳にしないではないが、事情はどうであれ、亡父のそばにゐて貰ひたい、ゐさせてあげて貰ひたいといふ感が深い。

ほんとの近親者だけのお通夜で二十三日の夜がふけた。まづまづ明日のお葬式にまで、滯りなく濟ぎつけたといふ安堵からでもあらうか、みんなもいくぶん氣樂になつて、賑やかな食膳であつた。

出棺は二十四日朝九時と決まつた。棺は山崎さんの發議で、みんなで擔いで

行かうといふことになつた。いよいよ最後のお別れをして棺に釘を打つ時が來ると、しめやかな中から啜り泣きの聲が堰を切つたやうに、あちこちで起つた。四疊半の書齋から廊下に少し溢れるくらゐの、ほんとに親しい人たちだけであつた。奥さんは先生のそばに始終立つてをられて、この旅だつ人のためにと、煙草入や萬年筆など遺愛の品々をお持たせになり、最後に毛利家所藏になる雪舟筆の山水長卷の複製をそれに加へられた。この二三日の慌しい中で、靜かな時を見つけて、それをわたしにも見せて下さつた。「東方の門」御執筆の餘暇には屢〻この繪卷物を繰りのべて樂しまれたとか、「東方の門」から受ける繪畫的印象がこの雪舟の繪から受けるものと同じやうだとの奥さんの感想が、先生を喜ばしたとかいふお話であつた。とにかく非常に長い卷繪で、複製などとは到底思へないほど精巧なものであつた。土葬になつた後で、勿論ほんものと思はれたからにちがひない、安田靫彥さんが仰天されたといふ噂があつたくら

ゐた。

九時。門前に一同整列する時が來た。わたしはまるで羊飼ひ犬（シープ・ドッグ）みたいに先頭に走り、後に廻りして、知事を初め、町長、署長さんたちに先づ列んで貰ひ、楠雄さん、鷄二君、奧さんたち近親の人たちを案内し、棺の位置を決め、一般會葬者たちに挨拶し、さて統監道を東海道に出、臺町の坂を鴫立澤にくだつて歩いて頂くことを傳へた。行列は、町の人の噂を後で聞いたことからでもわかるやうに、明治、大正、昭和と三代に亙つて文學史に亘きな足跡を遺した人の葬式とはわからなかつたといふ、それほどひつそりと、ものものしさから遠かつた。

奧さんは白い花を一輪さした花瓶を持つて歩かれた。これは安田さんの庭にこの朝咲いた大輪の佛桑華であつた。安田夫人からの贈物で、贈られた花の數は澤山あり、どれもみな見事なものばかりであつたが、始終先生の御位牌につ

き添ひ、墓碑の前まで持つて行かれたこの一輪の白い花の、目覺めるやうな清楚な風情に及ぶものはなかつたやうである。その花びらが一枚、葉が一枚、大磯での葬式の日の思ひ出にもと、天明老人がその萎れる前に押花にしてくれた。今もなほわたしの座右にある。

文樹院靜屋藤村居士

本堂での式がすんだ。

地福寺の門を入ると左手。老梅が枝を交へてゐるその下の五六坪を墓地と決めて穴が掘られた。一間ぐらゐの深さだが、いざ棺を寐かして入れるだんになると、少し小さいといふので更に掘り擴げられた。頭を北向にしておろす棺の綱を、いつ、どこから現はれたのか、翁助さんが緊かと握つてゐた。

奥さんは、遂に見ずじまひで逝かれた先生の棺に、昭和十八年十月一日發行

になつてゐる中央公論、すなはち「東方の門」が絶筆として載つてゐる雜誌を、そッと抛りこまれた。深い穴の底でボトンといふ音がした。その後で土を一とすくひ掬つて、棺にかけられた。——

それがすむと、十四五人の人たちが身內、親戚の順に土をかけ、最後に墓標が見上げるやうに建てられた。それから有島さんが老梅の幹に背をもたせかけるやうな位置に立つて、「夜明け前」を繙かれた。

「木曾路はすべて山の中である。あるところは岨づたひに行く崖の道であり、あるところは數十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入口である。一筋の街道はこの深い森林地帶を貫いてゐた。東ざかひの櫻澤から西の十曲峠まで、木曾十一宿はこの街道に添ふて、二十二里餘に亙る長い谿谷の間に散在してゐた。道路の位置も幾度も改ま

つたもので、古道はいつの間にか深い山間に埋れた。名高い桟（かけはし）も、蔦のかづらを頼みにしたやうな危い場所ではなくなつて、徳川時代の末には既に渡ることの出來る橋であつた。新規に新規にと出來た道はだんだん谷の下の位置へと降つて來た。道の狹いところは、木を伐つて並べ、藤づるでからめ、それで街道の狹いのを補つた。長い間にこの木曾路に起つて來た變化は、いくらかづつでも嶮岨な山坂の多いところを歩きよくした。そのかはり大雨ごとにやつて來る河水の氾濫が旅行を困難にする。その度に旅人は最寄り最寄りの宿場に逗留して、道路の開通を待つこともめづらしくない。……馬籠は木曾十一宿の一つで、この長い谿谷の盡きたところにある。西よりする木曾路の最初の入口にあたる。そこは美濃境にも近い。美濃方面から十曲峠に添ふて、まがりくねつた山坂を攀ぢ登つて來るものは、高い峠の上の位置にこの宿（しゆく）を見つける。街道の兩側には一段づつ石垣

を築いてその上に民家を建てたやうなところで、風雪を凌ぐための石を載せた板屋根がその左右に並んでゐる。宿場らしい高札の立つところを中心に、本陣、問屋、年寄、傳馬役、定歩行役、水役、七里役などより成る百軒ばかりの家々が主な部分で、まだその他に宿内の控へとなつてゐる小名の家數を加へると六十軒ばかりの民家を數へる。荒町、みづや、横手、中のかや、岩田、峠などの部落がそれだ。そこの宿はづれでは狸の膏藥を賣る。名物栗こはめしの看板を掛けて、往來の客を待つ御休處もある。山の中とは言ひながら、廣い空は惠那山の麓の方にひらけて、美濃の平野を望むことの出來るやうな位置にもある。何となく西の空氣も通つて來るやうなところだ。」

先生の遺髪と爪が、小さな箱に收められ――いづれは馬籠に持つて行かれる

のだが、――これが東京の青山齋場での告別式にと、大磯驛を出たのは同じ日の午後三時十九分であつた。

奥さんがこれを守つて行かれた後は、この二三日來の騷ぎも大波が引いたやうにひつそりして、秋が來てゐることを沁々知つた。

鷄二君は、八疊の茶の間に仰向けにひつくり返つて、のびたかたちだ。

わたしも、到頭ひつくり返つた。

「……馬籠に行つて見ようかな。」

そんな考へがふッと泛んだ。

「ふるさと」に來て

十月九日は藤村先生の七七忌にあたり、馬籠の永昌寺では先生の遺髪埋葬式が行はれることになつてゐる。先生と同じ町で暮してきたわたしは折々の先生のお話で聽いたり、名物を頂戴したりして、懐しく思ひこそすれ、嘗て馬籠などといふところに行くことを考へたことはなかつたが、先生にお別れしてしまふと、先々のことは兎も角、ここ暫くはこの機會を逃したら馬籠に出かける元氣はまづ無からうと思はれたので、實はなにかと慌しい仕事を持つてゐることではあり、好きな癖に旅に出るまでは人一倍億劫がりやのわたしではあつたけれど、遂に意を決して旅に出ることにした。道連れは先生の御子息たち、楠雄、

鶏二、蕎助さんと柳子さんの夫君にあたる井出五郎君、それに楠雄氏夫人と六才になる次男樹夫君である。

馬籠は信州とはいへ、又木曾にあるとはいつても、美濃に近く、鐵道による なら中央線落合川驛で下車するのであるが、これが新宿から行つても、東海道線で名古屋經由で廻つても、時間はほぼ同じである。わたしたちは新宿からの夜汽車よりも、明るいうちに行程をすます豫定のたつ東海道線を擇び、遺髪埋葬式の前々日、卽ち十月七日、朝九時の急行で東京を發つた。もし名古屋で中央線の連絡さへうまくいけば落合川驛には同日の午後五時半、馬籠へはいくら登りの山徑とはいへ七時には著くことになるのだつた、が、この豫定は名古屋ですつかり狂つてしまつて、落合川驛著は旣に七時半を過ぎて八時近くなつてゐた。

落合川驛に降りる。わたしたちを乘せて來た最終の汽車は、闇の中に激しい呼吸づかひの音だけ殘して吸ひこまれて行つた。一つ置いて先の驛から長野縣になると說明されたここは岐阜縣であり、これから山徑を二時間近く登つて辿り著く馬籠は長野縣になるといふわけの位置に身を置いてゐるわたしたちであつた。

馬籠からわざわざ迎ひに出て來てゐる人があつた。末木さんといつて、後で楠雄氏夫人の令兄とわかつたが、紹介されて挨拶した折に、わたしは、どこかで見かけた人のやうだ、と思つた。

落合川驛を出る。各自の荷物は明日馬で運び上げて貰ふといふことにして近くの運送屋に預け、三つの提灯に照し出された道を步く。右に櫻の木が並び、切り立つた道下に木曾川のダムの水が黑く滿々としてゐる。遠く微かにざーッと沸り落ちる水の音。ものの一丁も步いたところで線路を左に橫切ると、それ

から後は、ただ登りに登るゴロタ石の山徑である。

わたしはふッと思ひ出す。八月二十六日、青山齋場で先生の告別式をすましてきた暑さがりの時刻、今にも夕立が來さうな黒雲の空、暑いことといつたらなかつた。番町の家はどの部屋も人がいつぱいで、脚を伸すところもなかつた。どこか一と息つくところはないかな、さう考へて探し當てたのがお茶室の六疊であつた。既に三人の見知らない先客があつたが、失禮は勘辨して貰はうと無遠慮に坐りこんでほッとする。三人の先客はと見れば三人とも暑さにうだり、顔、疲勞の色が深い。訊けば二人は馬籠の和尙さん、そしても一人は……

「末木さん。」

わたしは提灯を持つて先に歩く人に聲をかける。「あなたおやなかつたかな、あの告別式の日、番町の家で遭つたのは、……」

「さうです。」

「道理で。さつきから、どつかで見かけたことのあるやうだがと、氣になつてしかたがなかつた。……」

それからわたしは、あの時の坊さんたちに變りはないか知ら、こんなに早く馬籠に來るやうなことにならうとはあの時夢にも思はなかつたがなどと語つたが――さう、あの日の夜、藤村先生の遺髪は永昌寺、天德寺の和尙さんや、安藤茂一さんやこの末木さんたちに護られて、新宿から故郷に持ち歸られたのだつた。

三人とは列んで通れない石ばかりの山徑を、わたしは呼吸を整へ整へ登つた。四邊の景色は夜に沈んですこしもわからなかつたが、思ひがけない高いところに一點の灯を見つけると、そこに人家の在ることを知り、徑の下の方にゴトゴトいふ音で、水車小屋の在ることを感じた。空は曇つてゐた。けれども厝の上

からいふと八日月がかかつてゐる筈だ。何も見えないとはいつても、この仄々とした明るさは氣の故ばかりではなささうだ。わたしは西東もわからない他國の山徑を辿つてゐる自分を、僅か十一二時間前の大磯の自分とは思へないやうな氣持である。旅に馴れない者にありがちな感傷といつてしまへばそれまでであるが、思へば沼津を西に東海道線を通るのは、上り下りの違ひこそあれ歐羅巴から西比利亞・敦賀經由で歸つて來た時以來初めてだから十三年になる。また、名古屋から中央線に乘るのは、當時夏休みを大阪にゐて、關東大震災のため東京に駈け戻つた時以來のことだから二十餘年になる。落合川といふところもその時通つたに違ひなからうが、十年二十年昔のことがかう生々しく思ひ出されるのに、十時間餘しか置いてゐない今朝のことが今、夢のやうに遠い。

藤村先生の死についても同じやうなことがいへる。初七日、三七日、四七日と供養をすまし、初めて迎へるお逮夜には、大磯地福寺の定爺さんと淸光さん

と孰れもまだ國民學校に通つてゐる可愛い坊さんが來てお經をあげた。そして
いつか早、四十九日が流れようとしてゐるのだが、日が經つにしたがつて、こ
の世の人でない先生が、身近に、そして生前より却つて强く感じられる……。
わたしが先生に親しくお目にかかるやうになつたのは歐羅巴から歸つてから
始まり、今日まで十三年に亘るが、晚年の六年、殊に大磯に居を構へられてか
らの二年半といふものは、靜子夫人の御感想を借りるなら、あのセザンヌとエ
ミール・ベルナールのやうな關係を想はれるのださうである。光榮これに過ぎ
るものはないが、遺憾ながらそんな自負はわたしのどこを押してもすこしも無
い。

永くお目にかかつてゐるうちには、それとなく色々な敎へを受けた。けれど
もその中で二つの事だけは、はつきりしたことがわからずじまひに終つた。何
もないやうなことのやうだけれども、その孰れの時も、先生とわたしとただ

二人きりのその場の空氣が微妙だつたので、屹度先生から何か特別なお話があつたらうものを、殘念な氣がしてならない。

その一つは、一昨々年の暮もぐつと押詰つた或る日のこと。わたしは玄關だけで失禮するつもりで、寒さお見舞に番町にお訪ねした。珍らしく先生がすぐお出になつた。元氣な御様子に安心して歸らうとしたら、ちよつと、と言つて奥に引込まれ、再び顔を出されると、これを君にあげよう、と半紙に無雜作にくるんだものを差出された。容積の割にづッしり重いので、何だらう、といふ顔をしたのであらう。そしたら、

「これについては、いづれ悠つくり話します。」

と仰有つただけだつた。が、その瞬間の先生の眼が忘れられない。

自家に歸つて開けて見たら、純白の和紙の中から、小さい多面體の硝子製インク壺が出てきた。蓋を取るとインクの痕で濡れてゐた。

もう一つは、今年の八月五日。わたしは先生御夫妻と大磯から二宮農事試験所へと半日を送つた。連日の暑さは、時折雨を伴つて、裸でゐてもまだ辛かつた。午前九時に出るからとのお話だつたので、この暑さだし、謂はば散歩だからと勝手に自分に斷つて、半袖の開襟シャツの輕裝で伺ふと、玄關から奥の廊下に先生を見てヒヤリとした。先生はネクタイ、カラーの端然たる正裝で、本當は椅子に腰掛けていらしたのだらうが、わたしは後でその有無を尋ねて見ようかと思つたほど、まるで鎧櫃に腰を下ろしてゐる古武士を見た思ひだつた。

奥の四疊半。この部屋で「東方の門」が執筆されてゐたのであるが、そこに通されてお待ちしてゐると、やがて先生が見えた。改まつて居ずまひを正すわたしを前にして、先生は兩手をつき、

「お待ちしてゐました。」

と挨拶された。

自動車が來た。わたしたちは東海道が一筋に透いて見える老松のトンネルを二宮へと走つた。雨は歇んでゐたが、いつ又降つてくるかわからない空模様である。二宮の農事試驗所では折から水蜜や天眞桃が盛りであつた。が、この日の遠出(ドライヴ)にはそれを食べるのとは別の目的があつたのである。

一週間ばかり前、この時は用事で先生をお訪ねしたのだつたが、話の後で、

「あなたに、話したいことがあるのだが、……」

と仰有る。その御様子が事務的なことではなく、何か非常に個人的なことらしい。奥さんでも傍にお在でだつたら話の大體の見當が或ひは察しられたかもわからないのに、生憎東京である。前々から何か考へていらつしてのお言葉らしいが、その場では結局何も仰有らないで、そのうちに日を決めて農事試驗所にでも出かけることにしよう、そして悠つくり話すことにしませう、といふことだつた。

それにも拘らず、この「話」は伺へずじまひでこの日の散歩を終つた。あれほど沁んみり仰有つた譯はば約束である、先生がお忘れになつてしまつたといふことは絶對にないのだ、といふのは、遠出から大磯に歸つての別れしなに、今日もお話しする機會を失つたが、そのうちに又……と仰有つたことから見てもわかる。それなら先生はいつたい何をあれほど話したいと考へていらしたんだらうか。これが五日のことで、二十二日には忽然として他界されてしまつた。——

ものの一時間も山徑を登つて來て、さあここから舊中仙道です、馬籠まであと三分の一ですと敎へられる夜道に憩ふ。夜明け前に出て來る新茶屋はと訊くと、右坂下一丁のところといふ話。それでは木曾路の西の入口に建つといふあの芭蕉の句碑も遠くない。送られつ送りつ果は木曾の秋、それを口吟みながら四邊を眺めるのだつたが、ただ茫として夜だけが深い。

舊中仙道に入る。道は廣く平坦になり、中のかやと教へられるあたり、疎らな人家の前を通ると、雨戶の節穴から灯が漏れてゐる。吃驚りするほど突拍子もない聲で馬が嘶く。疲れで鈍くなつてゐるわたしの腦神經にピアノ線を引掻き廻したやうに精力的である。步くこと四五丁。右の森が諏訪神社、秋祭が終つたところださうだ。夜目にも白く幟がたち、寄進者に大脇文平の名が見える。森の奧から祭の慰勞の宴ででもあらうか、草津ぶしの合唱が聽こえてくる。草津ぶしは變だなと言つたら、近年輸入されたものだと誰かが辯解する。もうそろそろ馬籠になつてもよささうなものだと、內心弱音を吐いてゐるわたしは、このあたりが荒町だと教へられ、道を降り、又登りして、右に大きな首さらしの岩の在るところまで辿り、馬籠に入る前にも一度、凄い坂路を登らせられた。流石に脚の關節が慄へる心もとなさであつた。

夜も十時に近く、兩側の民家は暗かつた。楠雄さん所有の「綠屋」の前を登ると、隣り空地が藤村先生誕生の本陣跡。その又隣りが大黑屋、またその隣りが八幡屋‥‥と、道は相變らず登りで、そしてわたしたちの宿はいつかう現れない。

不案内な土地に夜辿り著いて朝を思ふほど愉しいことはなからう。鷄二、翁助、五郞さんたちと枕を列べて寢た末木さんの二階八疊の一夜は、折坂川の川音を遙か枕の下の方に聽いて明けた。あれが惠那山、あそこが神坂峠、霧ケ原、湯舟澤と、手に取るやうに展望出來る馬籠は、木曾路とはいつても西に明るく展けた山の背に聚つた一部落であると見た。山水の流れで口を漱ぎ顏を洗ひ、改めて舊中仙道に佇んで下に續く家を見ると、兩側に各四十軒ばかりもあるであらうか。明治天皇停驛之蹟（明治十三年六月二十八日御巡幸爲記念、大正十四年二月

十一日建之の字が彫つてある）は、部落の中央に、それと直ぐ目に留る位置に在る。本陣跡はこの碑の背後、約二百坪ばかり、現在は點々と柿の木を植ゑた大脇文平氏の野菜畑となつてゐるが、藤村先生の父正樹翁の隱居所だけは火災をまぬかれて當時のまゝ殘つてゐる。裏の竹藪を拔けて谷間の向ふ丘の端に永昌寺の森が見える。

馬籠に著いた中一日おいて十月九日は、朝から怪しい空模樣で、昨夜の雨のあと今日の天氣が危まれたが如何とも仕方がない。埋葬式は神坂村と木曾教育會の合同葬といふことで十二時に始まつた。老杉に圍まれた西澤山永昌禪寺をさして集つて來る人が後を絕たず、殊に本堂正面の庭は學校から各自腰掛を携へて來た村童の顏で埋まつてしまつた。

先生の遺影は大磯、番町、永昌寺と三枚とも同じもので、この六月十六日、森川寫眞館で寫された三枚の中の一枚である。先生も喜ばれたくらゐよく撮れ

たもので、これが御供物や花に埋つて正面に飾つてある。亡き人を祀つてある
やうな氣は到底しない。

式の開始を告げる大太鼓が鳴りわたる。永昌寺の住職佐々木完道師を初め、
大桑村池口寺の西澤清洲師、吾妻村妻籠の光德寺住職三浦親章師、湯舟澤天德
寺の石原宗純師が現はれる。そして、わたしにとつては大磯と東京ですまして
來て三度つらなる藤村先生の葬式が始まつた。型の如く始まつて型の如く進行
――といひたいところだが、西澤清洲といふ和尚さんの弔辭は一風變つてゐた。

――島崎春樹君、いや藤村先生、なあ君、君は憶えてをるぢやらうか、君が
七つの時わしは九つぢやつた。君はおかつぱ頭をして可愛い子供ぢやつた。わ
しは君があの隱居所でよう勉强しよつたのを憶えてをる。わしと君とは喧嘩も
したが仲良く遊びもした。しかし君も、いや先生、君も偉く出世してよかつた
なあ。あの頃を憶ふにつけてもさ、わしが君を弔ふやうなことになるとは夢思

はなかつたが、なあ君、人の生命といふものは不思議なものぢやないか……といふやうな調子である。

先生はと見れば額縁の中で眞面目に聽いていられるやうな、また微笑されてゐるやうな、である。

式後、藤村先生について何か語れといふ依頼を受けた。註文を訊くと故郷の者は先生がどれだけ偉かつたか、少しも知らないから、そのへんのところを語つて貰ひたい、といふ。頗る難しい註文だし、苦笑を誘はれるやうな話だつたが、引受けざるを得ないことになつて語つたわたしの話は、晩年の藤村先生についてで、大略左のやうなことであつた。

昭和十五年の秋、わたしは見なれない人の訪問を受けた。年の頃六十ぐらゐ、天明愛彦さんといつた。座敷に通して話を伺つて見ると、かねてわたしが土地

の表具師に依頼してある「千曲川の旅情のうた」を見、且噂を聞いて、同じ町に島崎藤村先生を識つてゐる人がゐるその懐しさいつぱいで訪ねて來た、新片町時代の知合ひで、爾來久しく御無沙汰してゐるが、先生はお變りないだらうか、今度お逢ひの節は呉々も宜敷くお傳へ願ひたい、といふやうな話である。

翌日先生にこの話を傳へると、さういふ人の記憶があると仰有つた。

それまで先生は休養といふと湯ヶ原によく出掛けられた。わたしはその往復の途中、いつか、そしてせめて一度ぐらゐは先生に大磯に下車して頂きたいと、ひそかに希ふところがあつたが、言ひ出し兼ねてゐた。お湯こそ無いが大磯は大磯で湯ヶ原と違つた好さがあらうと、さう思つてゐたからである。

天明氏を得て、先生を大磯に迎へたいわたしの氣持は俄然積極的になつた。勢ひ相互の話を取持つのにそれがだんだん潤色されていつたのは當然なことだが、それにしても、先生に屆いた天明氏の長文の手紙を見せて頂いた時には、

その土地自慢のほどが少し心配になつた。

年が明けた。すると一月十六日の左義長の祭を見物に行きたいが宿はあるかといふ先生のお話。そこでわたしは大磯にただ一軒ある大内館に部屋の下見をして取決めたが、先生は東京から國府津に宿をとり、萬一大磯の宿が思はしくない場合には、そちらに戻るといふ愼重さであつた。幸ひにしてそんなことにならずに濟んだが。

左義長の當夜、先生は石井鶴三さんや中勘助さんと一緒に暗い海邊に出て、點火された松飾の山の炎上する火に照し出された波濤を、或ひは漁師の騷ぎを凝つと視てをられた。この海は先生が投身を考へられたことのある海である。北風が殊のほか嚴しい夜のことで、夫人の心遣ひは大變なやうだつた。

先生御夫妻から大磯に家探しの話が出たのは御歸京後間もなくのことで、二三度夫人御來磯の後の二月十七日になると「島崎寓」の門札を天明さんが書い

た。永らく空いてゐたらしく、八疊、六疊、四疊半の家で、最初下見に來た時には荒れ放題に荒れてゐて、そばを上下する東海道線の列車の轟音に、家は慄へあがるほどだつたが、一度び先生が入られると文字どほり面目一新して、端然と居ずまひを正し、簡素な中にも深い淨しさと靜かさとを醸してきたのには、勘からず驚異の目を瞠つたものである。

翌三月下旬の某日、安田靫彦さんが自邸で梅見の宴を催された。この時も石井さんと中さんとが見えた。安田靫彦さんは御祕藏の良寛の遺品を澤山御披露になり、宗達の仔犬圖も壁間に懸けられた。穩かな日の午後三時頃から始まつた宴は夜九時近くに果て、一足先に東京に歸られた石井さん、中さんの後から、先生は數丁離れた家まで提灯に照し出された小徑を歩かれた。その時である、良寛が子供を相手に遊んだのはどんな心からだつたのだらう、ただ好きからだつたのか、それとも寂しいからだつたのだらうかといふ意味のことをぽつりと

仰有つて、それ切り默つて暫く地面を見ていられたのを覺えてゐる。

先生は東京と大磯の間をこの二年半のあひだ、幾度か往復された。しかしそれも頻繁とか屢〻といふわけではなく、孰れにしても一度出掛けられると、何かお仕事に一區切りつけるまでは輕々しく動かれなかつたやうである。ただわたしからいへば、何といつても大磯御在住日が淺いのと、その他のことで、そのうちには倦きてしまつて東京に引上げられるのではなからうかと、いつも心配が先きになつてならなかつた。

その故か、東京のお宅から大磯に書物を運んだり、ラジオの器械を運んだり、小さな家具を運んだりすることを頼まれることがだんだん度び重なると、それが大磯生活を樂しんでをられる證(しるし)でもあるやうに思へて、嬉しく自家の者一同と語り合つたものである。

先生をお訪ねすると、土地の職人が入つてゐるのを見掛けることが多くなり

それが垣根を全部新しく作り換へたり、樹を植ゑ換へたりしてゐる。時には番町の庭に植つてゐるものを東京の職人が持つて來たり、高麗神社の祭に伴をして苗木を求め、それを指示された位置に植ゑたりしてゐた。かうして庭はお訪ねするたびに何がなし明るくなり、優しさ、澁さを具へて、少しづつその形を整へていつた。

書齋の東窓のそばで、座敷の廊下からいふと右手に、直徑五寸ばかりの槇が三本あつた。この樹はもちろん前々から植つてゐたものだが、わたしはその切株を見るまでは、それがいつの間に切られたのかすこしも氣がつかなかつた。このくらゐに生長するまでには相當年月を經たものだらうに、それも借家についてゐるもので、無くなればそれと直ぐ感づかれるものだらうにと、わたしは先生の思ひ切りよさに冷りとした。

「槇といふ樹は深山にあるものです。」

だから切つてしまつたと仰有るのだらうが、これは少々亂暴だと思ふ一方、わたしは先生がいよいよこの家に本腰を据ゑられる決意をそれとなく知つた。家と土地を買ひとられることを伺つたのは、その後であつた。

先生はまた廊下から垣根や隣家の屋根越しに、東海道の松並木の梢が眺められるのを喜ばれた。何十年何百年を經た松の木かわからないが、それは大磯から國府津に行く街道に綠のトンネルを作つてゐる並木の入口の松である。先生の御感懷は窮知すべくもないが、この梢を眺めてをられる想ひには、先生が漂泊の旅を國府津在前羽村の透谷の假寓の方へつづけられた頃のこと、或ひは遠く故郷の馬籠のことが描かれてゐるのではなからうかと、老樹と老人との語らひを色々に想像して見るのだつた。

話は前に戻るが、安田さん宅の集りの時、話がたまたま雪舟のことに觸れた。すると安田さんが、雪舟の傑作といはれるものは、七十を過ぎてから出來たも

のだと傳へられてゐますと仰有つた。

先生が恰度その七十になられた時だつたので、座に居る人々にはこの言葉がひとしほ感銘深く、これからが樂しみですねといふ言葉が誰かから出ると、皆その前祝の言葉に和して、先生にお慶びの眼を贈つたことであつた。

今から考へると、その頃には既に一東方の門一が先生の胸中に醞釀してゐたに違ひないのだが、その時はもちろんその後も當分の間、先生はこれについてはすこしも口にされたことがなく、寧ろ世間の臆測の方が賑かだつた。新井白石を書かれるんだとか、岡倉天心を書かれるんだとか、色んな噂がたち、わたしもよく質問を受けたが、そんなことをお尋ねする勇氣は無かつた。

ただわたしとしては老先生のお仕事が日一日と進むでゐることを考へながら、これを自分の勉強の鞭として感ずることが深かつた。

先生はたいがい夏は朝五時、冬は六時に起床されて、時には家人も知らない

うちに、二十年來實行されてゐる自彊體操をやられ、終つたところで口を漱ぎ茶を喫んで、一日の初めに想ひを致されるのが慣しであつた。

朝は茶粥で腹をつくり、午前は殆んど仕事に當てられた。

机に向つて前と右側とに座蒲團を敷かれ、書きものに疲れると右側の座蒲團に移られた。ただこの時でも先生は横から机を前にして坐つてをられたのは注意を要することで、決して机と一列に横に坐つて、左肘をついたりするやうな行儀の惡いことは絕對にされなかつた。

面白いことには、さうして一服しながら庭を凝つと視ていられるかと思ふと、突然座を起つて庭に出、草或ひは樹の植つてゐる位置を換へられたこともあつたといふ。

「東方の門」執筆中の先生の時々の顏の老けかたは、今憶ひ出しても本當にひどかつた。滅切り老けられたなあ、とそのお仕事の激しさが思はれて痛々しさ

に胸塞がる思ひだつたが、後で夫人に、先生が机に向つたまま默欲いていられることがあつたとも承つて、わたしも目頭が熱くなるのを覺えた。
「東方の門」第三章、つまり原稿紙四十九枚の筆を擱かれる前の十日間は、「ほんたうに寢食を忘れてゐた。」
と夫人に洩らされたさうだが、それにしてもその後に忽然として來た「休息」は餘りにも哭しい。
先生の耳の周りに四日目毎に針をうつてゐた按摩さんが最後に先生を診たのは、つい先日の八月十七日、先生が倒れられる三日弱前である。その時のことを語つて、先生の體はだいぶ凝つてゐた。それで少し揉んでさしあげてゐると、
『あまり揉まなくても宜しい。疲れが出て好い氣持になると大事な仕事が出來なくなるからね。』
と仰有つた。

「も少し氣のすむまで揉まして貰つてたら、こんなことにはならなかつたんだが、……」

と見えない目をしば叩いて撫然としてゐた。――

それから、藤村先生の文學上の業績については、わたしは村人を前にして、先生が大好きだつた惠那山を例に引き、好い山と眺める人もあらう。面白くない山と評する人もあらう。じかし好き嫌ひ孰れであらうとも惠那山は巖として惠那山であつて、これをあの美しさ嚴しさに築きあげた自然の努力がいつさいの批評に無言の解答を與へるであらうといふやうなことを語つて話を結んだ。

いつからか降り出してゐた雨が、また小止みになつたので、その間に遺燼の埋葬が行はれることになつた。先生の墓地には既に冬子夫人の墓と、みどり、

孝子、縫子と三人姉妹の名を連らねた墓が建つてゐた。その二つの細長い墓碑の間が空けてあつたので、そこに先生の遺髪を埋葬した。ごく近親の人たちばかりで、式に立合つたのは三十人を越えないと見えたが、いかにも静かな野邊の葬ひであつた。

式が濟んで本堂に歸る頃には、沛然たる雨になつた。參會者はあらまし下山してしまつたが、それでもまだ七八十人の客が殘り、この人たちのためにもと、本堂一杯に食膳が列べられた。襖、障子、ことごとく取外された暗い本堂の内部から表を眺めると、雨に降りこめられた午後三時頃の仄明るい外が眩しいほどで、高い天井を支へてゐる柱の間を、輕衫ばきで世話をやく人たちの動きが影繪のやうに美しい。

さうするうちに、全山は乳白色の濃霧に包まれてしまつたが、わたしはその中にあつて、さながら雲上に在るかのやうな錯覺に落ちた。

末木さんの家は馬籠部落の一番坂上に在るから、ここを離れることは馬籠を一歩踏出すことになる。右手に惠那山を眺めながら東に走るこの一筋の舊中仙道の先は約十五丁にして馬籠峠となり、さらに約一里半にして妻籠に降り、末は遠く江戸に到るといふ。

明治十四年四月、それは藤村先生が十歳の時であつたさうだ。おかつぱ頭の先生は玩具の鞄に金平糖を入れてもらひ、それを提げるのを樂しみたがら、可愛い草鞋ばきで江戸に旅立たれたと傳へられてゐるが、明治、大正、昭和を歩いて來て、七十二歳のこの八月大磯で永眠されるまで、先生の旅は何と長かつたことであらう。

遺骸埋葬式が終つた夜、わたしは小止みになつた雨の合間を見て、この道に佇んだ。東京まで八十有餘里……

幼な友達

年に二度も三度もあることではなし、去年もあんなに喜ばれたことだから、なんとしてでも先生の誕生日には好物のおはぎをつくつてさしあげたい、たとへ五つか六つしか出來なくつてもいいと、そんなことが小さなわたしの家では、旣に暮ごろから、思ひ出したやうに時々話題にのぼつてゐた。その誕生日も間近に迫つた。糯米と小豆と砂糖、慾をいへばそれに黃粉と胡麻と、そんなものをほんの少量づつでいい、なんとかして蒐めなければならんとわたしも思ひ、妻も考へた。砂糖はかねてこの日のためにと思つて夏頃から月々の乏しい配給の頭をはねて幾分の貯へがあつたが、充分ではない。同じさし上げるものなら

……と、わたしは山裾の道を廻つて裏の村に自轉車をとばした。半農の知人を訪ねて二里ばかりの道を歩いた。親戚にも無心した。少量だからといつてしまへばそれまでだが、乏しい中から皆欣んで願ひを叶へてくれたのは有難かつた。そこで、妻は工藝品でも創り出すほどの愼重さ、作りそこなつたら大變と、餡の艶出しなど、殊のほか丹念であつた。

大磯の梅の花は驛上の老樹から始まる。暮のうちにもう二三輪の花をつけるが、その白さは光るやうに目に沁みる。二月になるとそれほど珍らしくもなくなり、かへつて垣根のあたりに目を惹く鶯が、かじかんだ風景に暖い息吹きをあたへる。

先生が大磯に定住されてから迎へられる二度目の誕生日は、寒さは嚴しかつたが、それでも del の八疊に陽射が柔かであつた。部屋の隅に寒椿が一輪生けてあつた。赤かつた。「東方の門」の序の章が發表になつた後のことで、思ひた

しか吻つとしてをられるやうであつた。火鉢を挾み、鐵瓶の湯がひく絹糸のやうな音。相對して仰ぎ見るやうな老先生は七十二歳になられた。

話はなんといつても世界の情勢のこと、戰爭の推移のことであつたが、正午も近く奥さんと三人でわたしもお祝の食膳に招ばれる時になると、食べもののこと、殊に馬籠の冬の食べもののことであつた。歸りには先頃屆いたといふ木曾の人たちのその冬の食べものの燒米を、念入りな說明つきで頂戴した。

去年の誕生日は新嘉坡が陷落した直後で、その記念にもと歡びの言葉を揮毫されたり、珍らしく大きい字で、深夜坐南軒明月照吾膝と杜子美の詩の一節を書いて夫人に與へられたり、また「春」のお話などがあつたが、今年は如何にも好々爺らしく、長閑であつた。序の章が發表になるまでのお疲れが出たり、ひと安心されたりしたからでもあつたらう、と何も取りたてていふほどのことのなかつたことが、そのまま誕生日のお祝と思つて、歸路につくあたり、梅の

樹の下を歩きながら、わたしの氣持も澄んでゐた。——それにしてもと、わたしは思はず笑つた。先刻いざ歸るだんになつた時、燒米を持つて來させようと、先生が山本さん（家政婦）を呼ばれた時のあの「おい！」の大きな聲だつたこと、先生のどこにあんな大きな若々しい聲がひそんでゐたのだらう。また老先生の日ごろの嚴しさに似ずうちとけたあの言葉遣ひ、「——そしたらね君……だつたんだつてさあ」と、いかにもその屈托なささうだつたのが、いつまでも嬉しく、本當に好いお誕生日だつたと、密にお喜び申上げたことであつた。が、この誕生日を最後に、先生はそれから半年のちに忽然としてこの世を去られた。

明けて昭和十九年二月十七日。

もし藤村先生が御存命だつたら七十三歳の誕生日には、わたしは木曾上松町

で催された追悼會につらなつた。そしてその翌日は上松を發つて須原、野尻と木曾川沿ひに汽車で下り、三留野下車、妻籠まで一里、そこから馬籠まで二里、合せて約三里の舊中仙道を歩いてゐた。

馬籠は二度目であつた。去年十月九日、遺髮埋葬式が「夜明け前」の萬福寺で名高い永昌寺で營まれた際、東海道を名古屋經由落合川驛で下車、遺族の人たちのお伴をして行つた。この徑は驛を出て馬籠までただ登りに登つて行く一里半ばかりの凹凸のはげしい山徑で、近いといふ以外には餘り面白い徑ではなかつた。あつとも、先生の筆のあとを刻んだ道しるべが建つてゐたり、百本のうち僅か二本だけどうやら育つた樣の木があつて、これは「樹蔭が無くて夏は骨が折れるだらう」といふ心遣ひから先生が寄贈して植ゑさせられたものだといふから、一度は通つて見られるのも宜しからうが。

三留野から道は平坦で、變化に富んでゐた。木曾川はいつも右手に流れてゐ

た。その流れに沿つた崖上の一筋道を行くと、曲りくねつて、先々に新しい眺めが展けた。薄つすらと雪が降りてゐて、數へられるくらゐの足跡しかなかつた。凍てついてゐて、硝子の上を歩いてゐる感じだつた。陽を浴びることの遲い二月の谿間の冷凍感は、せつなかつた。わたしの前を歩く人は安藤茂一さんといつて、元來馬籠の人であるが、木曾谿で教育のことに携つてゐる人、後ろを歩いて來る人は松原常雄さんといつて安藤さんの良き共力者の一人、共にわたしには初めての馬籠への舊中仙道を案内してくれる人たちであつた。

　和合といふ部落を通り、鐵道のガードをくゞると、道は木曾川を覗くやうな斷崖の上に伸び、鐵橋や發電所が景色の中に現はれた。そして、行詰りかと怪しまれる邊まで歩いて行くと、道は、一方は吾妻橋を渡つて賤母の御料林へ、一方は左に折れ、蘭川ぞひに明るく、妻籠を指向して辿つてゐた。

「やうやく來たらしいな。」

わたしがさう獨り言のやうに呟くと、

「さうです、あすこが妻籠です。」

と安藤さんが言ふ。

木曾谿に見たやうな深さも鋭さもない穩かな山峽であつた。屋根の傾斜の緩かな廂の長い家々が點在してゐる遠景は、そのまま瑞西あたりに見かける山峽の村落を聯想させるものがある。春を待ちながら嚴しい冬の自然的環境の中で、暫く呼吸をひそめてゐる人々の生活が思ひやられる。屋根瓦はどの家も銀色に燻つてゐる。ほどよく伸びた檜や杉がその間を濃い綠で埋め、白壁の家、白壁の塀が美しい。

「あの立派な邸は?……」

「あれですか。」

安藤さんが言ふ。「あれが、林六郎さんの家です。」

わたしたちは持參した握飯を、この林六郎氏の家で開けさして貰ふことにしてゐた。この家は屋號を奥谷といひ、「夜明け前」に妻籠の脇本陣として出てくる扇屋得右衛門の家である。明治十三年六月二十八日、明治天皇がこの地を御巡幸の際、御小休されたといふ由緒ある家で、本陣の人々が妻籠から散り、その跡も現在では帝室林野局支局と變つてしまつてゐるところから、謂はばこの土地の歴史的唯一の遺跡となつてゐるわけである。

林六郎氏とは既に遺髪埋葬式の際に逢つてゐた。永昌寺の客間の、庭に面した廊下で自己紹介を受けたのだつたが、その節の話に、「夜明け前」に出てくる木曾福島の代官山村氏所藏の宗紫山の畫軸の説明に、「……竹に蘭をあしらつて」云々（第二部二四八頁一三行）とあるが、實は蘭ではなく菊の間違ひだ。校正の間違ひならすぐ訂正されさうなものなのに、どうもそんな様子もない、

「そ、それで寫眞、寫眞を撮つて送つてあげたがな、わ、わしらの言ふことは、どうでもいいと、お、思つてたんぢやらう、へ、返事がつひにありませんでしたわい。」

と愬へ、だからといつて別にそれを氣にしてゐる風もない人であつた。

一別以來の挨拶がすんだ。何か記念に一筆と言つて絢爛たる表裝の帳面を出されたのにはドキッとしたが、名刺がはりにとうまいことを言はれるのに釣られて、下手糞な字を書いた。安藤さん、松原さんもそれぞれ名を誌した。それからまだ先のあることだしするので、辨當を開けたが、その間にも六郎氏は忙しく動いて、島崎正樹翁といつて藤村先生の父、卽ち「夜明け前」の青山半藏の書を幾つも展覽してくれ、問題の宗紫山の軸も持出された。この家の主人のいつかの話に誤りはなかつた。――その後わたしは八十六版の頁を見たが蘭は相變らず菊と訂正されてゐなかつた。

「おゆふさまにもお變りありませんか。」
安藤さんが尋ねる。そのうちには出て見えるだらうと思つた人が容易に見えない、その不審のひびきがこの挨拶にこもつてゐた。
「おふくろかな、おふくろは、い、今、隱居所の方で厄介になつてゐましてな・・・」
「馬籠の？」
「さう、馬籠のな。ここよりよつぽど凌ぎよいと見えて、このぶんでは冬越しして、春にでもなつて歸つてくるつもりかも知れませんわい、いや、よ、よつぽど氣に入つたらしい。」
わたしは言葉をはさんだ。
「お幾つになられるんです。」
「ええと七十二・・・いや三かな・・・、藤村先生と同じだから・・・」

「それなら三でせう。」
「お、おやあ、七十、さ、三ですな。」
と言ひ、六郎さんはその後で「な、なにしろ、を、幼な友達だつたんですからなあ……」
と附け加へて微笑して見せる。
この幼な友達といふことを聴いた瞬間、わたしは思ひ當ることがあつた。それは大磯でのお通夜の晩のことであつた。幼な友達が見えてゐるが、なにしろ老齢ではあるし、遙々木曾から出て來たもんだからといふので、燒香をすまされると直ぐお歸りになつて、親戚の別莊にをられる、と誰言ふともない話を耳にしたこと、その別莊といふのが、わたしの家と線路を距てて目と鼻のところに在る家であつたことを後で知つて、殘念に思つたことであつた。
さてはあの時の幼な友達といふのは、この林六郎氏の母堂であつたのか、お

ゆふさま、と今話題にのぼつてゐる人のことだつたのか。

「……先生が亡くなられた時、大磯にお見えになつたつて、そのかたですか。」

「そ、さうですよ、えらい著さだつたさうですな、あの時は、……」

「で、今は馬籠にいられるといふんですか。」

「文平の家の隠居所にな。」

それから六郎さんはちよつと間をおいて、

藤村先生に「初戀」といふ詩があるでせう、ご御存知かな、え？　あの、あ、相手は、う、うちのおふくろのことでな、え、え、えッ！」

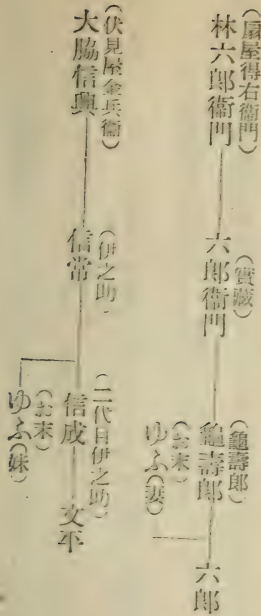
笑ふでもなし、笑はぬでもなし、このえええッが、莫迦に可笑しかつた。

馬籠に、わたしは早く行きたくなつた。早く行つてそのおゆふさまといふ先生の幼な友達に逢つて見たくなつた。今は亡き先生の幼い頃の面影が、この人から屹度窺へるにちがひない。そんな期待で胸がふくらんだ。

わたしは安藤さん松原さんを促して座を起つた。玄關を出ようとする前に、安藤さんに勸められたので、舊家といふものの臺所を見せて貰つた。圍爐裏を切つた板敷の間の大きさも大きかつたが、ここの土間を玄關から裏に往時は馬が荷をつけたまま通り拔けたといふから、笑つた。

この妻籠の奥谷と馬籠の大黑屋とは親戚の關係にある。左に系圖を掲げて、その說明に代へよう。（　）の中は「夜明け前」に出てくる假名である。

（扇屋得右衞門）林六郎衞門――（寶藏）六郎衞門――（龜壽郎）龜壽郎――六郎
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（お末）ゆふ（妻）

（伏見屋金兵衞）大脇信興――（伊之助）信常――（二代目伊之助）信成――文平
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　（お末）ゆふ（妹）

妻籠を離れると間もなく橋場といふところに來た。ここで左に道をとれば大平峠を越えて飯田に行くといふ。わたしたちは右に、橋を渡つて平坦な路を悠つくり登つて行つた。寒さが少しゆるんできた。ことによると雨になるんぢやないかな、そんな話が安藤さんと松原さんの間で交はされる。大妻籠といふ部落を過ぎる。人家も稀になつた。山路は淺い山峽の中を少しづつ登りになる。

――まだあげ初めし前髪の……

わたしは「初戀」の詩を聲なく口ずさむ。

まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の實に
人こひ初めしはじめなり

林檎畑の樹の下に
おのづからなる細道は
誰が踏みそめしかたみぞと
問ひたまふこそうれしけれ

その人が馬籠にゐる。今は大黒屋の所有になつてゐるとはいつても、「夜明

け前」の青山吉左衞門や半藏とは切つても切れないあの本陣跡の一隅の中二階家に、藤村先生が幼時の勉强部屋でもあつたといふあの隱居所にゐる。どんな人だらう。わたしはむしやうにその人が懷しかつた、大病で亡くなられた筈の先生が、七十三といふ歲を馬籠で生きていらつしやるのに逢へるほどに。……

「やゝあ……？」

先に行く安藤さんが急に立停つた。深い谷川を距てて對岸の御料林の中腹に視線がとまつてゐる。わたしも松原さんも無言のまま同じ方向に眼を据ゑた。雪が降つてきた。黑い冬山を背景にして降る雪はよけいに目立つので、それに吃驚りして……かと思つたが、さうでもないらしい。暫く無言がつづく。

「……道を間違へたらしい。」

獨り言のやうに呟いて、安藤さんはなほも考へこんでゐる。雪は思ひなしか急にひどくなつてきた。「ちよつとここに待つてゐて下さい。少し先を見て來ま

す。」

さう言ひのこして安藤さんは更に奥に行つたが、やがて戻つて來て、行つて行けないことはないと思ふが、矢張り對岸の路まで渡つた方がいいと言ひ、

「變だ變だとさつきから思つてたら……いやあ、これは大失策をやらかした。」

わたしたちは滑るやうにして山の中腹を谷に降りた。手頃な石の上を跳んで川を渡つた。さてそれから對岸の山の中腹の路まで、這ひ上るほどの苦勞をした。

「狸か狐がこのへんにはゐるんぢやないですか。」

さう言つて、わたしは笑つた。

「いやあどうも、眞晝間この失態ぢや、はい何と言はれても、……」

と、安藤さんも頭を掻いて笑つた。松原さんはと見れば、この先輩の失策に對して失禮にならない程度の謹嚴な笑ひを笑つてゐる。

わたしたちは相變らず安藤さん、わたし、松原さんの順で御料林の中の路を歩いた。男埵の御野立所跡といふこれも明治天皇の御巡行を記念する石碑の建つてゐるあたりまで來た。雪はますます激しい降りになつて、四五間先の見透しも覺束ない。

「おやッ！」

わたしは聲をあげた。

「…………？」

先を歩く安藤さんが振返つて不審な顔。

「末木さんぢやないかな、末木さんだ、あれは、ほら。」

輕衫にゴム長靴、懐手をして、髪から肩から雪をふりかけられたやうな人が、俯向きかげんに雪の奥から一歩一歩姿を現して來る。

矢張りさうだつた。正しく去年の秋以來、久しぶりで見る末木利一さんだつ

た。迎ひにこんなところまで、それも雪の用意もなく、見えたのだ。

「やどうも……路を間違へてしまつて、……」

安藤さんが詫びる。「下り谷のところで、路が、ほれ近頃出來たあの路がいいもんだから、うつかりそつちの方に行つてさあ、はいそのまま男埀川を渡つて向ふの山に入りこんでしまつた。氣がついた時には男瀧女瀧のあたりに來てるといふもんだ、雪は降つてくるし……いやあどうもたいへんな失敗をやらかいてしまつたよ。遲くなつて、すまなんだ。」

「なあに、どうせ一本道だで、どこかで逢ふに決つとると思つて……雪でえらかつたでせう。」

さう言ひながら末木さんは有無を言はさずわたしの肩から荷を取つて背負つた。縱一列にわたしたちは、往時御料林監視所のあつた番所跡の前を通り、そして一石と名附けられる山の中を通り終ると、路は急に坂になり峠を指して迂

つた。落合川驛からの登りに較べると、今日は距離こそ長かつたが、殆んど登るといふ感じなしに登つて來た。といつて草疲れが出ないわけではなかつたが、峠に來れば後は下り道と決つてゐる。わたしは馬力を出した。

峠に漸く辿り著いて一と息入れてゐると、馬籠の方から蜂谷哲郎氏を初め十人ばかりの人が迎ひに登つて來るのが見られた。皆、去年の埋葬式で逢つた人たちであつたが、「夜明け前」で送り迎へした當時の人々もこんなであつたらうかと、そのやさしさを今に見る思ひがした。

雪は峠までで、峠を越えるとただ深い曇天であつた。馬籠まで約三十分の下り路の眺めに、まづ惠那山が全貌を現はし、それに續いて遠く美濃の山が展けることが期待されたのだつたが、それは外れた。

馬籠に著いた時は三時を少し廻つてゐた。安藤さんは自宅に松原さんを伴つて降りて行き、わたしは上扇屋、または陣場扇屋と呼ばれてゐる部落取つ附き

の末木利一さんかたに旅裝を解いた。既に去年厄介になつた家なので、あれこれと當時の記憶が、部屋部屋や庭に、また二階からする眺めに蘇つてきた。炬燵に入つて、久々の挨拶を話し合ふころになると、外は凄い雪降りと變つてゐた。

晩の食事には數名の藤村先生に近しい人たちが集つた。名物の御幣餅も出た。なにかと物資に窮屈な折から、こんなものも今では滅多に作れないと見えて、皆珍しがつた。御幣五ン合と土地では言はれる、それほど美味しい餅の串を、中でも遲れて馳けつけた大黒屋の當主大脇文平さんが、超人的にやつて見せたのは愉快だつた。

「文平さん。」

わたしは既にさう呼びかけるほどの親しみを持つてゐた。「隱居所におゆふさまが見えてゐるさうですね。」

「はあ、つ、妻籠より淺ぎよいと言つて、落ち、落ちついてゐます。」

林六郎氏のは、せつかちからの吃り見たいであるが、文平さんのは、愼重さから言葉が思ふやうに轉り出て來ないといつたかたちである。

「御老體でこの冬越しも樂ぢやないでせうね、どうぞ大事にしてあげて下さい。……お目にかかれますかしら。」

「當人も、喜ぶ、ことでせう。ぜ、是非、會つてやつて下さい。」

「有難いですね。いづれ前もつてあなたに報せますから、紹介して下さい、どうぞ。」

と賴んでから、わたしは言つた。

「『初戀』の人ですつてね、妻籠で伺つて來ましたよ」

「さう、……」

文平さんは、ギヨロッとわたしを見て、微笑した。

「その林檎の木といふのは、今も本陣跡にあるんですか。」

「いゝいや、もうとつくに無くなりました。

「どうして。」

「どうしてだか、知りません、が、多分、あまり古くなつてし、しまつたから、ではないでせうか、切り倒して、し、しまつたんですな。」

「惜しいなあ、おあ、もう痕かたも無いんですね。」

「いや、その切株、切株ぐらゐは殘つてゐませう。」

「どこに。」

「う、自家の縁の下に、抛りこ、こんであつたと、思ひますが、なんなら一度、見ておきませう。」

翌朝、わたしは安藤さんと松原さんとを誘つて永昌寺に行つた。お經をあげて貰ひ、それから和尚さんの部屋に招かれて行つた。去年以來の話がここでも

はずんだ。陽のうららかな午前で、雪溶けの水が樋を傳つて泉水に音をたてて流れ落ちてゐた。

先生の墓には一面まだ殘雪が深く、樹蔭は冷々と暗かつた。お詣りする頭の上の枝から雪が崩れ落ちて、頸に降りかかつた。

馬籠の一日は何彼と忙しさに追はれ、悠つくりお目にかかりたいと希つたおゆふさま訪問はその翌日に延びた。

七十三のお婆さん、おゆふさまといふ人をさう思ひながら、わたしは雪の溶けきらない本陣跡の畑みちを隱居所の方へ歩いた。小ぢんまりした中二階の隱居所の、白い障子が、裏の竹藪の緑と雪に映え、朝陽を受けて、いかにもこの國特有の清潔で簡素な美しさを見せてゐた。

「ごめんください。」

大黒屋の内庭に入り、隠居所の前に立つて、わたしは梯子段の奥に挨拶の聲をかけた。どんな返事があるか、その聲におゆふさまといふ人の姿まで描き出さうとするやうなわたしだつた。二階からきこえた聲は意外にも若々しかつた。さあさ、お待ちしてゐました、ずつとお上りなさつて、さ、さ、とはきはきと張りのある返事である。三疊が上りはなの部屋で、奥は八疊であつた。いづれも西向きに明るかつた。おゆふさまはこの人がと不審しいくらゐ若かつた。それでゐて、その容姿から受ける感じは、先生の言ひ草ではないが、いかにも靜かな老年に達した人のやう、きちんと兩掌を膝に置いて語る端正さは、先生を女にして見たらかうもあらうかと思はれるほどであつた。が、その若々しさにいたつては、七十三のこれがあの老先生と同じ年の人だとは、信じられないほどだつた。

「東方の門」にかかつてをられたつい去年の、或る日或る時の憔悴された老

先生が目に泛ぶ。――
「春さんも亡くなつてしまつてなあ、……」
と先生のことを先づ言ひ、「でもまあ、こんな寒い時によくお越しなさつた。」
「一昨日、上松に來まして……奥谷でこちらにお在でのことを伺つて、樂しみにして參りました。」
「それがな、こんなに長くなるつもりではなかつたんですが、案外居心地がいいのでな、あなた。……どうせ用の無いからだです、春にでもなつて暖くなつたら歸らうと思つてゐます。」
おゆふさまは、それから、豫めその用意があつたと見えて、お茶をたてて下さつた。部屋の一隅で釜の前に正坐したこの人が、まづ深紅の袱紗を帶にはさむところは極めて印象的であつた。
朝を思ひ　また夕を思ふべし

古人のあとを求めず古人の求めたるところを求めよと南山大師の筆の道に
　も見えたり

山は靜かにして性をやしなひ　水は動いて情をなぐさむ

そんな言葉がここの小屛風にも先生の筆でしるしてある。わたしは炬燵に入つたままでそれを讀む。

「六郎さんから『初戀』の話を伺ひましたが……」

わたしは薩摩芋を使つて作られたお菓子を頂戴しながら言つて見る。

「なんだか春さんがそんな詩を書いてゐるつて皆が言ひますが、なんでもないことなんですよ、いえ、ほら、あそこのところに林檎の木がありましてな、春さんがよく來て、くれと言ふもんだから、いつもわたしがちぎつて抛つてやる、それを春さん、前垂をひろげて受け取つた、たつたそれだけのことだつたんですが、あんなことを思つてたなんてな、ちつとも知りませんでしたよ。」

「先生が前垂をひろげて受け取つたので、おゆふさまは、まさか木に登られたんでは、……」

「なに二階から手の届くところにあつたものだから、ちぎつて抛つたんです。」

「先生が馬籠から江戸に發たれたのは九つか十の時だつていふぢやありませんか。」

「ですから、ねえ、あなた、春さんも早熟だつたもんでさあ。」

この早熟には、座にゐた安藤さんも松原さんも笑つてしまつた。

たて切つた障子の向ふで、さらさらと竹藪の葉ずれの音がある。

早熟だつた先生も今は亡いし、竹藪の中に座敷牢の跡はあるが、そこに「青山半藏」も既に亡い。――

「で、いつお發ちかな、皆さん。」

「今日、三時頃十曲峠から落合川に下りようと思つてゐます。」

「それは急な話。まあ悠つくりされていつたらいかがかな、……もつとも御都合もあろうことでせうし、無理にお引止めしても、……」

「はい、この次ぎは悠つくりお伺ひして、またお話を聞かして頂きます。どうぞ、くれぐれもお體を大事に……」

「靜子さんも、その後御變りないかな、よろしく傳へて下さい。なにしろな、あなた、春さんといふ人はむづかしい人だつたから、さぞかし骨が折れたでせうと思ひましてなあ……」

惠那山は、今日は全貌を現はして、ぐつと前に迫つてゐた。空氣は爽かに澄んで、折坂川の水音も耳に響いてくるほどである。

愈〻發つ時がきたら、文平さんも挨拶に見えた。そして紙包を出して言ふ。

「林檎の木を、出して、み、見ましたが、殆んど、腐つて、腐つてしまつてゐ

ました。が、それでもと思つて、よささうなところを、切つてきて見ました。よ、宜しかつたら、ご御持參下さい。それからこつちの包は、蕗、蕗のとうです。本陣跡の雪を掻いて見、見ましたら……小さくて、指の先ぐらゐですが、それでも、このくらゐのは、仲々美味いので、……」

末木利一さんは、歸りも送つて來て、新茶屋のあの芭蕉の句碑前で別れた。

夕ばえ

先生が亡くなられた頃の、夕ばえの美しかつたことといつたらなかつた。あんまり美しく、あんまり儚いので、またいつ見られるかわからないと思ふ惜しさから、空を仰ぎ讃へて夕暮の一と時を過ごした。かれこれ一週間もそんな夕はつづいたらうか。珍らしいことだと思ふにつけ、先生がもう歸らぬ人になつてしまはれたといふことにそれが結ばれて、「死」は花のやうに、繪のやうに、歌のやうに、哀しく胸に迫つた。

先生のお宅の座敷から見るすぐ左手の庭に、大輪の朝顔が咲いてゐた。先生が自分で種子を播き、生垣を作つて樂しまれたものであつたが、秋の更けると

共に枯れ萎れてしまつた。一年草であることが別離の感をひとしほ深いものにした。

冬が訪れて梅の花のたよりを聞くころになつた。すると、去年の今頃は、庭に野梅を一株植ゑたいと思ふ。さう仰有つてゐる人だつたのに……と、先生を尋ねる思ひして、白い花を見に歩くわたしだつた。

彼岸の中日、この日地福寺にお詣りしたら、境内は勿論のこと、地下数尺のところに眠つていられる先生の、あの墓の上いちめん、梅の花が眞つ白に散つてゐた。

そんな日々の間に、わたしは先生のふるさとを訪ねて馬籠に二度行つたが、思へば、この八ヶ月ばかりの間といふものは、行住坐臥、あの夕ばえの空の美しかつたことを思ひ合せて、老先生追慕の念に明け暮れた。

五月も下旬に入つた頃、木曾上松町の安藤茂一さんから速達が届いた。日と

場所を指定した上、是非來いといふほどの案内だつたから、それだけでも斷る餘地がなかつたが、それはそれとして、却つてわたし自身、是が非でも出かけたいと、その手紙を讀んで行くうちに考へ始めたのは、可笑しかつた。安藤さんは言ふのである。木曾奈良井で下車したら翌日用事をすまして隣り部落の平澤まで歩いて村祭を見物し、その後で汽車で上松に來て一泊、翌朝は森林鐵道で御料林を數里入つた赤澤に行き、ここで山小舍に泊つて初夏の山奥を滿喫し、翌日再び上松に出、三留野まで汽車、ここから賤母の御料林を歩いて山口村經由馬籠行の豫定をたててゐると。そしてその後にぽつりと一行、

白雲や青葉若葉の三十里

とある。誰の作かわからないが、いづれは木曾路を歌つた有名人の句だらうと思ひ、新綠の山路にわたしの空想は一瞬にして飛んだ。後日、寢覺の床に遊んだ時、この句を刻んだ碑によつて、明治二十六年、子規が木曾路を馬籠の方

へ歩いた時の作と知つた。
木曾行は決つた。しかしその前に、わたしは鷄二君と翁助さんが、セレベスのマカッサルに、洛陽の方の戰線にそれぞれ軍屬畫家として發つて行つたことを語つておかなければならない。尤も翁助君の支那行は五月に入つてからのことで、わたしが第三回目の木曾の旅から歸つてからと記憶してゐるから話が前後するが。
鷄二君の歡送會は、長兄楠雄さんの自宅で催された。さういふと何だか大袈裟にきこゆるかも知れないが、鷄二君の親友二人とわたしと、その時はまだ支那行が決つてゐなかつた翁助さんと楠雄さん、この六人だけの集りだつた。いづれ遠慮のない間柄だつたし、セレベス往復が心配なく出來たころだつたしするので、話は勢ひ陽氣であつた。
「で、歸りはいつ頃の豫定?」

く、いまのところ八月の末には彼方を發たうと思つてる。」
「仕度はもうすつかり出來た？」
「なにも仕度なんてありあしない。着のみ着のままさ。でも鐵兜だけは持つて行くかな。」
と鷄二君は、ここでニャリとした。話上手な人だけに、また何かあるなと思つたら果して、
「その鐵兜で醜態を演じちやつたよ。僕防空班長にさせられてさ、こないだ婦人部隊の防空演習に出ろといふわけなんだ。勝手がわからないもんだから弱つたと思つたんだが、出ないわけに行かないやね。仕方がない、武裝凛々しく出たさ。そしたら婦人部隊ちやーんと整列してゐてね、僕が皆の前に立つ、『氣をつけェー！』ときた。そこまでは凄く上出來だつたんだが、後がいけない。『班長に對し奉り——最敬禮！』といふ號令なんだ。吃驚りするやら慌てるやら、

僕、うつかり、鐵兜をソフトと思ひちがひしてさ、いくら摘み上げようとしても、つるつるしてダーメなんだ。馴れないことつて、ほんとに、……」

仕様のない鷄二君だよ。

この晩最大の御馳走の、お、は、ぎ、のことも忘れられない。それは實に澤山、文字どほり山のやうに出た。この世のものでない甘さだつた。最初それが食卓に運ばれた時は一時に歡聲があがつた。それが次は歎聲と變つた。皆が顔を見合つた。誰も暫く手を出さず、眼を据ゑて思ひ入つてゐた。一番いいのは各人幾つづつといふことを決めるか、皿に別々分けて出されるかすれば、問題はないのだが、かう山盛に、食ひ放題だといはんばかりにして前に置かれると、お代りはまだ澤山あるから、と言はれても、それはそれ、これはこれで、勃然として一種の鬪爭心が起るのである。ヨーシー　と既に帶を弛めにかかるやうな姿勢をとるもの、ツーンと逸早く眼で甜めまはして堪能してゐるやうな聲、ホッホ

ッホッと一人悦に入つてゐるもの、さまざまである。が、共通して皆一様にわけもなくヘラヘラと笑つてゐるこれが油断ならない、曲者なのである。

で、食つた。皆もの凄く食つた。あげくは食卓から後退りして、柱に、襖に、箪笥にもたれかかつて、肩で息をしてゐた。何か言はうにも、聲がつづかない。それがまた可笑しくて可笑しくて、――

「たのむ、わ、笑は、さないで、くれ。」

鷄二君は床の間を枕に、延びて、息を入れてゐたが、やがてスヤスヤと寝こんでしまつた。流石に一座も暫く靜まり、それぞれ深刻な顔、呆けた顔をして天井を睨んでゐたが、

「皆さん、もつといかがです。」

と房子さんの誘ひに、暫く考へたあげく、むつくり起きて、更にもう一つ摘んだ人があつたのには、笑ひなきであつた。

わたしは色々と愚にもつかないことを喋つたかもわからない。けれども、これこそ、わたしが鶏二君と笑つたこの世での最後の笑であつたのではなからうかと思つてゐる。といふわけは、彼は豫定どほりセレベスに行つた。しかし八月末には歸らず、秋冬春と過ぎて今なほ、杳として消息がない。今年は早、藤村先生の三回忌になるが、その頃に馬籠に眠つてゐる兩親のもとに歸つてくる人となつたのではなからうか。……

さういへば洛陽の方に行つた翁助さんはどうしてゐるだらう。歡送會は矢張り楠雄さんの自宅でやり、この時はもう鶏二君は居ず、石塚友二さんが見えたきりだつた。この集りも極く内輪のもので、いづれ次の夜、盛大な友人の集りが澁谷であるといふことだつたが、この時、わたしが先日馬籠に行つて來たことを話したら、翁助さんの話で、手許に馬籠の寫眞が數葉あるから、發つ前に送らうとのことだ。大旅行を控へて忙しい人のことだから、さうは言つても果

して送つて貰へるかどうかと思つてゐたら、丁寧に別れの挨拶と一緒に封じて忘れてなかつた。川端康成さんの撮影になるものださうで、誰よりも馬籠を見てゐると思つてゐるわたしでさへ、更にかうして寫眞で始終そこに結ばれてゐるといふことが非常に嬉しく、蓊助さんへの感謝はもちろん、川端さんにはお目にかかつたこともないのに、お禮の手紙を認めたことであつた。

寫眞は馬籠の十月、村祭の日らしく、安藤茂一さんの三浦屋の前で奥さんが子供を背負つて後ろ向きに立つてゐたり、可愛いい水車が廻り、コスモスが咲いてゐる風景の中で子供たちが遊んでゐるところなどで、どの一枚をとつて見ても、そこに直ぐ入つて行けるわたしだつた。川端さんからの御返事によると、中里恒子さんがたも一緒で、中仙道を西に、馬籠を通つて、中津町へ抜けられたらしい。それにしても馬籠の村祭は十月八日の頃、紅葉の候には約二週間ばかり早く、いづれ昔のことではあつたやうだが、折角の旅を、と、惜しいこと

に思はれてならない。

閑話休題。今日はいよいよ馬籠行といふ日の早朝、わたしたちは木曾御料林の奥深く、赤澤の山小舍で眼を覺した。前日奈良井から行を共にした安藤茂一さんと原彌三郎さんと三人づれである。上松町に出たのが十時頃、ここで前回の馬籠行にも一緒だつた松原常雄さんも加はり、午後一番の汽車で三留野に向つた。そして約四十分後には、二月十七日藤村先生の誕生日の翌日、身を切られるやうな寒さのなかを木曾川沿ひに歩いた同じ道に立つてゐた。六月に入つたばかりの頃で、新綠にはやや遲い憾みがあつたが、それでも海邊の大磯などの綠とは比較にならぬほど瑞々しかつた。綠の量、その種類の豐富さは、嘗て、蕭條とした眞冬の印象しかないわたしには、驚異歡喜の情だけをもつては言ひ盡せない、仄かに憂鬱なものが感じられた。

吾妻橋に來た。左に曲れば半里たらずで妻籠に行けるのをそのまま橋を渡る。

蘭川が木曾川に落合ふところである。道は舊中仙道から岐れて賤母の御料林に入り、奔流する木曾川を始終樹々を透して右に見て、一路緑のトンネルである。檜、ねずこ、あすならう、高野槇、さはらと所謂木曾の五木は、どれを見ても天にとどくばかりである。

安藤さんが、この木は何になるのですとをしへてくれる。そのそばから原さんが、ほれこれを御覽なさい、この木は何になるのですと言へば、又、松原さんが、あの木は何を造る材料で第一等のものですと、皆の應接に遑のないわたしは、何といふ名前の木が何の材料になるのかわからなくなつてしまふ。忘れるのもをしいやうな氣がして、最も覺え易い方法としていつそ製品の名で樹を區別することにする。するとまあ、なんと製圖板や張板や下駄やテンピン棒の樹がわたしの眼についてきたことだらう。

「あれは製圖板の樹ですか。」

「さうです製圖板の樹です。」

「あれはテンビン棒の樹ではありませんか。」

「いや、張板の樹です。」

謹嚴な松原さんを相手に、こんな會話をくり返してゐると、リーダの卷の一を讀んでゐるやうで頗る愉快である。

「あれは下駄の樹と違ふかな。」

原さんに向つて訊くと、

「そんなことです。」

耳新しい答へかたである。

原さんが皆に杖を作つてくれたが、それが今や、だんだんわたしの歩きを助けてくれる。戻るには遠し、行く先は緋はるかな道である。對岸を、時には汽車が通つてゐる筈なのだが、それと少しも氣がつかないくらゐ靜かな、川音と

小鳥の聲だけの谷間である。

こころぼそいよ木曾路の旅は
笠に木の葉が舞ひかかる

そんな唄があると安藤さんが言ひ、これは秋の唄であらうが、こころぼそいことに變りない道である。この旅に出る前、地福寺の墓に行つた。老梅の綠に映えて碧かつたが、馬籠永昌寺の杉木立の中の先生の墓も亦、今日今頃は新綠に包まれてゐることだらうと思ふ。

橋があつた。田立(ただち)村に渡る橋とのことであつた。一年後の綠の季節には、この村から今度は川を距てて賤母の御料林を眺めることにならうなどとは思はず、ただ緣遠い村と見ながら歩く。

既に山口村に入つてゐた。木曾谿が明るく西に開け、左に折れる川沿ひの段段畑に桑の實が紫に熟してゐる。對岸は岐阜縣である。川下に縣道を結(つな)ぐ鐵橋

が見える。「いやさかはし」といつて藤村先生が命名されたものだと教へられる。
三留野から山口まで約三里、極めて平坦、爽かな道ではあつたが、赤澤、上松と遠くから一氣にやつて來たわたしたちは流石に草疲れた。國民學校で一と休みさせて貰つて、いよいよここから一里余の、わたしには初めての山徑を馬籠まで登らうといふのである。
嶮しい徑ではなかつた。振り返ると岐阜縣坂下町の家の屋根が燻し銀に光つていつまでも見えた。歩みを止めて耳を澄すと木曾川の瀨の音が景色の底に沸つてゐた。深い山ではないが樹の間を縫ふ小徑である。
徑は谷川の岸に出た。やがて胸を突くやうな急な坂となつたが、このあたり一面、うの花ざかりであつた。一枝折つた。永昌寺まで持つて行つてこの燎亂たる白い花を捧げようと思つた。
鶯、るり、こがら、かしら、かけじ、かつこう、駒鳥など、啼き音を指して

訊くわたしの間に、安藤さん、原さん、松原さんが交〻教へてくれた。「チョットト出テ一分二朱負ケタ。」なるほどさう聞けばさう思へる啼き聲の面白さに、わたしはまるで子供のやうに愉しかつた。まるあぢさゐ、うぐひすかづら、つつじ、夕染（がまづみ）、りんだうなど野の花の應接にも遑なかつた。

　いつの間にか、坂下町も山口村も樹の間に見えなくなつてしまひ、と或る坂みちの、やがて登り切らうといふところに立つて振返ると、目も遙かに山また山である。あたり一面に淡く暮色が漂ひ始め、大氣はどんよりと白く澱んで雨の氣配がある。

「沈みますなあ。……」

　わたしは西の空を見て言ふ。

「はあ、……」

「西はあの方角になるんですかねえ。」

「さうです。ここから直線をあつちに引いたところに下呂温泉がありまして、その又彼方に加賀の白山があります。晴れた日ですと、よく見えますが。」

話はそれきり絶えた。わたしたちはそれぞれの思ひで沈む夕日を凝視め、言ひ合したやうに身動きもしなかつた。喜びも悲しみもしばらく忘れ、氣が遠くなるやうな眩暈をわたしは感じる。……

日は沈んだ。誰からともなく微かな溜息が洩れた。わたしはうの花の枝を雜草の茂つた土堤にそつと置いた。それがいかにも落日を拜む祭壇に供へられたやうに見えたのだらうか、桧原さんが怪訝な顏をしてわたしを見る。

「……さう、永昌寺に持つて行かうと思つたんだけど、ここでも同じでせう。」

さう言ふわたしは、

雲にうつる日影の色も薄くなりぬ花の光の夕ばえの空

といふ古歌を思ひ出してゐた。藤村先生が亡くなられた後の日々の、あの美し

かつた夕空が眼に泛んで、かうして馬籠を訪ねる山徑で、ゆくりなくも先生にお遭ひしたやうな氣がした。

小鳥の音に代つて、いつか蛙の聲がカスタネットの音になつて耳につき出した。小さな水田が、行くにしたがつて數多くなつてきた。人里に近くなつてゐることが、そんなことからでも知れた。惠那山がだんだん景色の中にせり上つてくる。霧ケ原も見え始める。諏訪神社の森、永昌寺の森、そして起伏した丘の背を走る中仙道に沿ふた部落が、右手から左へ、恰も飛行機から覗いたらかうもあらうかと思はれるやうに、平たく屋根を伏せて景色を横に點綴してゐる。單に畫として見ても申分ない構圖であるが、「夜明け前」の歴史に裏づけされてゐる故に一層見ごたへがある。馬籠への道はほぼ歩きつくしたが、ここでもし馬籠眺望第一の位置を求められるなら、わたしはこの山口村から歩いて來る徑に於て決定的だと言ひたい。

藤村先生は木曾の話の中で「山や林は父さんの故郷です。父さんのやうに大きくなつても、忘れずに居るのは、その故郷です。」と幼い子息たちに語つてをられるが、「東方の門」を書かれてゐる頃でも、時折夕暮の廊下に立つて、遠つと中空に眼をやつていられるところを見ると、何故ともなく、ああ先生は故郷を眺めていらつしやる、と直感した。先生の視界には隣接する家々の屋根の向ふに、東海道の松並木に入る第一の老松の梢が入り、「春」に書かれた若い日のことが、そこに回顧されてゐたかも知れない。が、それはそれとしてわたしは今、山口村から歩いて來て、神坂村を鳥瞰する位置に立つて見ると、先生が故郷を思ひに泛べられた位置があるなら、それは恐らくここよりほかにあらうとは思へない、と思ふのであつた。

馬籠よ、わたしはさう呼びかけたい衝動を感じながら、故郷に歸る先生の歩みを歩むやうな氣がした。永昌寺に漸く辿り著いて、薄暮の樹の下を墓に詣る

と、誰があげたか白い菖蒲の花が生けてあつた。

永昌寺に入る坂道の端れで、三浦屋に歸る安藤さんたちに、後から直ぐ行くことを言ひ、わたしは本陣跡の裏路づたひに、上扇屋の末木利一さんへ顔を出した。

馬籠の六月は、日本の農村の例に洩れず、農繁期の絶頂である。眞冬に來たこの前の時と違つて、末木さんの店もひつそり、何度聲をかけてもまるで留守のやうだつた。が、默つて人待ち顔に立つてゐると、そのひつそりした中に、桑の葉を蝕べる蠶の千萬の口がどこかで動いてゐるのが感じられる。やうやく出た末木さんは、眼窩がひつこんで、口を利くのも億劫なほどの疲れかたと見た。

「……誰かと思つたら……。」

と吃驚りしたやうな末木さんは、眼鏡の奥で瞬いた。

「今著いたところです。忙しい時に來てお邪魔してはいけないと思つたので手紙も出しませんでした。楢川村に用事があつて來たんですが、ついでにお墓詣して歸らうと思つて、それに、山口からの道をまだ知らないので、この機會にと今日は三留野から賤母を歩いて來ました。」

「それあエラかつたな……まあ、おあがりなさつて、……」

「有難いけど、今日はこれで失禮します。三浦屋へ行つて今夜はあそこに泊めて貰はうと思つてます。安藤さんも一緒だしするもんで。」

「へえ安藤先生も歸つて見えたつてか。」

「どうです、晩にやつて來ませんか。一緒に飯を食はうぢああありませんか。」

末木さんの家が部落の東入口とすると、安藤さんの三浦屋は約二丁ばかり坂下の部落の中央部、永昌寺に行く路の入口の上に郵便局がある。その斜め前である。

わたしはここで旅装を解いた。

晩には末木さんに、大黒屋の大脇文平さんも集り、親しい者ばかりの賑やかな晩餐となつた。湯舟澤の清冽な水で育つた鱒の御馳走が出た。ぼたもちが出た。そしてだんだん話が熱してくるうちに、ゆくゆくは馬籠の人になるべきだといふ提案までわたしに出た。

有難いことだと思ひ、酒をふくみながらそれを眞面目に考へてゐると、わたしの心はいつか地福寺の先生のもとにあつた。自分が死んだら死んだ土地に葬つてくれと仰有つたといふあの話は、そのまま、それが先生の本心ととつて間違ひないのだらうか、……そんな疑問がちらッと腦裡を掠める。

（……わたしとしては先生の御遺骸が大磯にある限りは、そこを離れたくはないけれど、いつかそれが馬籠に歸る日があれば……）

「わたしも馬籠の人の仲間に入れて貰ひませうか。」

（…大きくなつても忘れられないのは故郷だ。と仰有つてゐた先生、廊下に立つて暮れゆく空を凝視めながら、故郷のことを思ひ泛べていらしただらう先生のことを憶ふと、いつかは當然歸つていらつしやる、いやお連れしなければならない、やうに思はれて…

「馬鹿は先生のふるさとです。」

と、思ふこと言ふこと、しどろもどろになつたわたし、疲勞の後の酒が莫迦に利いた。

。

夜中にふと目が覺めた。飛行機の音らしいものが微かにする。だんだんかすれて行くのだつたが、その後を追つてゐるうちに、大磯で先日裏山に墜ちた飛行機のことが思ひ出された。夜の九時頃だつたらうか、ガラガラーッといつになく猛烈な音をたてて飛んで行つたので、思はず家の中にゐて頭をすぼめたが、

その次の瞬間ドンと物にぶつ衝つたやうな鈍い音がしたきり、爆音が絶えた。はてな、と思ふのと、墜落といふことが同時に頭にきた。わたしは急いで表に飛び出し、裏山一帶に目を瞠つたが、火の手が上つてゐる樣子もないので、素人の耳と考へとを苦笑して家に入つた。ところが翌日になつて、矢張り墜落が事實だつたことを知つた。この大事な時に大事な飛行家を亡くして惜しいと思つた。ただそれだけのことなのだが、去年の六月といへば、その二た月後に斃れるとは知らず只管「東方の門」に精進してをられた先生である。最後の肖像になるとは思はず森川で寫眞を撮つて、その出來榮を喜ばれた先生である。朝夕元氣な先生にお目にかかりながら、長生を信じてゐた迂闊さ。去年六月の先生の生命は頭上を掠めて行つた瞬間の飛行機のそれだつたのだと思つたら、飛行家の壯烈な最期と先生の死とが一緒になつて、思はず目頭が熱くなつた。

そんなことを憶ひ出したら眼が冴えてきて、あたりの靜かさが一層深く澄ん

できた。遠くで夜鷹が啼いてゐる。ふくろも啼いてゐる。折坂川の川音が紙を擦るやうな中を、裏を流れる山水の音がする。

馬籠はぐつすり眠つてゐる。

山水の流れる音と水車の音、あれは山家の自然の時計だ。「時」の紡ぎ車だ。夕はやさしい子守唄を唄ひ、朝は歡びの行進曲を奏でる家々の可愛いい水車。

先生のふるさとに來て、遙かに先生を憶ひながら、先生の眠りにも入るであらうこの水車の歌に、わたしも眠ります。

きのふけふ

馬籠は幾度か火事に見舞はれたといふ。そのためでもあらうか、方々の家に土藏がある。大黒屋の土藏は中でもずばぬけて大きく立派だ。扉口が四ヶ所もある。昔は酒屋だつたから、自然土藏の數もたくさん必要であつたかとも思はれるが、酒屋を廢した今でも、土藏の中が空つぽでない。それどころか、いつぱい充滿つてゐるらしいところから察すると、つまり大黒屋は馬籠で一番の物持といふことになる。

この土藏の四つの扉を開け閉めする、これが文平さんの主な日課の一つである。扉を開けて朝を迎へ、扉を閉めると夜がおりるといふところである。朝夕

二度、文平さんは大工が使ふあの指金ほどもある大鍵をぶら下げて、順々に扉の前に立つ。背が高く痩せて、蒼白く苦みばしつた面の文平さんの、そんな時の、何といふことない沈鬱な樣子を傍から觀てゐると、まだ四十三になる人に、この四つの土藏は荷が勝ち過ぎるのでないかと、痛々しい。「二十八番日記」といふものが、この土藏の一つに藏つてある。黑船渡來當時、前後四十年に亘つて誌されたもので、筆は「伏見屋金兵衛」すなはち文平さんの曾祖父にあたる大脇信興老人の手になり、馬籠宿の動きを細大漏さず物語つて見せる譯はばる文字の繪本である。もちろん「夜明け前」執筆の有力な參考文獻となつたものに相違なく、藤村先生が謝辭を誌して返禮された秩に收められてある。「二十八番」と稱んだのは和綴にした日記帖の數からさう呼んだものだが、先生が目を通された後から、散逸してゐた二冊と更に追補の一冊が發見された。「三十一番」といふべきであらう。

文平さんの土藏には、かういふものを筆頭に、懸軸、漆器、大小家具、夜具蒲團類と、どれほどの物が充滿つてゐるか、ちよつと想像がつかない。いづれ目錄でも出來てゐるのだらうと思ふが、そんな面倒なことをせずとも几帳面で記憶のいい文平さんのことである。或ひは在庫品ぐらゐは全部暗記してゐて、扉口の開閉どきに、それを思ひ泛べて見るだけで澤山なのかもわからない。

馬籠行が七回目になる時から、わたしは文平さんの所有になつてゐる隱居所を借りた。藤村先生の幼な友達であるおゆふさまにいつぞやお目にかかつた家である。この隱居所の出入口は大黑屋の內庭の方についてゐる。炊事洗面、いつさいこの內庭にある「明治天皇馬籠御膳水」の井戶の厄介になるのである。ところが土藏の扉口がまた皆この內庭に向いて開いてゐるので、朝夕ここに出て行けば、土藏の中で薄明るく泛び出てゐる物の形が、見まいと思つても目にちらつくのである。わたしは自分に覺えがないから何とも言へないが、他人に

藏の中を覗きこまれるのは、餘り好い氣持のものではなからう、とまあそんな風に文平さんの氣持を忖度して、いつさい扉口に目を据ゑないことにしてゐる。

文平さんが物を大事にする、決して右からたに使ひ捨ててしまふやうなことはしない、大事に大事に土藏に藏つておくといふ噂は衆口の一致するところである。がこれは文平さんひとりに限つたことではなく、また吝嗇を意味するものでもない。馬籠の人々の氣風であるといつたはうが宜からう。食物を例にとると、嶮しい山坂を登つて來る遠來の客のある時のことを豫想して藏つておくといふなど、優しい心根に發した場合が多いのである。

それにしても、大黑屋の藏には十五年昔のドロップが藏つてあるさうだ。文平さんは時々藏から羊羹を出して、脫脂綿で艶拭きしてゐるさうだ。さういふ噂が何かの折にわたしを吃驚りさした。土藏に入つてゐる物が一應昔のもので今どき容易に手に入るやうな品でないことは想像してゐたが、これは又えらい

ことだぞ、と、そこで文平さんに素晴らしい聽きこみかなんぞのやうに話して眞僞を糺して見る。文平さんはクスリと笑つて、まさかそれほどでもありませんがと、平然自若。そんなことがそれほど珍しいなら、珍らしいついでに好いものを見せてあげませう、と言ふ。

「何です。」

と坐り直すわたしに構はず、文平さんは、藏の中に姿を消したが、再び座に戻つた時には頭大の壺を抱へてゐた。

壺には板の蓋がしてある。

「干し柿です。わたしがこれを引繼いだ時分…さう、あ、あの時から、もう、二十年ば、ばかり經つてゐますから、ええと、百七十年にもなりますかな。」

「百七十年、何が？」

「こ、この干し柿が…。」

文平さんは、啞然として目を瞠るわたしを、うは目づかひにニヤリと笑つた。蓋を取つて中を覗くと、黄木綿を敷いた底に、干し柿が花瓣型に五箇並べてある。白く粉を吹いて、形もこはれてはゐない。手に取つて見ると幾分堅めではあるが、重さも相當である。相手が文平さんでなかつたら擔がれるんぢやないかと、一應も二應も怪しむところであらうが、文平さんといふ人は、そんな冗談や惡戯の出來る人ではないのである。わたしは百七十年を經てきた干し柿をためつすがめつ見て、呻つた。

「ど、どうです、ちよつと食べてごらんになりませんか。」

「これをですか。」

「甘味はまだいくぶんあると思ひますが……。」

「少し褐茶けたところがありますね。」

「さう、いつだつたか、少し風にあてた方がよからうと、虫干しをしましてね。

その時、う、うつかり夕立にあてたんです。慌てて取りこんだんですが、ほんのちよつと濡れたんですね、それから少し變色しました。い、いかがです、宜しかつたら一つ、お、お持ちになりませんか。」
「これをですか……ま、遠慮しませう。」
わたしは有難く辭退した。この壺の中にあつてこそ、百七十年の値打があるのだと思つたからである。

幾度も火に舐められた馬籠で、今日まで燒殘つてゐる土藏は指折り數へるほどしかない。その中でもし今後「夜明け前」當時を語る文獻、遺品が現れるとしたら、大黑屋の土藏か、その上隣りの八幡屋の土藏ぐらゐなものかと思はれるが、それにしても今更に惜しまれるのは、本陣の文庫倉の喪失である。百七十年の干し柿が出てくるやうなことはないにしても、貴重な記錄が藏つてあつ

たことは、その量において前二者とは比較にならなかつたらうと想像されるふしがあるからである。藤村先生はこの文庫倉が燒失してしまつたものと思はれてゐたやうで、作品の中でもそのやうに書かれてゐるが、馬籠の人の話を綜合して考へると、燒失したと言ひふらしたのは表向のことで、その實は在庫品を、どうせ燒けるものならと、皆で逸早く分け合つたものらしい。所有者の許可があつたかどうかは知らない。また無かつたとしても、その動機の善惡をここで詮議だてしようとも思はない。ともかくも、どこかの家でそれらの品の一つでも無事だと思ふことそのことが救ひであり喜びである。

本陣の文庫倉が燒けたのではなかつたといふ噂は、燒けたといふ言ひ傳へより、だんだん眞實にとれてくる。第一は、この隱居所は當時類燒を免れた建物*であるが、それが文庫倉と細い小徑を距てて殆んど同じ高さに相隣接してゐるにかかはらず、なんら損傷を受けた痕跡がないこと。第二は、近頃、思ひがけ

ない家から島崎家に買戻しを願つて出たほどの書が發見されたこと。第三は、正樹翁、卽ち「青山半藏」の印形の數々が某家の土藏から現はれたことなどのことが、事實を裏づけする方に動いてゐるやうに思はれるからである。

（＊明治二十八年九月二十五日深更。）

隱居所は前にも述べたやうに三疊と八疊の中二階である。つまり「夜明け前」にある本陣の隱居所で、島崎家に最も因緣ふかい歷史的遺跡である。「飯倉だより」を開いて見ると、〈寢言〉といふ中に、

幼い日の昔、私は父と一緒に祖母の隱居所になつてゐた離れ座敷に行つて見た。その時、座敷の袋戶棚から祖母のしまつて置いた酒の罎が出て來た。「お父さん、吾家のおばあさんでもお酒を飮むんですか、」と、私が尋ねた時に、父はその罎を私の前に取出して見せて、「これは味淋といふ甘いお

酒だ、おばあさんのやうな人の飲むものだ、」と私に話し聞かせて呉れたことがあつた。私は子供心にも年老いた人の世界を覗いて見たやうな氣がして、祖母が亡くなつた後の今までもその時のことを長く記憶して居る。――その袋戸棚といふのは、わたしのこの机の直ぐ右にあつて、唐紙は既に古色蒼然。だが全く昔のままだといふ。又、「ふるさと」の中の〈水の話〉には、

――父さんのお家には井戸が掘つてありました。その井戸は柄杓で水の汲めるやうな淺い井戸ではありません。釣つても、釣つても、なか／＼釣瓶の上つて來ないやうな深い／＼井戸でした。

父さんの祖母さんの隱居所になつて居た二階と土藏との間を通りぬけて、裏の木小屋の方へ降りて行く石段の横に、その井戸がありました。そこも父さんの好きなところで、家の人が手桶をかついで來たり、水を汲んだりする側に立つて、それを見るのを樂しく思ひました。父さんの幼少な時分

にはお家にお雛といふ女が奉公して居まして、半分乳母のやうに父さんを負つたり抱いたりして呉れたことを覺えて居ます。そのお雛は井戸から石段を上り、土藏の横を通り、桑畠の間を通つて、お家の臺所まで水を運びました。――

この井戸は現在は使つてゐない。いつ頃から使はなくなつたかわからないが、おそらく火災で本陣が燒けて以來のことではなからうか。釣瓶は赭く錆びてゐるが昔のままであらう。井戸の蓋を取つて覗く。そして、おーいと聲をかけると暗い底からおーいといふ返事がある。

部屋は西に明るく、障子を開けると本陣跡を見下ろす位置にゐて、恵那山、梵天山、永昌寺の森、遠くは美濃の山々が靑く雲につらなつてゐるのも展望出來る。本陣跡は約二百坪ばかりの空地、大黒屋の所有に移つて今は畠となり、野菜物のほかに、柿、なつめ、梅、海棠、柘榴などが生長し、文庫倉跡の崖に

は、春を迎へる馬籠第一の花の黄楊も生えてゐる。島の向ふに一段低く藤村先生の長男楠雄さんの「緑屋」がある。裏には欅の老木、白い土蔵、竹叢などが見え、永昌寺との間の窪には谷川の音もする。

位置からいふと、明治天皇の碑の裏の土地一帯で、今でも馬籠部落の中心であり、所謂旦那といふ家柄の家は多くこのあたりに在る。

わたしは時々本陣跡の畠の中の小徑を歩きながら、本陣の間取りや、その外觀がどんなものだつたらうかといふ疑問を抱いてゐたが、うろ覺えに覺えてゐる人はあつても、信用するにたる人を得ないのを殘念に思つてゐた。ところが馬籠に西丸小園女史が疎開して來られるに及んで話は俄然活氣を呈してきた。

島崎敏樹君はわたしが藤村先生に接する以前からの學友で、島崎本家の當主である。母堂は勇子といひ、嫁して西丸の姓を名乘つていられる。故島崎秀雄

氏（島崎正樹長男 島崎春樹長兄）の長女で、次男に本家を繼がせる約束で、西丸家に嫁がれたといふ。小園と號し、日本畫の先生であるが、戰時下の東京の形勢が惡化し、自宅が强制疎開に遭つたので、永昌寺の隱居所に移つて來られた。敏樹君は敏樹君で夜の警報下で大怪我をしたが、經過は良好、退院後の保養に、かれも永昌寺に來て母堂と一緒に暮してゐるのである。

小園女史は五十九になるひとだが、その記憶のいいことは話術の巧みなことと共に先づ一驚を吃する。淡々として感傷的でないのも嬉しく、昔の話を伺ふのにまたと無いひとだと思つた。それで先方の暇な時を見ては、わたしは永昌寺の隱居所を訪ね、それとなく話を昔にもつていつた。

小園女史が――土地の人は「本陣のいさ様」といふ敬稱を用ひてゐる――馬籠を出て上京されたのは七歲の時、卽ち明治二十六年であつたといふ。

――まだ中央線が全通してゐない時分で、中津川（岐阜縣。馬籠から約二里）ま

で歩き、そこから人力に乘つて多治見に行つて汽車に乘りましたが、……」
「名古屋廻りですね。」
「さう名古屋廻りです。多治見の方に行きながら振り返るといつまでも本陣の白壁の塀が見えました。」
「東京では何處に落着かれたんですか」
「千住に近い三輪の、それあ大きな家でした。」
「本陣のこと、覺えがおありですか」
「七つの時のことですから、正確なことは言へませんけど、およそのことなら覺えてゐます。馬籠の通りは今よりはも少し狹かつたやうな氣がします。家並びは今のやうに凸凹亂雜ではなくて、もつと整然と揃つてゐたやうです。今、明治天皇の碑のあるところに津島樣といふ祠があつて、……」
「何ですか、津島樣といふのは。」

「さあ、津島様津島様といつただけで、よくは知りませんが、……」

「綿屋の裏の欅の木は？」

「あの木は昔のままです。そして今、永昌寺の裏の、ほら茶畑になつてゐる學校屋敷にある稲荷様ね、あれが綿屋の土藏のところに在つたものです。」

「今の綿屋のあつたところは、本陣がある時分にはどうなつてゐたものですか。」

「役場でした。それが、」

「矢張、本陣が焼けた時に焼けてしまつたといふわけですね。わたしたちのゐる隱居所は？」

「瓦葺になつたのが昔と違ひますが、そして入口が元は本陣の方に附いてゐたもんですが、變つたといへば、それだけで、あとは襖も唐紙の模様も襖に書いた泉眠雲の大きな字も障子も疊も框縫の位置も全く昔のままです。」

「本陣の間どりなど覺えていらつしやいますか。」

「間どり?」

「覺えていらしたら、何かに書いて見せて頂けないか知ら、慾を言へば、ほんとに素描で結構ですから、本陣を前から見た感じを繪にして、……」

小園女史は卷紙を出して、早速本陣の平面圖を引き始められた。色々說明がありながら、また質疑に答へられながら書いていかれたのだから、少し汚くなつてしまつた。翌日までに淨書しておかうといふことで、その時は歸つた。

永昌寺から裏路づたひに坂を降り、田のくろを拔けて、今度は本陣跡の方へ草を分けるやうにして登ると、隱居所の下に出られる。

文平さんが畠をおこしてゐるのを見かけた。

小園女史に教はつてきたばかりの知識でいふなら恰度「上段の間」のあつたあたりである。

「や、文平さん、畠ですか。」

「ど、どちらへ。」

「永昌寺のいさ様のところに行つて來ました。本陣の間どりのことを教はりたいと思つて。」

「間どり？」

さう言ふ文下さんは、ちよつと複雜な表情を泛べて、「まだお目、お目にかけませんでしたか。」

「なにを？」

「い、いや、わたしはもうとつくに御承知かと思ひました。妻籠の叔母が書いてくれた圖面、まだお目に、……」

「へえ、そんなものがあるんですか。初耳だな。おゆふさまが書かれましたつてね。」

「い、いや、わたしは、もうお目にかけて、ご、ご承知のこととばかり思つて

ゐました。……ぢあ今夜にでも。」

文平さんは、まるで謝るみたいである。

「是非お願ひします。」

その晩、文平さんは隣組の寄合があるとかで顔を見せなかつたが、おゆふさまが引かれた圖面を届けさせることは忘れなかつた。見れば小岡女史のより餘程簡單であるが、一二ケ所些細な相違をのぞいては大體において一致してゐる。

わたしは翌日これを永昌寺に持つて行つた、浄書の前に參考までに見て貰はうと考へて。かうして出來あがつたのが次頁に掲げる圖である。

（註）津島神社は國幣小社、尾張國海部郡津島町に在り、鎭火の神を祀るといふ。

明治十三年六月二十八日、明治天皇が木曾路御巡幸のみぎり、馬籠本陣で御休憩になつたのがこの上段の間である。燭臺が左右に並んでゐたといふ話や、また、床下に不寝番が詰める部屋があつて、その出入口が奥の間の左廊下の階

本陣屋敷圖
竹
稲荷社
井戸
隠居
土蔵
大黒屋酒蔵
大黒屋
桑畑
書院
表門
中仙道
問屋（九太夫宅）

段の下にあつたといふ話。また床の間の右手に額が懸けてあつたそれが小園女史の手許にあるのを見せてもらつたりして、よもやまの追懐談を聴いてゐると、當時の本陣の内部が、ただ圖面だけを見て概念をつくりあげるのと違つて、色彩や匂ひまで伴つて譬へば光線を尊ぶ和蘭派の畫のやうに想像に泛んでくる。

　小園女史はその上、本陣を正面から見た畫を、思ひ出を頼りに描いて下さつた。それを見ると、明治天皇の碑があるところに津島様があり、黒板塀と門柱の奥に、今日の馬籠でも到底見られない格式を持つた邸が構へてゐる。正面玄關の右手に勝手口の障子戸が見え、それに「本陣」の二字が讀めるのが、左手書院の障子の白さと共に、いつたいに暗いこの山國の建築の、灯點しごろの美しさを思はせる。書院前の牡丹の赤さ、松の翠、正門右の梨の木、また桑畑、遠く奥に見える隱居所など、總てこれらの配置は芝居の背景のやうに効果的でさへある。

……わたしは繪の中の本陣に入つて行く。本陣の二字を書いた障子戸を開けて爐を切つた勝手の土間を歩いて見る。まるで無人の家みたいにひつそりしてゐる。草が生えてゐる。虫さへ鳴いてゐる。「くつろぎの間」の裏にあたる風呂場の前を通りかかると、そこに杏とも梅ともつかない木が生えてゐる。

「おや、こんなところに杏の木がある。」

さう言ふわたしの側に、いつの間にか鷄二君と蓊助さんがゐる。

「杏だつて？」

鷄二君が見上げる。「――いや、梅の木だらう。」

「杏だよ。梅ぢやないよ。ね、蓊ちやん、どつちだと思ふ？」

わたしは蓊助さんを顧る。

「梅の木にしちや少し木肌や枝ぶりに圓味（まる）があるやうだな。」

「梅の木だよ、梅の木に決つてるさ。」

鷄二君は自說を固執する。わたしたち三人がさうやつて杏か梅か決めきらないでゐるところに、爺さんが通りかかる。

「ね、この木は何といふ木です、爺さん。」

わたしは尋ねた。すると爺さんはちらッと見あげて、

「この木かなあし、………これはアンズ梅の木だぞなあし。」

その時のわたしたちの笑ひ聲で、わたしは繪の中から拔け出て、現實の自分に歸る。

鷄二君翁助さんと三人してアンズ梅といふ妙な木の下に立つたのは、つい一昨年の秋、遺髮埋葬式の時のことであるが、その時から正に一年後の十月十日、鷄二君はボルネオなどといふ思ひもよらないところで、戰死してゐることになつた。

鷄明院藝住居士

とは有島生馬さんがこの愛弟子におくられた戒名である。

明けがた、わたしは異様な聲で眼を醒まされた。それは永昌寺との谷間と覺しい方から聽こえてくるやうに思はれた。シーャッとも聽こえ、ギャーッとも聽える何か動物の聲のやうだが、譬へば噴霧器の口から放出する霧の强烈さで谷間にこだまする凄愴な聲である。濛朧とした頭でなかば息を殺して耳を澄してゐるうちに、禰宜さまの宮口さん夫妻からいつか聞いてゐた狐の聲がこれだと思ひ當つた。

朝になつて色々に努めて見たが、あの狐の聲が、どうしても本當のことに思へない。はつきり覺えてゐるつもりだつたのに、聲音さへ曖昧である。騙されたといふのはこんな氣持を指していふのだらうか。それにしても、明くるに間もない馬籠が、殘月に仄蒼く暈し出された霞の底で深い眠りに息づいてゐる景

色は思つて見るだけでも繪のやうに美しい。

「菊池さん、ゆふべは幽靈が出ましたよ。」

永昌寺の隱居所に小園女史を訪ねて行つたら、敏樹君の妹になる博子さんが、開口一番の挨拶である。まさか、と言つて笑つたら、敏樹君が話を取つて説明した。それによる、敏樹君が夜中に便所に行つた時の出來事で、用をたしてゐると、一陣の生温い風（？）が吹いて來た。それから二度三度そんな風に顔を撫でられた――

敏樹君は科學者だし少壯教授の體面上、悲鳴をあげるなど、みつともないことはしなかつたらしく、相變らず用たしを續けてゐたら、こんどは何かヘンに柔い薄手の布のやうなもので頭から頸筋を撫でられた。敏樹さんはここで初めて、事の怪しいのに肚を据ゑて探究にかかつた。

「どうも、ことがわかつて見れば、それ以前から可笑しい可笑しいと思つたことがあつたんですよ。」

小園女史が横から話に乘つてこられた。が、敏樹君は珍らしく話を讓らず、

「お化けにしては變だし、狐狸妖怪の仕業にしては……そんな莫迦なことがあるわけはなし……。そこで天井の方に確に何かゐる、仕掛があると睨んで、あんまり好い氣持はしませんでしたが、とにかく母と妹に起きて貰つて提灯を照らしつけて見ましたら、ゐました、蝙蝠が三羽ね、ぶらさがつてゐるんです。」

「ですからこないだから可笑しい可笑しいと思つてたんです。その下だけ毎日拭いても拭いてもフンが落ちてるんでせう。」

と小園女史。

「今もぶら下つてるかな？」

「それが今朝、夜が明けて行つて見たら、もうゐないんです。」

「どこに行つたんだらう。夜ぶら下つて晝遊びに出て行くなんて、道ぢやないかな。」

「ヘンな蝙蝠ですね。僕たちも馬籠の蝙蝠つてそんな習性なのかしらんつて、笑つてたんですよ。」

「お寺の蝙蝠だから、和尚さんの托鉢に倣つて晝出掛けるものと思ひこんでるんでせうか。いづれにしてもこの家も相當古いといふわけね、狐狸の巣ならぬ蝙蝠の巣だもの。」

「それあ、桃林＊和尚時代からの隱居所だつたんですものね。」

「今夜歸つて來たら捕へようか、敏樹さん。」

わたしが提議したら、小園女史、

「和尚さんに叱られるといけない。可哀想だからおよしなさいな。」

と輕く窘められた。（＊「夜明け前」の松雲和尚のこと）

三回忌

馬籠にて、昭和二十年十月十四日

五日、豪雨の中を名古屋經由でここに來た。正確にいふと六日正午近くだが、それは麓の落合川驛そばの宿で一泊を餘儀なくされたからだ。それほど雨は激しかつた。目と鼻のところに馬籠を控へながら登つて來られないことは、いかにももどかしいことであつたが、長い道中を無事に辿り著いたといふことで辛抱しなければならなかつた。東海道を走つてゐる間ぢゆう、行先に不通箇所が出來るのではないかと思つて、そのたびに何度ハラハラしたかわからなかつた。富士川の怒濤のやうな激流や、岸から岸いつぱい不敵な表情をして動いてゐる

天龍川の上で、徐行したり、停車したりしてゐる時は、生きた心地もなかつた。
落合川驛に著いた晩八時頃、空を見たら、ばら撒いたやうに星が輝いてゐた。ところが翌朝はまた雨、たうとう十一日の未明までこれは續いた。

かういふ日々の六日七日は村祭、中一日おいて九日、馬籠は藤村先生の三回忌を迎へた。本來なら祥月命日は八月二十二日であるが、遺髮埋葬式をここで營んだのが、一昨年の十月九日だつたので、木曾教育會と神坂村の藤村會は共同してこの日を記念し、三回忌の法會を永昌寺で持つたわけである。

今年、わたしは七月の盆も八月二十二日もここに來てゐた。なにもその日が目當てで來たわけではなく、その前後は大磯にゐて、偶然そんなめぐり合せになつたのだつた。盆に來た時は、確か七月十六日のことだつたと思ふ、平塚市が空襲され大磯にも被害があつたといふ報せだ。これといふ理由はなしに、わたしは自分の家がやられるとは思つてゐなかつたので、大丈夫とは考へたもの

の、それでも、と歸つて見た。幸ひ豫想は當つたが、それと共に、藤村先生の家が燒失したやうな氣もせず、またそんな噂もないので急いで見舞に馳けつけることもしなかつた。さうしてゐると二三の人から、靜子夫人があなたの家を訪ねて行かれたが留守だつたと仰有つてゐたとか、用があるらしいとか、逢ひたがつていらつしやるとかいふ話。最初は空襲お見舞だつたんだらうぐらゐに聽いてゐたが、さうばかりでもなささうに思はれてきたので、多分七月二十五日前後のことであつたらう、わたしは町屋園のお宅に夫人をお訪ねした。玄關に立つたら、引越し騷ぎのやうな中から夫人が出て見えて、老先生が生前書齋に當てられてゐた四疊半の部屋に案内された。そして、大磯も愈〻危くなつたので箱根の仙石原に避難することになつた經緯を話された後で、人に讓つてしまつたとはいふものの、番町の家も燒けてしまひ、せめてこの家には最後まで踏止まらうと思つたが、徒らに他人の手足まといになることがわかつて見れば、

去ることも亦餘儀ないと思つて仙石原行を決心した。しかし一旦出て行くからには生きて再びこの家に歸ることも期し難く、靜の草屋も所詮幻の草屋となるのではないかと思つて……と手巾で面を被はれるのだつた。

そんなことがあつてから二三日後に、夫人にはも一度お目にかかつたが、そのまま仙石原に行かれた筈である。手紙や葉書を頂いたのは彼地からと思ふが、それもはつきりせず、終戰後はまだ靜の草屋を訪れる機會も、夫人にお目にかかる機會もない。

「八月十五日」大磯にゐたわたしは、馬籠に登つて來る前に、地福寺の墓にお詣りした。八月に入つてから國民學校生徒が分散教授を受けた當時の騷しさもなく、危く蛸壺を掘り散らされさうになつた境内もひつそりして、昔のままだつた。

八月二十二日の祥月命日にわたしが大磯にゐなかつたことは前に話した。お

そら、たんまさうだつたらうと思ふ。いづれにしても終戰後一週間になるかならぬかといふ時だから、よしんば招ゐたとしても三回忌の法會が心靜かに營まれたとも考へられない。十月九日の馬籠での法會はそんな意味からでもなんとか盛大でありたい、さう希ふのはわたし一人ではなかつた。

　土地の藤村會が動き出した。木曾教育會もその方向に活潑になつていつた。その結果は共同法會といふことに決り、島崎楠雄さんの斡旋もあつて、當日は講師として有島生馬さんをお招きしようといふこと、馬籠に遺つてゐる例の青山半藏こと島崎正樹翁や藤村先生の記念品、それに「二十八番日記」などを展覽に供さうといふこと、石井鶴三氏作の晩年の藤村先生像を拜借してこようといふことなど、相談がまとまつた。

　教育會では、そのために會長の鈴木連三さんが山梨縣上野原在の石井さんまで諒解を求めに行つた。副會長の安藤茂一さんは南佐久の疎開先に有島さんを

訪ねて出席を乞ふた。地元の神坂村では法會當日の會場の交渉や接待の準備で忙しく、會期が近づくに從つて關係者の努力は一と通りなものではなかつた。

法會前日に見えることになつてゐた有島さんから電報で、當日の午後一時でなければ來られなくなつたと言つてきたのは七日のことである。式は一時から行ふことになつてゐるし、一時は落合川驛著では馬籠にはなんだかんだで先づ三時、一服して講演になるのは三時半と見なければならないといふのが關係者の一致した豫想であつた。困つた。がどうにもならない。まさかそのために約一時間ですまして貰はうといふ註文を、二時間ばかり引伸してやつて下さいとも頼めず、眞實困つてしまつた。

前座を時間つなぎにやつてくれといふ人が出て來て、それがだれかれ皆の賛成をかち得たが、わたしは固辭して受けなかつた。それでも……とこの案を押しつけようとして八日の晩が無意味に過ぎて行くので、わたしはそれが堪らな

くなつて殊更態度を曖昧にした上、寄合から歸つた。もちろんやる氣は毛頭ないが、それならそれで何とか一工夫しなければならない破目になつてしまつた。藤村先生の三回忌である。石井さん苦心の塑像が來るのである。有島さんがわざわざ見えるのである。絕えて聞いたことのない團體切符を發行するといふ鐵道當局者の親切で、木曾谿から多くの來會者が豫想されるのである。朝になれば何とかなるだらうと、强ひてタカをくくつて見ても、具體案が無いところにプログラムの立てやうがない。

あれこれ思案にくれてゐるうちに、ふと小園女史のことが頭に泛んだ。さうだ、この人に賴んで思ひ出ばなしをして頂かう、それに限る、わたしはこの妙案をひとりで喜び、ひとり決めに決めてしまつた。が、このことは法會が終つて愈ゝとなるまでは嚴祕にすることにした。

小園女史のことは旣に紹介した。が尙ほも少し說明を加へたい。藤村先生の

讀者のうちには、叔父、姪といへばすぐ（新生）の「節子」と決めてしまつてゐる人も多いやうだが、「節子」の姉になる久子夫人は作品の中に延（家）とか、お京（出發）とか、輝子（新生）とか呼んで出てゐるし、また小園女史すなはち勇子夫人は愛子（新生）とか、お玉（或る女の生涯）とか、お俊（家）とか愛子（春）とか呼んで現れてゐる。いづれも先生とは叔父姪の間柄である。（家）に出てくるお俊と、（新生）に出てくる節子とを同一人のやうに考へてあれこれ苦勞してゐる人もあるやうなので、ちよつと御説明申上げるわけだが、なほこの久子夫人と（節子）さんこと駒子夫人は正樹翁次男廣助氏の長女、次女であること、さらにこれらの人々が現在皆健在で、久子夫人は小園女史より三つ下、駒子夫人は六つ下であることも申添へておかう。

九日は相變らず雨で明けた。雲は厚く低く、風さへ出て、このへんで大暴れに荒れて明日はケロリと霽れる、そんなことになるのではなからうかと、恨め

しい。風が唸りをあげて吹き通る。雨はしぶきとなつて降りつけて、到底雨戸も開けられない。眞暗な部屋で落ちつかないで起つたり坐つたりしてゐると、氣重さに溜息が出る。木曾谿の驛々から團體客を拾つた汽車は、九時過ぎに落合川驛に着く、といふことだつたが、その時刻ごろの外はまるで暴風雨である。スコールのやうに烈しく山野を叩いて過ぎる雨脚があるかと思ふと、その後を追つかけるやうに轟々と風の進軍だ。九時が過ぎた。驛から登りに登る山徑が川と化し、赤土がぬかり滑つてゐるさまが目に見えるやうである。

困つた困つたと弱つてゐるところに、思ひがけなく小園女史が見えた。お互ひに惡天候に困つたことを挨拶した後で、わたしがこの時を幸ひ、今日の話をお願ひしようと考へついたら、それを言ひ出さない前に、小園女史からこんな相談が出た。――

いつかもちよつとお話したやうに、本陣が火事になつた時、文庫倉といふも

のは、藤村叔父などは燒失したものとばかり思ひこんでゐたやうだが、その實はさうでなく、どうせ燒けるものなら壞した方がいゝといふので、一つは延燒を防ぐため、一つは在庫品を救ふために、取壞してしまつたものだといふ話は、いかにも本當らしい。ところで、これはもう既に亡くなつた大黒屋のお婆さんとわたしの間だけの話だが、或る時お婆さんが、

「前々からお前さまに話しておかう〳〵と思つてゐた。」

と言はれるぢやありませんか。何事かと思つてよく〳〵聞いたら、つまりこの燒失させなかつた倉の中に、ほれ「夜明け前」にも出てくる武田耕雲齋が、祖父にと言つてくれた小倉織の鎧の片袖が藏つてあつて、その裏に和歌が一首書きしるしてあつたといふのです。

倉が燒けなかつたからには、その品が今もつてどこかに在るにちがひないと思ふのだが、今日は叔父の三回忌でまたとない機會です、お集りの皆さんにこ

のことを披露して、もし、そんなものがどこかの家に在りはせぬか、強ひて探さぬまでも、萬一見つかつたさいには個人の所有にしてしまはないで、どうか藤村會にはかつて公有物として保存のみちを講じて頂きたい、とそれを願ひ出ようと思つてゐるがどんなものでせう。

わたしはこのやうな話を何氣なく話してゐる小園女史を前にして、同樣に何氣なく裝ひながら、その實肚の中では雀躍りしてゐた。こんな話だ、こんな話をこのひとから引出して聽くのだ。そしたら暴風雨も何のその、今日の法會に集つたひとは思はぬ拾ひ物をしたと言ふだらう、思ひがけないプログラムに屹度喜こんでくれるだらう、さう思ひながら、わたしはそのお願ひのついでに、何でも宜しい、幼時の思ひ出、昔の馬籠の記憶、藤村先生のことなど、思ひつくままに話して下さるやう、折入つてお願ひした。

雨は歇んだやうだ。外が急に人聲で賑つてゐるやうなので、雨戸を開けて見

たち、見なれないひとが本陣跡に佇んで三々五々話合つてゐる。あきらかに落合川驛から登つて來たばかりの人たちで、背負袋を一樣に背負ひ、もんぺ、地下足袋の輕裝、見るからにぐつしより濡れてゐる姿が目を惹いた。

藤村先生像は疎開先の木曾福島から國民學校の先生が背負つて來た。そして永昌寺本堂の佛壇に安置された。滿堂立錐の餘地ない會衆は約三百と數へられ、この中には木曾路から遠く平澤から來た男女青年團の數人も混つてゐたし、切符入手に苦勞しながら長野や松本から馳けつけたひともあつた。

法會は永昌寺住職佐々木完道師と天德寺住職石原宗純師の司會で行はれ、燒香は楠雄さん、鷄二君の未亡人、小園女史など島崎家の人々に初まつて、村長、教育會代表、神坂村藤村會代表、學校關係者代表などがそれに續いた。

雨はまたこのころから凄い降りになつた。有島さんが落合川驛に著かれたといふ電話が入つた。まづほッとした。慾をいへばこの上は聽講者のために一刻

も早く出て驅け登つて來て貰ひたい。そんなことを主催者たちは冗談とも眞面目ともつかぬ面持で語り合つてゐた。

そんな間にも二十分の休憩はすんで、永昌寺の本堂が講演會場に仕度された。わたしは腹案どほり一同に小園女史を紹介し、講演などといふ大袈裟なことに馴れないこの勇さまが、滿堂の會衆に氣を呑まれて、話をいい加減なところでちよん切つてしまはれることがないやうにと始終傍らに附添つて、幾分でも氣樂にゐられるやうにと希ひ、一と話すんで次の話に移るのに苦心が見えれば、進んでこちらから話題の選擇にヒントを與へることにつとめたのである。その努力が報ひられて色々お話を伺ふことが出來たが、その全部を再錄する餘裕が無いから、藤村先生の幼時に關する話だけを、近親者の間で語り傳へられてゐる話として傳へることにしよう。勇さまも、これはわたしが實際にその場に居合して見たことではないから、事の正確さは保證出來ないが……と愼重な前置

であつた。

「——わたくしが東京に初めて參りましたのは七歳の時、明治二十六年十二月のことで、祖母と母と附添の男と四人づれでした。東京は三輪の叉（藤村氏）の家に落ちつきました。藤村叔父も一緒に暮してゐて、わたくしはこの叔父からしばらく東京語を教はりました。それから根岸小學校に通ふことになりましたが、本當に馴れるまでの間の附添役は藤村叔父がしてくれました。授業が始まるとから終るまで叔父はわたくしを待つてゐてくれましたので、田舍出のわたくしは休み時間など、叔父のそばにくつついて離れなかつたものです。

それにしろ田舍出ですから、東京の子供の學力の程がただわけもなく怖かつたものですが、あるとき、梅の花といふ字を平假名で書いて見よと先生が仰有つた。そこでわたくしも入れて二三人の子供が呼ばれて黒板に向ひました。或る

子供はむめのはなと書きました。また、うんめのはなと書いた子もありました。わたくしはうめのはなとおづおづ書きました。ところが先生がわたくしを一番だと褒めて下さつたので、そのとき初めて東京の子だつてそれほど恐れることはないのだなあと、大いに氣を強くしたものです。

或る時、學校が退けて歸らうと思ふのに叔父の姿が見當らないことがありました。そのときは前後かまはず泣きました。しばらくして漸く叔父が迎ひに來てくれました。そこでまた嬉しいやら口惜しいやらで泣いたものですが、後で聞けば叔父はわたくしを待つ間すつかり退屈してしまつて、當時根岸に岡野といふ大きな汁粉屋がありました、そこに汁粉をたべに行つてゐたといふことでした。」

以上のやうな話は永昌寺に行く前、雨戸を閉めたわたしの隱居所での話だが、藤村先生との關係を知るうへに便宜上ここに誌して見た。さて、更に女史の話、

「——馬籠を發つて東京に出る時の模樣は、叔父は色々に書きましたから、改めてお話するまでもありません。けれども愈〻東京に出て學校に通ひ始めた時は、自分の身裝があんまり皆と違ふので、すつかり面喰つてしまつたらしいのです。學校から飛んで歸つて來て、——叔父はその時、髮はおかつぱで、眉毛を剃り落し、着物は國を出た時のまま、母が手織の茶色の棒縞の木綿着、袂がついてゐたさうですが——頭を坊主にしてくれ、袂を斷ち切つてくれ、そして明日までに眉毛を生やしてくれ、と言つて皆を困らしたといふことです。」

………

「——叔父は子供の時分、ずゐぶん物をねだつたさうです。しよつちゆう、ね、ねと何が欲しいのか、それは言はずに頻りに何か欲しがつたさうです。ところが何を與へても一番最後に紙を與へるまでは好い顏をしなかつたといふことです。紙を貰つた叔父はいかにも我が意を得たとばかり、ニッコリして、あれこ

れ色々なことを書いて樂しんでゐたとかいひます。」

――晩年の叔父しか御存知ないかたは、叔父がたいへんもの靜かで、またものに動じないひとであつたやうな印象をお受けになつたかと思ひますが、子供の頃の叔父はそれとは丸で反對だつたといふことが、次のやうな話でもわかりになりませう。

或る時、それは秋だつたやうですが、裏から血相を變へて飛びこんで來て、

「火鉢だ、火鉢だ!」

とこんな恰好をして――と、勇さまは右手の人指ゆびを恰も忍術使のやうに左掌で握つて、「血が出るんださうです。どうした、どうしたと訊いても、ただ大變だとだけ訴へて、決してその指を見せようとはせず、早く繃帶してくれと言ふ。繃帶せよと言つても片方の掌をのけないことにはどうすることも出來ないではないか、人指ゆびだけ出してごらんと言へば、何でもかでもこのまま繃帶

してくれ、人指ゆびに觸つてはいけない、觸らないで繃帶しろと言ふ。無理な話とは思つたが、餘程痛むらしいので、それでも何とか誤魔化しながら、人指ゆびに繃帶してやつた。當人はそこで漸く安堵の態であつたが、寢る間も、風呂に入る時も、その繃帶した指だけは絶對に湯につけず、また蒲團の中に入れず、體とは全く別扱ひに大事に大事にしてゐた。

一週間ばかりして繃帶を取つて見ようと、それも當人を納得させるのに手を盡したあげく、繃帶を取つて見ると、かすり疵でもあればこそ、赤い紅葉の葉つぱが一と筋くつ附いてゐたといふのです。」

……

「――それから最後に、」

と、小園女史は、前に述べた武田耕雲齋から島崎正樹翁に贈られた小櫻縅の鎧の片袖の話をして、お願ひをされた。――

有島さんの講演は三時半から始まつた。初めて近づきになられた藤村先生の小諸時代から說き起して、終焉にいたる約四十年間の先生の作品と交友とに話は亙つた。

暴風雨の中を遙々登つて來られたせゐか、お疲れの樣子が見えてお氣の毒であつたが、明くる十日の木曾福島での記念講演會が後に控へてゐるのである。

約二時間の講演に會衆も滿足して散會した。

翌十日、わたしも用事があつたので有島さんのお伴をして、安藤さんや末木利一さんたちと福島まで行き、聽講もした。ここでも會場は補助椅子を出すくらゐの盛況であつた。

雨は漸くあがつたと見えた、が、もう一度降らずにはゐなかつた。

今日は、晴天。久しぶりに秋の陽射しが爽かである。終日二十度臺だつた先

頃からの氣溫が、今朝は急に十度、ところによつてはそれを二三度下つた。惠那山の襞にうつすらと初雪が降りたのが望まれる。

若菜集家に白髮と時雨けり

有島さんのお作である。

木曾乙女

誰か馬籠の娘さんで手傳に來てくれる子はゐないだらうか、と岩右衞門さん夫妻から相談をうけたのは、十一二月と蜜柑採取の繁忙期を一と月後に控へたころのこと、わたしが老先生三回忌の法會のため近々馬籠に發たうとしてゐる時であつた。

岩右衞門さんの家のあるところは小田原在で、前は熱海街道を距てて直ぐ海、背後は全山蜜柑山である。早生の出はじめるのは十月初であるが、採取期に本當に入るのは十一月で、この頃になると遠く群馬、新潟、山形地方などから手傳の娘さんたちが續々雇はれて來る。岩右衞門さんの家でも每年かういふ娘た

ちを頼んだ。しかし今年は、馬籠から加勢に出て來てくれる子はゐないだらうかといふのである。

で、馬籠に著くと、大脇ちゑ、勝間ふく江といふ孰れも農家の主婦で、わたしがここに來始めて以來の友だちに寄つて貰つた。わたしは岩右衛門さん夫妻の人柄と家業を紹介し、その依頼で今度歸るときには馬籠の娘さんをつれて行きたいことを語つて、推薦かたを乞ふた。

「ただ豫め斷つておかなければならないことは、なんといつたつて勞働は勞働なんですから、その點はむしろ骨が折れるくらゐに言つておいて貰つた方がいいでせう。でないと、よくある話で、折角行つたわ、話が違ふ、では困つちまいますからね。」

岩右衛門さんの蜜柑山を歩いて見、仕事の内容もほぼ見當がついての上で引受けて來たわたしである。蜜柑もぎ、蜜柑背負ひの仕事が、馬籠のひとに骨が

折れるなどといふことは絶對にないと、自信があつたのだが、馬籠から思ふと伊豆に近い海邊や蜜柑もぎなどといふ仕事は、譬へばミニヨンの歌を誘ふほどに浪漫的なので、肚にもない嚴いことを言つて見せたのである。

が、その一方で、蜜柑山からは海の彼方にいつでも大磯の高麗山が見えてゐること、小田原在とはいつでも三十分も列車に乘ると大磯に行けることなどを語り、こんな機會を利用して藤村先生の墓參をしてくることも宜しからうと話した。

「誰かありさうかしら？」

それでもいくぶん不安を抱きながら、わたしは訊いて見る。

「二人欲しいとこかなし、そんないいところなら、おらが行きたいくらゐだわなし……誰かあるづら、どうだいな、ふく江さ。」

「あるづら、誰か……。」

この二人の働き手のめがねに叶つた娘だつたら、先づ間違ひないと決めた上での相談だつたが、別に探し當てることに難色もなささうなので、わたしは安心して、そのやうな娘が現れるのを待つことにした。

馬籠滯在二十日の終りの日が近づいて來た。岩右衛門さんから一度その間に來信があり、二人といつた娘さんは一人でいい、是非賴むと言つて來た。それで早速、ちゑさんにもふく江さんにもその旨知らしておいたが、肝心のその一人がどうなつてゐるのか、さつぱり返事がない。ただでさへ忙しい農家の主婦にこんなことを賴んで所詮無理ではなかつたのかなあと思ひながら、それでも今更他の人に賴むほど時日に餘裕がないので、岩右衛門さん夫妻に喜んで貰ふと同時に、馬籠の娘さんを海邊につれて行つて吃驚りさしてやりたいはつかりに、柄にもなく安請合したのが過つたのかと、人知れず氣を揉み始めた。

ちゑさんの家に行つても、ふく江さんに樣子を訊かうと思つても、田畑に出

てゐて殆んど姿が見えない。歸る日はだんだん迫つて來てゐる。堅い婦人たちのことだから、まさか聞きつ放しといふことはなからうと思ふにつけ、自然催促もしかねてゐると、……一人の娘が候補にあがつた。が、一人の方は最初からはつきりしなかつたところにもつてきて、手傳は一人でいいといふことになつたら、一人で行くのは嫌だと言ひ出した、とそれも噂になしてわたしの耳に聞こえてきた。それではもう決つてゐるも同然ではないか、なぜ早く報(しら)してくれるなり、つれて來て紹介してくれないのだらうと、わたしは吻ッとしたり、焦れつたがつたりしたが、それにもかかはらず、ちゑさんとふく江さんとが萬事呑みこんでゐてくれるらしいのは有難く、また一人でも行かうといふ娘について言へば、どこの家の、どんな娘か知らないけれども、蜜柑もぎといふ仕事を美しく、愉しく受け入れることが出來るほどの心豊かな娘に思へて頼母しい氣がした。

「明後日頃たうと思つてゐるんですが、手傳の娘さんのことはどうしたらいいかな」

曖昧な訊きかただが、わたしはちゑさんに言つて見た。

「お前さまの話のやうに、それあ一緒につれて行つてもらへりあ一番いいところだがなあし、本人は來月初でなけれあ行けんと言つとるもんだで、それでもいいかどうか、今夜にでも訊きに行かずと思つてをつたところだが、……」

「はつきり來てくれることさへ確かなら、差支へなからうと思ふが、その點どうなんです。」

「それあ大丈夫だわなし。」

「何といふ名の娘？」

「森山ハルつていふがなあし

「どうして一緒に行けないんです？」

「雨つづきで麥播きがおくれてゐるもんだで、親に委せきつたまゝでは出かけれん、も少したつて心配のないやうにして行きたいと言つとるでなあし……。」

「なるほどね、……それにしても、一度つれて來てくれませんか、顏見知りになつておかなければあ、一足先に歸つて、迎ひに出るにしても迎へやうがないから……さうでせう？」

「それがお前さま、羞しいで、おれに話を聽いておいてくれつて言つとるとこよ。」

「そんなことを言つたつて……あなたに行つて貰ふのならだが……困つたな……當人によく話して、今夜にでも來るやうに言つてくれませんか、何なら一緒に……でなきあ、先方に報告するにもわたし自身心もとなくて、……」

晩になると、ちゑさん、ふく江さんを初め、末木利一さんの妻君、處女會の鈴木久代といふ娘の順に、誘ひ合せた村の婦人たちが、隱居所の狹い階段を上

つて來た。挨拶を受け終つたらしいところで、も一人たりない、どうしたんだらうと思つてゐると、

「ハルさ、遠慮せずに、はいらしてもらへよ。」

と、ちゑさんが今入つて來た襖の陰に顔を向けて呼びかけた。どんな娘だらうと、わたしは瞬間緊張した。狹い馬龍部落の中のことなので、案外見覺えのある娘かもわからないと思つてゐると、まるで知らない顔である。小柄だが、その行儀よく坐つたところを見ると、どこか稚い感じのする丸顔にもかかはらず、眸は穩かな光を湛へ、胸から肩が堅く厚く張つて隙がない。

（……なるほど、この娘なら、ちゑさん、ふく江さんのめがねに叶ふ筈だ。）

さういふ印象を受けたわたしは、上記二婦人が女手で米を三十俵も收穫するといふ力量を思ひ併せて、春山ハルの將來をひそかに祝福したことであつた。

十一月六日に著くといふ春山ハルからの電報を、わたしは岩右衛門さんの家で受けとつた。蜜柑もぎの忙しい時期は猫の手も借りたいといふ岩右衛門さん夫妻の話に、その猫の手ほどになつて見たいと考へたことから、わたしは馬籠から大磯に歸る途で、そのままここで旅裝を解いてしまつてゐたのである。が、ここに著くと直ぐ、わたしは馬籠の末木利一さん宛手紙を認め、戰爭も終つたところで、戰災地を見旁〻一度藤村先生の墓詣りに出てこないか、そのために一番いいのは巡回切符を求め、名古屋經由東海道線で東上し、歸りは新宿經由中央線で歸ればいいと言ひ、なほその節には春山ハルを同伴して來て貰ひたい、蜜柑山とエデンの美景を再現して山國からの珍客を待つてゐると追記しておいた。

楠雄さんは戰後初めての上京を、同じ馬籠から中央線で出て來て、東海道線

で歸つて行つたばかりのところだつたが、この人にも利一さんの來遊をすすめて欲しいむね、くれぐれも賴んでおいた。

春山ハルの電報と前後して、利一さんも來ると言つて寄越した。六日の二日前であつた。秋晴れの日がつづいてゐたが、六日近くなつて一と雨降つた。自然は海も山もそのために却つて鮮やかさを加へ、夜ごとの漁火は、海の彼方に出現した大都會を思はせるほどの擴がりで、小田原から熱海の沖にかけてチラチラと、まるでお喋りでもしてゐるかのやうだつた。

深い山國から出て來る人の目には、海のこの景色がどんな風にうつるだらうか、また紅葉ならぬ蜜柑で、日ましに黃色になつてゆく山を眺めて何と言ふだらうかと、わたしは利一さんやハルさんから見るこの海山の眺めを、あれこれと想像してそれらを樂しみながら、六日が來るのを子供のやうに待遠しく思つてゐたが、いよいよその日が來ると、今頃は馬籠から夜明けの暗い山路を下つてゐ

るだらう、落合川驛から汽車が出たところだらう、名古屋で乘換へただらう、豐橋で燒跡を見て空襲の被害に吃驚りしてゐるだらう、さて晝だ、辨當を食べてゐるだらうなどと考へながら、時計の針の動きが、刻々に近づいてゐる汽車を見てゐるやうでさへある。

晝になるまでは長かつた。が、それが過ぎると、時計の針はスピードを増して動くかに思へた。そして丹那トンネルの向ふ側に音が聽こえるやうな氣がし始める頃は、流石の一日にもやうやく疲れの色が漂つて見えた。

「そろそろ迎ひに行つて來ようかな。」

早川驛まで二十分と見れば充分なのを、五時を聽いたら凝つとしてゐられなくなつたわたしである。

「茂君どうだい？」

岩右衛門さんの次男坊に誘ひをかけて見る。

「何時に著くことになるんでせう？」
と、妻君。
「約十時間と見て五時半ごろと思ふんですが、そんな列車があるかな、茂君。」
「……五十五分といふ奴があつたつけな。」
「それだ。でなかつたら六時半か、どんなに遅くても七時過ぎぐらゐまで待てば大丈夫だ。もう少し驛が近いと裏の陸橋を列車が通るのを待つて駈けつけても間に合ふんだらうが、ここからぢや……ね。」
　時計はかれこれ五時半を示した。十分や十五分はいつでも進めてあるのを知つての上で、それでも氣が急き始めた。わたしは少年をつれて出かけることにした。
「提灯を持つて行つて下さい。」
と、妻君が注意する。

「まるで嫁さんを迎ひにでも行くやうだ。」
岩右衛門さんの評で皆が笑つた。
豫定してゐた列車が駄目で、更に二列車待つた七時過ぎに末木利一さんとハルさんとが、地下道から出口の方へ歩いて來た。どちらも背負袋(リユックサック)を背負つてゐて、先づ吻ッとしたやうな笑顔を見せた。五時五十五分ので著く筈だつたが、名古屋で豫定が狂つたことを歩きながら說明する末木さん、その後ろから他所ゆきの服裝をしたハルさん、夜目にも足袋と下駄の新しいのが、いかにも清潔である。
「疲れたらう、ハルさん、どれ出しなさい、そのリュックを背負つて上げよう。」
遙々よくもあの山の中から出てくる氣になつてくれたと思ふと、僅か二度目に逢つてゐる娘といふ氣がせず、その健氣さがいぢらしくて、わたしは親しい口を利いた。が、この馬籠の娘は、輕いから大丈夫ですと言つて微笑してゐる。

その微笑は、西東わからぬこの海邊の夜に寄せてゐる挨拶のやうにもとれた。

「さあ、ここから家まで海沿ひの道です。」

驛を出て四五分歩いたところで、わたしは左手を指して海を敎へた。それに應ずるやうに海は眞下の暗闇で騷いでゐた。漁火は風向や潮流の加減でか寂しい。茂君が下げた提灯の灯の後を歩きながら、平塚海岸で明滅する航空燈臺を指して、大磯の位置などを說明する。

翌七日の朝は、裏山の蜜柑畑に利一さんとハルさんを案內した。それがすむと、小田原まで歩き、そこから列車で大磯に行つて、藤村先生の墓參りをし、先生の舊居を訪ねた。利一さんは先生が亡くなられた時來たことがあるさうだが、ハルさんには總てが初めてなので、靜子夫人は親戚に危篤の人があるとかで不在だつたにかかはらず、留守居の婦人に乞ひ、奥の書齋まで上げて、燒香さして貰つてやつた。その折々で色んな顏に見える寫眞の中の先生が、今日は

ふるさとの人々を迎へて、嬉しさうに半身を乗出して來られるやうに見えた。

切符の通用期間だけの旅をするつもりで出て來た末木さんは八日の午後、東京を經つて歸るといふ。ハルさんは山からわざわざ戻つて來て、頬被りを取るなり、さよなら、と言つて微笑した。態度が控へ目であるだけに、口數少いのと、この微笑には餘情が溢れて、險しい山國で育つた娘の勁さに觸れた氣がした。

蜜柑もぎが始まつた。背負ひ籠に十二三貫もの蜜柑をもぎつて、それを裏山から背負ひおろすのである。蜜柑畑は一ところにあるのではなく、近くて五分、遠くて小半時間のところに散在してゐる。多く山腹にあるので、畑によつて同じ海を眺めるにも色々に角度が異り、遠く大島を點じた景色や、三浦半島

に房總の山々までも重ねて見せるところ、近くは小田原、二宮、大磯と白い波で岸を縁どつて彎曲した陸地に、一脈の丘陵を置き、その背景に大山で切れた丹澤山塊を配した山國への眺めなど、それぞれに、これが朝晝夕と變貌して、表思索の、畫心の、歌心の對象になるのである。また部落を脚下に見下ろす位置にゐると、向ふの山腹のトンネルから出て來る列車、こちらの山腹のトンネルから出て行く列車、これが孰れも部落の上にかかつてゐる陸橋を這ふやうにして渡る、まるで玩具の動きを見てゐるやうな可愛いさである。背負ひ籠のほかに小籠をいつも持つてゐて、もし木に登らなければならない時には、それに取附けた鍵の手を好きな枝に引掛けておいて、もぎつた蜜柑を一つ一つ抛りこみ、いつぱいになると、木を降りて背負ひ籠に移し入れる。蜜柑の枝は強靱なので、折れることなどは先づない。もぐといふよりは剪るといふ方が適當かも知れない。チョキンチョキンと鋏で剪り取るのである。赤いの赤いのと選つて捩つて

行くから、一本の木を相手にして、右から見たり、左から覗いたり、背伸びをしイ上の枝を引寄せたり、體をよぢらして茂みの中に忍びこんだり。

「ハルさん、何をそこでニコニコしてゐるんだい。」

誰に渡すのも惜しいといつたといつときの蜜柑で、咽喉を潤しながらわたしは聲をかける。

「蜜柑をもぎ終つたら枝がピンと撥ね上つて、まるで背伸びしてるやうなんです。」

すると岩右衛門さんの妻君が、

「ほんたうにね。有難うさん、また來年も頼みますよ」つて、わたしだつて言ひたくなることがよくあるんですよ。」

と言ふ。

雨の日は休む。尤も岩右衛門さんだけは、朝夕二度網締めに出るから別だが、

時計が四時を打つと先づ起きて竈に火を入れるのは主婦で、それに續いて皆が床を出る。蜜柑の背負ひ高が日に五六十貫にもなれば一人前だとされてゐる。美しい、そして愉しい仕事ではあつても勞働は勞働で、流石に夕刻になつて山を降りる頃には膝頭が慄へるほどである。が、海に臨んだ山の端からの眺めに沖の漁火でもあれば、滿天の星が光を落してゐるほどの壯觀である。わたしがいつさいを忘れて夢の中に在るやうな自分を感じるのは、この瞬間である。

「ほんたうに、お蔭さまでね……夫とも話合つてゐるんですよ。」

「なにをです？」

「いえ、ハルさんのことですよ。毎年手傳ひ娘のことでは何彼と苦勞するのに、今年は凝つとしてゐてあんな好い娘を世話していただくなんてねえ、有難いとも勿體ないとも、お禮の申しやうもないつて。……」

「皆さんの氣に入つて、わたしこそ吻ッとしてゐるところです。馬籠といふ部落は、昔の中仙道が、樂なところで十二三度、急なところで二十度近くもの坂路、それも澤庵石を突き刺して固めたやうな凸凹の坂路に寄添つてゐるやうな村ですから、背負ふことなしには物を運ぶことが先づ出來ないんです。部落は端から端までで約五六丁ありますが、あの娘の家は、それからまだ離れた山窪に在るのです。聞けばあの娘は一番端れに在る農會の倉庫から自家まで米一俵を背負ひ上げるといふんですよ。話が出たから打明けますが、わたし自身、あの年ごろの娘でよくもああやれると舌を巻いてゐたんです。」

「畑仕事を見てゐると、とても叶はん。」

岩右衞門さんは眞顔で言ひ、その後で訊くのである。

「いくつです。」

「二十四とか言ひましたつけ。」

すると妻君が言葉を挾んで、岩右衛門さんに言ふ。
「若く見えるね、小柄のせゐだらうか。……二十四ちゐ來年はもう駄目ね。」
「何がさ。」
「お嫁さんでせう。」
「……。」
岩右衛門さんはそこで、いかにも名殘惜しさうな顔を見せる。

或る時。
「ハルさん、ひとつお願ひがあるんだが、訊いてくれる？」
「何でせう……？」
「ね、ハルさんの話を聽いてゐるとさ、馬鹿の言葉を少しも使はないぢゃないか、さうだらう？」

ハルさんはその後で何か言ひ出されるかを察したさうな微笑をする。

「使つて、少し教へてくれない？　それとも一人では使ひにくいかな、……いいぢあないか、わたしにだけ使つてくれよ、何とも思やしないよ。」

「……可笑しくはないでせうか。」

「なにが可笑しいことがあるもんか。使つてくれる？」

ハルさんは使ふとも使はないとも返事せずに、ただ微笑してゐるだけである。

四五度こんな問答をしたあげく、つひに根負けしてしまつて、その時は諦めてしまつたが、二三日すると、とかくこの娘の口数の少いのが氣になつて、思ひきり何か喋らして見たくなる。

「ハルさんはいつでもそんなに默つてゐるのかい、さうぢあないんだらう。……そんなら構はないぢあないか、窮屈な思ひをしてそんな他處行の言葉を使はなくても、馬鹿の言葉で喋つてくれよ。可笑しいとも何とも思やしない。ね、

頼む、頼むから使つてくれよ。」

「でも――、」

「でも何さ。」

「誤解されるやうなことになると、つまりません。」

「誤解？　とんでもない。誰が誤解なんかするものか、ね、さうでせう？」

わたしは岩右衛門さんの妻君に應援を求める。

それまでに言つても、この山國の娘はふるさとの言葉を使ふことを控へてゐた。ただ一度だけ、それも、もし明日、朝から晩まで馬鹿の言葉を使つてくれなかつたら、わたしの願ふことを悪意に解釋してゐる證據だと思ふから、それならそれでも宜いと妙にカランで見せたことがある。そしたら、困つた顔をした。いよいよ使つてくれるぞと樂しみにして翌朝顔を合せると、矢張效果がなかつた。それほど辛いものなら、もう餘り責めることはしまいと諦めて、前日

言ひ渡したことは忘れてしまつてゐる風を裝つて蜜柑もぎをしてゐたら、

「あすこを見さつせれ、お前さま！」

と一と言、ハルさんは素晴しく見事な大粒の蜜柑を指して叫んだ。

後が續くかと思つたら、それなり又標準語になつてしまつた。――

「ハルさん。」

さう呼んで、或る晩、わたしは又馬籠の言葉を、こんどは教へてくれるやうに賴んで見る。しかし、さう言つただけで何か具體的に材料がなければ、どうせいくらも續かないことがわかつてゐるので、馬籠から來た便りの最近のもののなかからでいい、一つ選んで、日常語に飜譯して讀んで貰ひたいと言ひ、

「それなら差支へないだらう？」

と粘つたら、流石にこんどは根負けしたか、それならと、一通の手紙を持出してきた。

「誰から來た手紙？」

「久代さん。」

「郵便局の……仲良し？」

「いつか隱居所に行つた時一緒だつたでせう？」

あなたの出發のころから思ふと、家々の軒ぐゝろ（周圍）は落葉して、けつから明るくなつてしまつたぞい、昨日は雨ふり、ちよつと寒いなあと、炬燵でまるまつてゐたら、やつぱり惠那山はずつと下の方まで眞白くなつちやつてゐた。誰もが鼻の頭を赭くして、寒いのい、寒いのい、さう言つてゐるとこよのい。

大磯へ墓參りにつれて行つてもらつたつてのい。先生の亡くなつたお部屋までも上らせてもらつたつてのい。ハルさのことだて、默つてをつても、

どうね（どんなにか）悲しかつつらのい。

忙しいづらに（だらうに）、いつもいつも海邊の樣子をしらせてくれてありがたう。波止場で物干しをしてゐると、濱の子供になつちやつたやうだとか、漁火（いさりび）といふものを見たとか、おれたちのけなるい（羨しい）ことばかりだわい。

おらも行きたかつた。ハルさんはまつたくよかつたなあ。みんな、さう言つとるぞい。そいだけど、やつぱりハルさんだて、そんね（そんなに）よくしてもらへるとこさ、とも話したとこよのい。

大方畠からの取入れもすんだ。夕方は早くから圍爐裏ばたで大きい火をたいて、芋燒もちをテキ（一種の金網）にいつぱい燒きながら、おろし大根で食べてゐるぞい。そんなとき噂するのは、烏賊と蜜柑で埋まつてゐるさうなあなたのことばつかりだぞい。

軒いつぱい吊けた（吊した）大根もよう乾いた。春伐つといた薪は早く背負ひおろさんならんし、今年は山の落葉をうんと拾つて肥料にせよまいかと、こんな仕事も殖えたしのい、雪の降つてこんうちに、まんだ、まんだ山ほど仕事があるぞい。とにかく一日でも早く片附けて、あのぬくとい（温い）炬燵の中で芋切りや乾柿や栗なんかを食べしな（ながら）春からの山着の繕ひの出來ることを一番樂しみにして、一生懸命働いてゐるわい。

二三日前だつたか、あなたのうちへ行つたら、西向の屋根いつぱいに、芋干、柿干、大根干、小さい信濃柿など、どれもうまさうに干されてをつただい。

處女會のみんなは、あなたがそつちにゐるうちに、大磯の先生の墓參りや、暖い國のお百姓を見に行きたいなあと言つとるが、そんな願ひが叶へられりあいいがなあ。

いそがしいか知らんが、こんどは蜜柑のなつとる木を寫生して送つてくれ。

獵人日記

馬籠に來るたびに「鳥屋」の話が何かの折に一度や二度出ないことがなかつたが、わたしは、その時までまだ一度もその鳥屋といふものへ行く機會に惠まれたことがなかつた。同じ東京から、たつた一度ここを訪ねて來たばかりで、鳥屋の味を滿喫して歸つて行つた幸運な人があつたことを思ふと、もう十二度も來てゐてまだ鳥屋に行つたことがないといふ話はないものだ、と他人に嘲はれても返す言葉がなかつた。それも、鳥屋といふものがあることを知らないとでもいふのなら、また、知つての上で、然も興味を感じなかつたとでもいふのなら話はわかるのだが、馬籠に來始めたそもそもの初めから行つて見たくて、

そのつど行きそこなつてゐるのだから、甚だ面白くないのである。

　鳥屋のことは藤村先生の「ふるさと」の中に出てゐる。しかしこれは童話として取上げられてゐるもので、これをもつて鳥屋を説明しつくしたものといふことは出來ない。德田秋聲さんの日記にもある。昭和十六年十一月二十九日のことで、德田さんは。岐阜縣中津町に來て、郊外の鳥屋に案内されていられる。中津町といふのは、この馬籠から遙か下界に見ゆる町である。そして、鳥屋はある。が、馬籠の人の噂では、昔は知らず近年は霞網にかかる筈の小鳥を、ここまで買出しに登つて來るといふのだから、怪しいものである。

　德田さんの日記によると、——少憩ののち町から半里にも足らぬ丘にある鳥屋を見に行く。傾斜面の雜木林に霞網を張り、囮の籠を幾つかその中に伏せてある。ここは鶫以外の小禽、あつとりとか靑とかいふやうなものの獵場である。やがて……小亭に入り、女達が長方形の爐に渡した鐵灸のうへで串ざしの鶫を

つけ燒にしてくれ、外に料理の二三品あり、酒を吞む。大井氏が事さんの目くはせで、何か更つて言ひ出すと、そこへ筆硯や式紙や短冊をしこたま用意して、さあ書けといふので、僕はと初めて氣がつき、僕は地方まはりの文人墨客でない旨言ひ立て、事さんを少し難詰してやる。云々——といふわけであるが、結局うまうまシテやられてしまはれるのである。御自身が霞網にひつかかられた、やうな次第、何とも早、御同情にたへない話である。

鶏二君が聞かしてくれた鳥屋の話は、事實に卽し眞情に迫つて仲々面白かつた。彼は話に相應しい雰圍氣をつくり出すことに妙を得てゐた上に、畫家で話術に巧みなひとだつたからでもあらうか、その話から受ける印象は繪畫的で精彩に富んでゐた。

彼は語つた。言葉を繪にし、繪を言葉に現して、鳥屋まで登つて行く未明の山徑を。その雄大な眺望を。夜明けの空の美を。粉雪にまぶされた山々を。う

す紫色に映ゆる朝空を。その高い奥の方への凝視を。點々と群れ飛んで來る小鳥の群を。鳥屋師の緊張を。小鳥が霞網に飛びこむ心理を。それを看破した人間の經驗と最も效果的な術策とを。そして、それに依つて捕へられる小鳥の種類を。またこれらの小鳥をつけ燒するために年々順繰りに貯藏した貴重なタレがあることを。この味がまた天下一品であることを。そして……

ああ、けれども話は食べられない、そしてわたしは食べたくなつたのである。いつになつたら鳥屋に行く機會がつかめるのだらう、さう思ふと溜息が出た。

鳥屋は十月十五日に始まつて、雪を見る頃には——だいたい年内一杯で——終ふのが毎年の例らしい。去年の十月十五日前後には、わたしは馬籠に來てゐた。しかし何かの都合で鳥屋行を實現することが出來なかつた。わたし自身の都合よりも、或ひはいつかう小鳥が姿を見せないといふ噂があつたためかもわ

からない。それから湘南の家に歸つて又――といつても十二度目に馬籠に登つて來たのは、約一と月後の十一月なかばだつたが、その十一月も押詰つて、十二月三日には又湘南に歸らうとして幾日も無い日のこと、末木利一さんが鳥屋に案内しようとの申出である。好晴つづきではあつたしするので、獲物が有る無しは問題でない、とにかく行つて見ようとばかり快諾した。

鳥屋行といへば、兵次さの鳥屋か米さの鳥屋かそのどちらかだらうと、わたしは思つた。どちらがどうといふことは知らないまゝに、鳥屋といへばこの二つの名があげられるのを豫て聞き覺えてゐたからである。馬籠から峠まで約三十分の登り路、兵次さの鳥屋はここから右に入り、米さのは左に入つて行く。甲乙があるわけではないだらうが、鳥屋といへば兵次さの方を先づ擧げる土地の人の口吻から察すると、こちらの方が何か好いことがあるらしい。利一さんが案内してくれようといふのも、兵次さのであることは訊かずと知れたことで

ある。
小鳥のかかるのは夜明けの一と時が一番である。だから鳥屋行は前の晩から泊りがけで行つてゐるか、さもなければ、まだ夜の明けない暗いうちに登つて行かなければならない。言ふは易く、行ふに難いのは、この朝起きの辛さに打克つことである。外は眞つ暗である。寒さはこの山深い土地では逸ち早く嚴しい。星があるやうな無いやうな明くるに間もない時刻の不安な空、よくよくのことでなければ鳥屋の夢だけで澤山といふところである。がしかし、それは小鳥を食ふことにあまり魅力を感じない、そして不精なわたしだけのことかも知れない。鳥屋行を樂しむ人たちの、そのために前の晩から酒肴の用意も宜しく、去年の小鳥の味をまだ忘れかねてゐるやうなのとは、その意氣組の在りかたが異ふのである。
「おや昶ちやんも行くのかい。」

まだ學校に上らない子供が父親につかまつて、わたしを待つてゐた。見れば、草履をつつかけてゐる。利一さんはお重らしい包と酒瓶とを下げ、地下足袋だ。
「靴ぢや駄目かな、利一さん。」
「駄目ぢあないだらうが、……何ならも一つ地下足袋があるで、それを履いて行きますか。」
「兵次さの鳥屋まで一時間もかかるかな？」
「一時間もあれあ大丈夫だが……今日はこの坊主がつれて行けつて仕様ないで、トチガホラに行かずと思つて……。」
「トチガホラ？……わたしは又鳥屋つたら、兵次さのと米さのとだけしか無いと思つてた。どんな字を書くの？……さう、栃ヶ洞つてね。よつぽど遠いところ？」
「三十分ぐらゐのものよ。傳田の方に行つて、あのちよつと先です。」

傳田といふのは、昔から鶯の名所として名古屋方面のその道の人に知られてゐるといふところである。と同時にこの夏、食糧事情の逼迫に備へて、柄にもなく少しばかりの土地を借り受け、百五十貫目標の甘藷の苗を植ゑたまではよかつたが、地味の問題と植ゑつけが非常に遲れたのと、加へて天候が幸ひしなかつたのと、見事惡條件が揃つたために、親指大の藷をそれも僅か數貫收穫したところとして、わたしたちには忘れ難い。栃ヶ洞はその傳田の先といふ。どのくらゐ先か話だけではわからないが、馬籠からの時間を考へて見ると、兵次さの鳥屋に辿るよりは遙かに骨が折れないらしい。殘念といふよりは、わたしは氣が樂になるのを覺えた。

「しかし、そんなところで捕れるのかな？」——

わたしは暗くて見えない相手の顏に向つてニャリと笑ふ。その笑の意味は利一さんにも通じたのだらうが、それを言ふ前に、

「それあ捕れんことはないわ……しかし、どこも今年は不猟だと言つとるで、どこに行つたつて似たやうなもんでせう。」
「捕れなかつたら、いつか利一さんの家で、鳥屋を始めると言つてゐた男の方へでも廻つて見ますか、フフフ……」
利一さんもクスリと笑つた。霞網を張る位置がそんな人家に近いところでは小鳥がかからないと、偶〻利一さんの家に寄つた男の話を眞に受けて、利一さんがその無謀を嗤つたことがある。するとその男は狡さうな眼をして、かからないことは承知の上だ、が、俺の鳥屋に來れば必ず小鳥が喰へ、いや喰はしてあげる。希望なら牛でも豚でも馬でも魚でも……といふんだつたら文句はあるまいが、と言つた。
「霞網じやなくて霞闇だあ、それあ……」
皆そこに居合す者が笑つた。そんな鳥屋が出來たか出來ないか知らないが、

わたしは冗談のやうな本當のやうなその時の話を思ひ出したのだつた。

一

馬籠の部落を出て、峠の方へ、漸く足もとが明るくなつてきた路をわたしたちは歩いた。四五丁のところで鹽澤橋といふ橋を渡り、間もなく峠に行く登路とは又別な、細い緩い山徑をその迂りに從つて歩いた。パリッパリッと破れる薄氷の上を體をこごめるやうにして歩いた。傳田から先の徑は全く初めてである。拓けるだけ拓いてきた山の中の乾(か)れた水田の、段々づくりを右下に見ながら歩く。雛段の一番上を渡り歩いてゐるやうな感じである。葉を落しつくした眞冬の疎林を透して惠那山が見える。どつしりと重く、まだ寢たりないやうなその顔にあたるあたりに、早や陽の射す氣配がある。底の淺い清水の流が行手の徑の片側を緣取つてゐた。幅一尺ぐらゐの流ではあつたが、粗い白砂礫の底のせゐもあつたらうか、ちよつと見たところでは水のあることに氣がつかない、それほど澄んでゐた。動いてゐるとも見えない水が、思つたより速く流れてゐ

る。利一さんの説明で、わたしたちは既に栃ヶ洞に入つてゐた。そして、この美しい山水の流の下の方に水車の音が聴こえ始めて間もなく、林を出た徑のすぐ下に一軒の家を發見した。

「この人が、」

利一さんが、それを指して言つた。「鳥屋をやつとる。」

「で、その鳥屋は？」

「もう、この山の上。」

徑を外れて、わたしたちは一軒家の上からすぐ、山に足を入れる。登るにしたがつて急になつた。小鳥の聲が上の方から聴こえてくる。未明の山徑を歩いて來て今まで忘れてゐた囀りである。圓い張りのある音、纖細な、そして餘情を含んだ音。そんな囀りが或る階調をなして朝の爽快を歌つてゐる。まるで山の音樂會場のやうだ。が、（しかしあれがクセ者なんだ。）とわたしは、自分が警

戒しなければならん立場にある者のやうな考へかたに陷る。囮だ。問題の霞網はそれを支へた棒柱の所在で見當をつける。そーッと、そーッと……獵の邪魔にならないやう、音をたてないやうに忍び足で爪先き登り、木の枝を搔き分け、搔き分け、わたしたちは漸く鳥屋に入つて初めてフーッと吐息した。

圍爐裏が切つてあつた。その周圍に人が四五人も坐れば小舍はもうそれだけでいつぱいである。窓も何も無い粗板張の小舍。それだけでは何の變哲もないが、その他に三段ばかり登ると、外に開け放つた出窓のついた一つの座席が設けてある。見張場である。鳥屋の小父さんは外氣に曝されながらここに坐つて、辛抱强く小鳥の來るのを何時間でも待つてゐる。窓から見渡せる手近かな雜木林には一帶に霞網が二重にも三重にも張り廻してあつて、その中のそこここに配置した鳥籠から、囮がさかんに啼きたててゐる。

外部から見ると、この小舍は木の枝でカムフラージュしてあるために、小さ

な木立としか、どうしても思へぬやうになつてゐる。その外觀の貧弱さにくらべて、内部の、殊に見張場からする展望の素晴しさは、神の座から下界を俯瞰してゐるやうな錯覺を與へずには措かない。扇擴がりに展けた木曾路の西の入口からする壯大な風景を、その要のところに佇んで眺めてゐるといつたかたちだ。馬籠が見える。梵天山も見える。諏訪神社の森も見える。が、それらは景色の中の微小な點景に過ぎない。それらを越えて遙かな美濃平地が、また近江につづく擴りが指呼の間にあるのだ。

この風景を左方から構成して行くのは、惠那山を主體とする一脈の山塊である。既に山襞には雪が深い。が、山の青さを失はず、時に全山粉雪にむせびつつ、また時にはそれを吹拂ひ落しつつ越冬するこの山塊はまた、わたしに神坂村の東南を圍まうとして弧を描いた「自然の屛風」のやうな不思議な想像を與へてならない。意志あるもののやうな幻覺を抱かせずには措かない。霧ヶ原や

巖や平の切り削いだやうな斜面をその山腹に見たり、温川冷川、その他大小無數の谷川を驅使して山裾を剔つて行く力の凄さを前に見て、その感が殊更深いのである。

鳥屋の見張場からする展望は、かくして、地勢を敎へる地理標本のやうであり、神人歸一の王座である。

囮はさかんに啼いてゐる。

「もしもし、鶇さん、いらつしやいよウー！」

たいがいそんなところだらうと思ふ。が、それに釣られて來る小鳥の氣配はいつかうにない。世間の噂どほり不獵だといふのは矢張り嘘ではないのだなと、半分は氣の毒から、半分は遠慮から、わたしは見張場から圍爐裏ばたに降りて行く。そしてあぐらをかいた途端、何事が起つたのか、小舍がひつくり返るほどの揺れかた、どこかでプープーッパタパタプープーッとどえらい騷ぎ。あま

り突然のことなので裸足で危く飛び出さうとしたくらゐだつたが、見張場の騷ぎとわかると、わたしは初めて正氣をとりもどした。

「いくらも來やせんが、三四羽はかかつたづら。」

さう言ひながら、小父さんは鳥屋袋といふ職人が掛けるドンブリ見たいな前垂を首から吊して外に行つた。鶫が五羽とあとりが一羽捕れた。利一さんは早速それを貰ひ、毛を捲り、捲り終つたのは腹を割いて竹串に刺し、焙つた鳥からジューッと脂が滲み出たところで、備附の壺のタレをつけて叉火にかざした。

わたしは小父さんの後から見張場に登つて行く。一度でいい。小鳥を追ひ入れるところが見たいと思つた。そして、この朝二度目の小鳥の捕れる瞬間を見ることが出來た。

二三羽の小鳥が、囮の籠のある方に向つてチラチラ飛んで來た。それを發見した小父さんは、窓から外の雜木の枝に渡しかけてある竹竿を取上げるや否や、

半身を窓の外に乘り出し、ものの怪に憑かれたやうに、それを振りまくつた。竹竿の先に結びつけた古手拭みたいな巾がパタパタと冴えた音をたて、それに合して小父さんは口をプープープープーッと鳴らした。すべて永年の經驗からこの瞬間の動作には、わたしたちにはわからない祕密が藏されてゐるのだらうが、傍目には到底正氣の沙汰とは思へぬほどの一人騷ぎである。この騷ぎに仰天した小鳥は、次の瞬間には霞網にだいたい間違ひなく首を突きこんでブラ下り、觀念のまなこを閉ぢてゐる。そして二十分とたたないうちに、あの朝空を今の今まで飛び交つてゐた小鳥は、圍爐裏ばたの竹串の先端で、殉教者ならぬ死を死んでゐるのである。

　永昌寺の和尙さんが何處のか知らぬが、鳥屋に招かれてお經をあげたといふ話を耳にした。さもあらんと思つたが、後日、その永昌寺の御馳走に小鳥が出たといふ。和尙さんが鳥屋であげたお經を、小鳥の冥福を祈り殺生の罪を詫び

たものと早合點したのは、どうやらわたしの思ひ違ひであつたやうだ。

——小鳥の來る頃になりますと、色々な種類の小鳥が山を通りました。つぐみ、あとり、みやま、ほほじろ、やまがら、しじふがら——とても數へつくすことが出來ません。あの足の色が赤くて、羽に青い斑の入つたいかるも、他の小鳥の中にまじつて、好きな榎の實を食べに來ました。

木曾の山の中は小鳥の通り路だと云ふことでして、毎朝毎朝、夜のあけがたには驚くばかり澤山な小鳥の群が空を通ります。その中でも、群をなして多く通るのはつぐみ、ひわなどです。

この小鳥の群には、必ず一羽づつ先達の鳥があります。その鳥が空の案内者です。澤山に隨いて行く鳥の群は案内する鳥の行く方へ行きます。もしかして案内する鳥が方角を間違へて、鳥屋の網にでもかからうものなら、隨いて行く

鳥は何十羽ありましても、皆同じやうにその網へ首を突込んでしまひます。

「さあ、皆さん、お支度は出來ましたか。」

そんなことを案内する小鳥が言つて、澤山の鳥仲間の先に立つて出掛けるのだらうと思ひます。

鳥にも先達はありますね。――

御承知のやうに、これは藤村先生が「ふるさと」の中に書かれた「小鳥の先達」と題する文章である。次の章に「鳥屋」と題するものもあるが、孰れにしても、わたしはその童話の後に次のやうな補足的說明を加へたいと思ふのである。

――わたしは一羽の囮です。囮といへばはらじろ、まみちやしないを一緒にしたみやまとつゞみなどがその役を勤めます。わたしは勿論そのどちらかですが、人間はわたしのことを囮々と呼んでゐますので、今は便宜上たゞ囮といふ

ことにしておきます。生れた時から間でなかつたことは改めて申上げるまでもありません。藤村先生のお話のやうに、わたしたち仲間にも先達といふか長老といふか、とにかくそんな者がありまして、長い旅の途中、或る晩、惠那山に一泊したその翌朝、さあ皆の者、支度は出來たかな、それでは……といふその先達の合圖で次のコースに飛び立ちました。ところがこの先達、頗る臆病な癖に獨善的でお負けに氣が若く、皆の總意などは全く受附けようとしない。そして、今この時も危いなあ、危いなあと思ふ方向へ、大丈夫わしを信じて蹤いて來いとばかり、どんどん飛んで行くのです。それ以前にもこんなことで何度わたしたちは心配させられたかわかりませんが、今日からは名にしおう木曾路といふ難コース、出來ることなら惠那山にもう一泊し、充分協議した上で出かけて貰ひたいと囁き合つたくらゐでしたから、謂はば初めから無理だと思つた今日の出發。胸騷ぎがして、翔の動きも輕快ではありません。

飛んで行くほどに、追ひついたり、追ひつかれたりして、ひわ、ほほじろ、かしら、いかる、あをじ、かはらひわ、あとり、つぐみ、みやま、いかるなどが或ひは數羽、或ひは二十羽とわたしたちの群と一緒になりました。何しろ心細い者同志の旅だものですから、どちらがどうといふことなしに一緒になつたといふ方が適切でせう。初めのうちは他人同志だものですから遠慮もありましたが、だんだんそれもなくなり、お互ひの間では危險とはどんなものであるか、又それに出遭つた瞬間にはどう處したらよいかなどについて、色々話が出ました。

「鷹にさへ出遭はなければいい。鷹が一番怖いから、出來るだけ鷹に見附からないやうに飛ばうよ。」

さう言ふのは、ほほじろ君でした。

「でも、それが鷹だつていふことは、どうしたらわかりますの？」

つぐみちやんは不安さうな顔。

「鳥は鷹ぢあないか、だから直ぐわからあな。なあ、あをじ。」

と、くろじが同意をもとめます。

「なあにを言つてやがる。それぢあ何のことだかわかりあしねえぢやねーか。」

氣の短いいかるは、あをじの返事を横取りして、チッと鼻を鳴らしました。

暫く誰も口を利く者がありません。だからといつて納得したわけでは勿論ありません。

この時、後ろの方から、「あのー」と發言した者があります。みやまです。

「わたくし思ふんですけど、あのう、それは非常に現在の又これからのわたくしたちの旅行中重大なことだと思ひますから、いかがでせう、先達さまに伺つて教へていただくことにしましたら……。」

「あのかしらに？」

「さうです、あのおかしらにです。」

ほほじろ君はちよつと目を伏せて、贊成とも不贊成ともつかぬ、どちらかといへば、大丈夫かなあ……といふやうな、むしろ信頼し切れぬ顔をしました。

「さあ……。」

が、みやまは委細かまはず、かしらのところに飛んで行つて教へを乞ひました。

「鷹のことはわしが萬事心得てをる。お前たちはただ默つてわしの後から蹤いて來て、わしのするやうにすれば宜しい。」

と偉さうに言ひ放つたものの、本當のところかしらにはその鷹の脅威が實感として迫つてこないのです。ブーブーパタパタブーブーと凄い羽音だといふことは教はつてきたのですが、まだ一度もそんな襲撃に遭つたことがありませんから、その恐ろしさの程度がわかりません。かしらは小鳥の群の先達と思はれ、いや思はせてそのやうな態度で皆に臨んでゐますものの、本當は自信がないの

です。何でもいいから危いと思ふことに出遭つたら、急降下、地面すれすれに飛べばよい、とそれが危險に對處する唯一の逃げ道だと考へてゐました。ま、それはそれで間違ひない結構な考へなんですが、流石の先達さまも眞冬といふのに、木曾の山中で春情にふと目が眩うなどとは夢にも思はなかつたでせう。尤もこの弱點を衝いて來られては御先達のみならんやですが。――鳥屋師も偉いことを考へついたものです。ですから、小鳥の先達と呼ばれるほどの者が、鳥屋師の上を行くほどの修養をつむか、或ひは新工夫を創出しない限りは、その運命、ひいては何十何百羽の同族の運命は人間の手に握られてゐるのです。すくなくとも冬の木曾路を群れ飛ぶ小鳥にづいてはさういふことが言へませう。

話が理に落ちて申譯ありません。が、わたしたちが鳥屋師の思ふ壺に入つて霞網に首を突きこんだ經緯はざつとこんなことでした。囮となつたわたしのことは後でお話いたしますが、その前に、鳥屋師が鷹の威を借りた道具の簡單な

のには、わたしも吃驚りいたしました。ブーブー或ひはブーブーはその擦音を效果的に口から出すのにはちよつと練習を要するさうですが、パタパタと羽ばたきの擬音を出すのは、竹竿の先にカイキを手拭ぐらゐの大きさに斷つて繋りつけたのを力いつぱい振り廻すと、そんな音が出るのです。水にひたして振ると一層效果的です。カイキが無い時は洋傘の布を代用しますが、人絹とか、まして古手拭などでは絶對に役にたたないから微妙なものではありませんか。

　わたしの食生活のことを、ついでに少しお話いたしませう　まづ米糠の炒つたのと、大根の葉つぱを乾して粉にしたのと、米を炒つてコガシにしたものなどに沙魚の粉末を混ぜ合したものです。しかしこの沙魚を混ぜるといふことには一定の時期があつて、春夏の、つまりわたしに用のない季節には、沙魚をどんなに所望しても鳥屋師は聽き入れてくれません。で、沙魚なしのその春から夏にかけての食物は、米糠一升に菜つば一合、コガシ一合といふ割合で、先づ

やつと露命をつなぐくらゐの不味さです。秋十月、いよいよ鳥屋師につれて行かれる頃になると、この粟つぱとコガシが二合に殖やされますが、これに先立つて八月の中頃から食慾が不思議にすすみ始めるのは、十日ぐらゐづつの間隔を置いて沙魚の量がだんだん殖え出すからのやうです。増配といふわけですね。その殖えかたは、鳥屋の季節に入つてこのひた餌（米糠、粟つぱ、コガシを混ぜたもの）の量の1/3が止りといふのですが、この1/3になるまでには、前に述べましたやうに八月のなかば頃から十日ぐらゐの間をおいて、1/8、1/7、1/6、1/5、1/4、1/3といふ風な割合にその量を殖やしてくるのださうです。沙魚が混り始めると、目に見えて體が肥り、精力に溢れ、そこはかとなく憧憬れるやうな想ひ。わたしは獨り居が堪らなくやるせなくなつて、思ひきり歌つて友を呼ぶのです。

水浴はそれまでは十日に一度ぐらゐだつたのが、この季節になると三日に一

度といふ割。さうでもして貰はないことには、精力の發散のしやうがないので、このへんのわたしたちの生理をちやんと心得てゐる鳥屋師の偉さには、改めて感嘆させられてしまひます。

囮一同は、それぞれ自分の籠にはゐますが、部屋は一つで、三疊ぐらゐの南向き。朝四時半頃から鳥屋につれて行かれて、お晝ちよつと前には又歸つて參ります。それからは陽あたりの良い障子の蔭で、穩かな冬の日の午後を樂しみます。

思へば先達先達つて、藤村先生の仰有るやうな先達ばかりあるわけではありません。わたしたちの先達がその好い例で、あの先達のために敢ない最期をとげた者は殆んど百羽もありましたからね。尤も囮に墮ちてしまつたわたし風情があんまり口はばつたいことは言へませんけれど……でも、偉さうに構へてゐる先達の弱點を衝くのはわたしたち囮の勤め、これは仲々味なものだと思つて

ゐますよ。

運の好い時には好いもので、楠雄さんから鳥屋行の誘ひを受けたのは、衕々洞に行つて中二日おいた後のことであつた。今度は間違ひなく兵次さの鳥屋にしようと決めたが、それならと、わたしは十五になる菜摘をつれて行かして貰ひたいと申出た。實は前の年、この娘を初めて馬籠につれて來た時も三人一緒で鳥屋行の機會はあつたのだが、恰度その日は運惡く篠つくやうな雨になつて、東京から出て來た折角の希望を、これだけ叶へさしてやることが出來なかつた。暫く今度は滯在してゐるやうな事情ではあつても、子供だけで行けるといふものではなし、大人がこんな機會を揃つてつくるといふことも仲々容易ではないからである。

今度は夜の明けるのを待つて、わたしは菜摘をつれて綠屋に行つた。楠雄さ

んはさう急ぐこともないでせうと言つて、圍爐裏に鰐の頭部ほどもある薪を突つこんで、プーッと息を吹きこんでゐる。

「星は一つも出てないが、大丈夫かな？」

わたしが獨り言のやうに呟くと、明けがたといふものは、だいたいこんなものですよと厭に落附いてゐる。或ひはさうかも知れないが、それにしても怪し過ぎると重ねて注意すると、楠雄さんは初めて腰を上げ、外に出て雲行を觀察した。そして、怪しいなあと逆にわたしに言つて聽かせるやうな口吻を洩す。

「だから先刻から言つてるのにさ。去年も雨でお流れになつて、又今年も、折角出掛けようと思ふとこれだ。尤もここのところ晴天が續いたからなあ。」

それからも、わたしと茱摘は交々出たり入つたりして空模樣を見つづけてゐたが、最後に又楠雄さんが見て來て、大丈夫といふので、その勢ひで出發した。楠雄さんは背負袋(リユツク)に酒瓶と煮しめの入つたお重を入れ、御飯は途中谷川で磨ぎ、

鳥屋で炊くばかりにして飯盒を携へた。
馬籠部落もそろそろ起き出してゐた。
楠雄さんは兵次さの鳥屋は初めてではない。それでわたしたちは默つて蹤いて行けばよいのである。峠」といふのは馬籠から中仙道を妻籠に行く、その山路の峠のことで、木曾谿に降り、また木曾谿から出て來る「夜明け前」の峠である。どんな遠くからでも、そこに生えてゐる大きな檜と松とで直ぐ見當のつく峠であるが、その峠まで登つて見ると、兵次さの鳥屋へ入らうといふ徑の入口に、誰がやつてゐるのか知らないが、鳥屋があつた。楠雄さんに訊いて見ても知らない、初めてだと言ふ。
楠雄さんは先に立つて歩いた。わたしたちは默つて蹤いて行つた。しばらく行くと、水こそ流れてゐないが、明かに水路とわかるその縁の石の上を渡るやうに歩いた。徑では勿論ないが、これが徑になつてゐるのだらうと思つて、素

直に蹤いて歩いた。
楠雄さんが立停つた。わたしたちも立停つた。先を見ると、もう徑らしいものはなく、行手を高さ五六間もの崖崩れの斜面が立塞つてゐる。
「……へんだなあ。」
楠雄さんは首をかしげて呟く。「ちよつと登つて見て來ますからね、そこで待つてゐて下さい。」
さう言ひ殘して目の前の黄色い斜面をジグザグに匍ふやうに攀ぢ登つて行くと、やがて、この徑だつた、これが本當の徑だ、こつちに登つて來て下さいと叫んで手招きする。言はれるとほりに登つて見ると、なるほど歴然とした山徑の中途に出た。それから暫く危氣なしにこの徑を辿るのだつたが、いつまで行つても徑は平坦で、いつから登りになる氣配がない。鳥屋といふからには、最後は胸を衝くやうな勾配の上に在るのだらうと思ふのだが、どこまで歩いても

そんなところにかからない。通せんぼうをした丸太が徑を塞いでゐるのに行き當る。楠雄さんは默つてこれを無視する。わたしも茱摘も一列に步んで、それに倣ふ。徑はどうやら下りである。

「へんだなあ……」

楠雄さんは立停つて四邊を見廻す。淙々と谷川の水が森林に谺してゐる。「ちよつと登つて見て來よう、そこで待つてゐて下さい。」

さう言ひ殘して、楠雄さんは又、殆んど足場のないやうな山腹を垂直に攀ぢ登つて行く。

「見晴しが利くのーッ」

わたしは仰向いて叫ぶ。楠雄さんはそれに答へて何か言つてゐるらしいのだが、聲が弱々しくて聽き取れない。茱摘はもどかしくなつたのか、楠雄さんの後を攀ぢ登つて行つた。が、忽ち安定を失つて山肌にしがみついた瞬間、飯盒

をひつくり返し、米を一面にばら撒いてしまつた。わたしは内心プンプンしながら一粒一粒丹念に拾ふ。危いことはわかつてゐるのに、後から登つて行くからだ、と茱摘に言つて聽かす。

「へんだなあ……こんな筈ではなかつたのだがあ……。」

楠雄さんはひとりで煩悶してゐる。「もう少し行つて見て駄目だつたら後戻ることにしますか。」

それから更に一丁ばかりも奥に入つたらうか。徑は濕り、滑る心配がある。一番最後を歩いてゐたわたしは、と或る丸木橋を渡らうとして、アッといふ間に淺い谷川に仰向けに滑り墜ちてしまつた。その滑稽を、吃驚りして振り返つた楠雄さんと茱摘がだんだん笑ひ出したので、わたしも安心からテレ隱しに笑つてしまふ。

「もう駄目だと思つたね。」

「笑つて見てゐるひともないもんだ。」

「どうします?」

「どうしますつて、何を?」

「鳥屋をさ。」

「さうか、鳥屋行だつたんだな……後戻りとしようよ、楠雄さん。」

と言ひ、それから、傍らの谷川の水が餘りに清冽なので、先刻ばら撒いて汚れてしまつた米を、後戻りするにしても、ここで洗つて行かうと、わたしは、苔を流したり、枯草を拾つたり、木片をつまみ取つたりして……もとの美しい米にするまで十數度も洗ひ、そして磨いだ。

それからわたしたちは峠の方を指して、もと來た徑を引返して行つた。

「あれ、あそこだつた!」

突然楠雄さんが叫んだ。霞網を支へた棒が幾本か目についた。

「あ、あれが兵次さの鳥屋だつたのか、よかつたな。」

と、わたしは楠雄さんの身になつて喜ぶ。すると、今まで默つてゐた茶摘が、あれは峠の入口にあつたさつきの鳥屋だと言ふ。よく見れば、それに違ひない。けれども折角來たのに、このまま歸るやうなことになつても詰らないからといふので、ちよつとその誰のかわからない鳥屋に寄つて見ようといふことになり、その方に登りかけた途端、

「おーッと危い。」

と楠雄さんが變な聲を出して後退りした。見れば霞網に引つかかりかけてゐるところである。

鳥屋の親爺は炬燵に入つたまま、開け放つた窓から凝つと外に目を光らしてゐた。峠の路が霞網を透して見える。楠雄さんの言ふところでは、この親爺は神坂村の者ではあるが、中津川の方に行つてゐるのではないかと言ふ。別に惡

人ではなささうだが、峠に霞網を張つて旅の鳥ならぬ人の行き來を窺つてゐるといつた風景で、ちよつと凄い。

「かかるかね？」

楠維さんが訊くと、まるで駄目だと言ふ。わたしたちのせゐでもあるかのやうに怖い顏をして、頗る不愛想である。

「兵次さの鳥屋はどうします？」

「もう結構、歸らう。歸つて飯にしようや。」

第二次の鳥屋行はかうして全く失敗に終つた。楠維さんもわたしも今度はいのこづちやどろばうだらけになつて、馬籠に下る路を歩いた。

「日當を出して、子供に取らせるか。」

さう言つて楠維さんが笑ふので、わたしも菜摘もニヤニヤして歩いてゐると、鐵砲さと愛稱で呼ばれてゐる男が、馬を引いて登つて來るのに出遭ふ。

「鳥屋行きかなあし、えらい早い歸りだなし。」

「……………」

楠雄さんはただ笑つて答へない。

「捕れたかなあし?」

と、鐵砲さ。

「まあ、どうやらね。」

「ん、それあよかつたなあし。」

暫く下つて行くと又、峠に歸つて行く男に遭ふ。

「へ、お早ようございます。鳥屋行きかなし。少しは捕れとつたかなし。」

「駄目だな、ま……。」

「うん、さうかなし。それあ殘念ぢやつたなあし。」

馬籠部落の入口に着く。陣場の末木利一さんが家の前を流れてゐる山水で顏

を洗つてゐた。吃驚りしたやうに、

「はい、もう鳥屋に行つて來たとこか！」

と目を大きく見開いた。

わたしたちはただ笑つて答へない。

部落の中を歩いて行くと、先々で皆が皆、餘り早い鳥屋歸りに、驚きの挨拶を投げかけた。

楠雄さんはそんな挨拶を一手に引受けて、要領のいい笑ひでそれに答へるだけである。

雨になつた。

緣屋に歸り著く。妻君の吃驚り聲にここでも迎へられ、圍爐裏をかこんで坐る。飯盒を自在鍵に掛けてゐる間に、先づ何はともあれ一杯と、まだ沸きかけの溫い酒を呑む妻。君は、ただニヤニヤしてゐる皆の樣子に、狐につままれた

やうな不審な目でさぐりを入れる。……

ボジャロスチン描くところの、ツルゲネーフの狩猟姿を見てゐたら、わたしもこんなものが書きたくなつた。

握手

一月十日は中津町に福市がたつ日で、村は留守になるくらゐ人が出拂つてしまふといふ。そんな話を前々からいてゐた故か、ひつそりした一日をわたしは朝から炬燵に入つて暮した。訪ねようにも人は居ず、また訪ねて來る人も無いと決つてゐるやうなものなので、讀んだり、睡つたり、食べたり、喫つたりして物臭をきめこんだ。

雨戸を閉める前に濡縁に佇んで見る。少しでも隙間が出來ると外の寒さが部屋に滲みこむので、背後の障子をしつかり締めきつて、わたしは重那山と相對する。

馬籠に假寓するやうになつて以來の、これは一日の終りの慣しとなつてゐたが、

「山も暮れた……。」

わたしはそんなことを呟きながら、部屋に戻り、電燈のスヰッチを捻つた。戰時中のままの暗さである。

「一に十二をかけるのと十二に一をかけるのと」といふ題の本を讀んでゐた菜摘がふとわたしに眼を向けた。耳を澄して人の來たのを確める表情である。

「……?」

間違ひだらうと言ひながら、わたしも耳を澄す。

「誰か來た。」

「ほんとに?　行つてごらん。」

そこで漸く茱摘は炬燵から起つて出入口の方へ降りて行つた。玄關といはず
に出入口といふのは、この隱居所が階段で直ぐ大黒屋の内庭につながつてゐる
からである。
誰か來たのは確からしい。茱摘が返事する聲が片々に聽こゆる。
「……誰？」
戻つて來た茱摘に訊くと、聲をひそめて、
「儀助さんよ。」
といふ。
「儀助さんだつて……」
「ちよつと用があるつて。」
「父さんに？　何の用だらう、まあ、お上りつて言ひなさい。」
すると、茱摘は駄目だと人を咎めるやうな恰好をしながら、

「父さん出て……。」

と言ふ。

暗がりで儀助君は何だかモジモジしてゐた。膨らんだ背負袋(リユツクサツク)が眞新しくつて雪の塊でも背負つてゐる見たいだ。かねてわたしは彼が飼つてゐるロードといふ素晴しい鷄に目をつけてゐたところから、背負袋の中味を想定して、思はず微笑をこぼした。同じ隣組の儀助君が宵闇の中を人目をはばかるやうにして背負袋を背負つて來た。ロードでなくて何だらう。あの茶の毛並みが艶々と濡れてゐる見たいに光つてゐるロード。

「やあ！」

さう聲をかけたわたしの態度は、殊更親しく彼に受取れたことだらう……と、これは後になつてわたしが思ひ出し笑ひすることであるが。元來、彼とわたしは別に昵懇な間柄でも何でもないのである。彼から見るわたしは樺村先生との

つながりから馬籠に來てゐる東京のひとに過ぎないのであらうし、わたしからすれば彼は隣組のひとといふだけで取立てて親しく口を利いた男でもなかつた。彼が村でも名うての働き者だといふことはわたしは聞いてゐた。隣組の寄合などでは活潑な意見を吐くといふことも耳にしてゐた。儀助といふ名はそんなことからわたしの注意を惹くやうになつてゐたのだが、顔さへよく知らないくらゐだつたから、新しい交渉が生れるべくもなかつた。

去年の夏のことだつた。隣組の共同畑で甘藷の蔓返しをやつたことがある。馴れない仕事でどうかと思つたが、わたしも仲間に入れて貰つて敎はりながら一生懸命やつた。愉しかつた。ところで、愈〻歸らうといふことになつて丘を下りかけた時、わたしの前を歩く男が急に立停つて、足もとの叢に目を落したと思つて下さい。自然わたしも歩みを止めて何氣なくその男のすることを見てゐたら、蛇を摘み上げた。咽喉もとを締められた故か、蛇はダラリと垂れ下つ

てゐたが、死んでゐないことは確かである。彼はどうしたものかと、ちよつと考へる風だつたが、やがて小石を拾ふと、蛇の頭を地面に押しつけて、二三度コッンコッンと叩いた。つぶした頭から血が滲み出た。彼はそれを無雜作に腰にぶらさげた。ほんの二三分の間の所作である。

「ははあ、……」

わたしの頭にピンとくるものがあつた。「この男、この男が儀助君だな。」果してこの推定は當つた。そしてこの時以來、わたしは百姓として儀助君に尠なからぬ敬意を表し、途上で輕く挨拶を交はすほどの仲になつた。

「いつかの蛇、あれはどう處分したッ?」

「鷄の餌よ。」

「へえ、鷄の餌にね。喜ぶかね。」

「喜ぶの喜ばないのつて、お前さま、どえらい御馳走だぞなし、ほれ、見さつ

せれ、あれがおらの鷄よ。」
茶褐色の羽毛が濡れたやうに艶光りしてゐる鷄が二羽、堂々と、中仙道をわがもの顏に歩いてくる。白色レグホーンの三倍はある。
「ボリモースかね。」
いつか佐藤春夫さんと、その値の好いことで冗談を言合つた鷄だらうと思ふと、
「ロードといふ鷄だぞなし。」
と言ふ。この時一羽の方が首をくねり伸すと見たら、恐ろしく大きな洞羅聲をはりあげて鬨をつくつた。まるでシャリアピンだ。
儀助君はこの鷄飼ひに傾る熱心だつた。その熱心の故だらう、鷄はその後日増しに肥つていよいよ君主(ロード)ぶりを發揮し、殊に蛇の味を覺えてからこのかたのことだが、近頃では子供を追駈け廻すといつて喋いてゐたくらゐだ。が、新年

ではある。到頭締めて持つて來てくれたか、と、わたしは早、背負袋の中味を數人で舌鼓打つてゐるやうな氣になつたのである。

「……用があるつて？」

さうとぼけて言ふわたしの問ひに答へる儀助君は、まづ、

「それがなあし、折入つてお前さまに、こんなことを言つては濟まんが……。」

と、氣持の上で平身低頭のかたちである。話が少し違ふやうだが、それでもウンウン快く返事をしてゐると、彼の話はかうだ。

――今日は福市なので、友達數人を誘ひ合はせて、中津町まで行つて來た。往復四里近い路を歩いて寒さに冷え切つてしまつた。どこかで一杯やらうと思つたが、村に歸れば何とかなるだらうで歸つて來て、實は一軒一軒虱つぶしに探して歩いたんだが、無い。無いわけではない有るには有る、このとほり有るんだが、十五日正月に客があるので出せないといふ家もあつたけれど、そんな

わけで結局無い。しかし無いでは引受けた自分の顔がたたない。と、思案に暮れたあげく、お前さまのとこに来たわけよ。

「……そんなわけで、ほんとに俺ら、こんなことお前さまに言つて済まんが、……何でもするで……欲しいものがあるなら持つてくるで……一升ばかりあつたら……。」

わたしはウーンと唸つた。といふのはロードの期待が外れたからでもなければ、一升に吃驚りしたためでもない。實はつい先日、末木利一さんが何の折だつたか、先づ儀助ぐらゐ酒のありかを嗅ぎ出す妙手はないぞい、と言つたことを思ひ出したからである。勿論わたしのところには正月用として配給になつた酒が一升あつたが、しかしこれには手がつけられない理由があつて取つて置いてあるものだつた。岩右衛門さんといふ斯道の先輩がわたしにはあつて、木曽から湘南に歸る都度、どんなことをしてでも一升罎を下げて歸らなければ濟ま

ない事情がある間柄なので、これも今度歸る時のためにと、大事に、實は正月酒にもせずに取つてあるのだつた。

彼に追駈けられた狐が、身危しと見てとつたか啣へた兎を捨てて一散に逃げたといふ、それほど俊敏な儀助、その儀助君の入神の藝を目のあたりに見せられた思ひで、わたしは唸つた。よくも嗅ぎつけた。わたしの住居の前に立つたのはこれが最初なのに、その最初に酒を嗅ぎつけて來たのは面白い。岩右衛門さんには本當に申譯ないと思つたが、陰德あれば陽報あり、また何とかならぬものでもあるまいと、わたしは快く一升瓶を持出してやつた。儀助君は吻ッと安堵の溜息を吐きながら、背負袋の紐を解いて一升瓶を大事に大事に藏ひこんだ。福市で買物をして來たのだらう、フライパン、蜜柑、その他何か細々したものが入つてゐる中に、藏ひこんだ。

後日、利一さんに儀助君の腕前を見たと話したことから、利一さんがその酒

のいはれを儀助君に話したらしい。彼大いに恐縮して、こんどはおらに奢らしてくれと言ひ、十五日正月にはロードを締めて、利一さんと安藤茂一さんとわたしを呼んで御馳走してくれた。

一月十二日。

ボヤ炭を焼きに行かないかと、儀助君から誘はれた。去年の暮にもそんな話があつたが、折悪しく大磯に歸る豫定とぶつ突かつたので、大いに氣が動いたにもかかはらず、また、といふことにしてあつた。

ボヤ炭といふのは馬籠の人が炬燵に使ふ炭のことで、消炭よりは火持がよく、普通の木炭の粉ほどには火力が強くない點に特長がある。どんな木を焼いて炭にするのか知らないが、早い話が懐爐の灰と小指大の消炭とを半々に混ぜ合したやうなものと思へば宜しからう。

馬籠は中仙道沿ひに小さく寄添つた部落だとはいつても、それは山の背骨のやうな位置にあり、神坂村の東南を圍んでゐる山々を自分の高さに置いて眺めるやうなところである。深い谷々が湯舟澤川に向つて四方から刻みこまれたやうな地勢を見てゐると、あのスフィンクスの折曲げた指の一本一本を、蹲つた巨きな山の腹に見るやうだが、十月も末になり、冬の仕度に自然も人も忙しい季節になると、この指の一本一本を形作つてゐる山の方々から白い煙が昇るのが見られる。冬の初ほどこの煙の昇る數が多く、春に向ふにしたがつて尠くなるのは、これがつまり氣候と炬燵との關係を語るボヤ炭燒だからだ。

藤村先生が亡くなられた夏のことである。先生が朽葉を掻き集めて蚊いぶしをされた庭の**燃し場**の跡に眺め入りながら、ここから昇つた煙を考へると何だか象徴的だと語つた弔問客があつた。ボヤ炭燒の煙も蒼然とした山を背景にして一筋二筋、天までその跡を曳いてゐる。眺めてゐて決して飽きない景色であ

る。象徴的だかどうか、そんなことはさて措いて、哀しいやうな美しい馬籠景観の一つである。

さて、そのボヤ炭焼だ。

儀助、順一、治六、一夫、三郎君と皆二十代の働きざかり。わたしはこの青年たちの後に跟いて出かけた。健坊と呼ぶ儀助君の十になる子供も同行する。行く先は、馬籠から約三十分。瀧さの鳥居で名のある柄ヶ洞の先の高野といふところであつた。

わたしを除いて皆背負板を背負ひ、ボヤ炭を入れてくるカマスをそれに縶りつけてゐた。路には薄氷の張つたところがあり、残雪のある箇所があつた。一夫君がその残雪をカマス一杯詰めこんで運んだ。

現場は南向の傾斜で、既に切り拓いた雑木林の跡と覺しく、薪がそこに集めて山にしてあつた。ボヤ炭はその薪を作つた時に刈り取つた雑木、つまり雑多

な木の小枝を燒いて作る。小枝は傾斜一面に散らばつたまゝなので、一番手近なところにあるのを一ヶ所に集めて、然るべき分量だけ燒きあげると、また場所を次に移し、手近な小枝を寄せ集めては燒く。その一回燒きあげる小枝の分量はカサにしたら驚くべきほど多量なもので、男四五人がもの言ふひまもなく汗ぐつしよりになつて、集めては後から後から燒きついで行く、それも髮の毛をまるめるやうにして無理無體に引搔き集めてくる山ほどの小枝をだ。

り濛々と煙が凄い勢ひで昇つてゆく。昇つて行きながらくるくるとねぢりながら柱となつて、高く高く燃え上つて行く。人間ぐらゐのものは吹き上げてしまふかと思はれるほどの勢だ。ものの一時間もたつ頃を見計らつて小枝の補給をやめる。すると八疊の部屋を倍もしたほどに積み上げた小枝の山がだんだん低く小さくなり、燃え切つてしまはないやうにするためか、それを押へ押へしてそれでもなほ燻してゐると、最後に粉と炭だけになる。しかし、火の氣が無く

なつたやうでもこのままに抛つて置くと火の出る虞れがあるので、先刻、路で詰めてきた雪をカマスからしやくひ出して振りかけ、ふり混ぜておくのである。かうして一ケ所で燒いたボヤ炭はカマス二個に詰めてもまだ餘るくらゐである。

晝飯時までには三ケ所の炭燒が終つた。わたしたちは傾斜面の中腹にこさへた焚火を圍み、思ひ思ひの恰好をして辨當を開いた。

傾斜面の下は深い谷で、耳を澄すと流の音が聽えてくる。わたしは仰向けに臥て目をつむる。自然の懷ろに寢て、その靜寂さに氣が遠くなるやうである。ボヤ炭燒について來てただ拱手傍觀、何を爲たといふわけではないが、快い疲勞がある。いつも高いところに見てゐる雲が、ここでは山を匍ひ、谷を渡つて、今日は、東へ東へと動いてゐる。

雲を掴みたいやうな衝動を覺えながら、ふッと春の來ることを思つた。

一月二十一日。

眩しいやうな朝の陽射に浮かれて安藤茂一さんの家に行つて見た。裏庭に廻ると、ここも眩しいやうな午前の明るさ。樋から洩れる雪溶けの水滴がまるで雨の日のやうに忙しい。鳥籠の鶸も蘇つたやうに元氣である。

「こんなもの……へへへ……御覽になつたことがありますか。」

茂一さんがボール紙の蓋に乘せて奥から持つて來たものを遠くから見て、わたしはクリーム色をした細長いビスケットだらうと思つた。

「いよう、珍らしい。」

「御存知ですか。」

「御存知ですかつて……ビス……、」

と言ひかけたが、どうもさうではないらしい。クリーム色一色と思つてゐたら、五分置きぐらゐに横縞が入つてゐる。

「……虫？」

「御存知ですか。」

「知りませんね。何です、虫ですか。」

「ごとう虫です。」

「ごとう虫？……どうするんです？」

「うまいですよう。」

「食べるんですか、これを……。」

「へへへへ……。」

説明によると、これはカミキリ虫の幼虫ださうである。クリーム色をしてゐるのは脂がのつてゐる證據だといふ。長さ約三寸。凝つとして、死んでゐるやうだが、圍爐裏のそばに持つて行くと、ぢはぢは蠢き始めて、もつと伸びる。子供たちは最初、見るのも厭らしい風だつたが、燒いて食べさしたら、以來、

父さんまた採つて來てくれと毎日請む。駐在所の妻君にひと片どうですと奬めたら、身震ひして厭やな顏をしたから、ま、瞞されたと思つて、チョットやつてごらんなさいと食べさした。そしたら彼女も以來すつかりごとう虫ファンになつた。

「どうです、一と片燒いて見ませうか、へへへへ……。」

と、茂一さん、薄氣味わるい笑を漏す。どこからそんな虫を採つて來たんですと訊くと、薪にするぶなかくぬぎの樹皮に穴があいて、そこから木屑がこぼれてゐる、それを割つて見ると幼虫から成虫まで順を追ふて、多い時には六七匹も發見出來るといふことであつた。

木曾の人で蛇の味を知らない人はないやうだ。どんな綺麗な娘さんでも、なんらかのかたちでその味を覺えてゐる。怖い見たいである。

海邊の人が海のものを食べるのに不思議がないやうに、山國の人が山の生物

を食べる、それをとやかく思ふのは甚だ相濟まないわけだが、ごとう虫や蛇のことから、食用あるひは薬用にされる生物をあげて見よう

澤蟹——これは鏡花の作品で雪の中から掘り出される小さな蟹で、馬籠では正月七日、脚が多いところから方負けしない、つまり四方よろしといふ意味で、芽出度い食膳に上るもの——を初めとして、いなご、源五郎、さなぎ、地蜂の幼虫、蟋蟀、蟬の幼虫などが數へられ、鼠は食べて美味、藥にして寢小便に利くといひ、かまきりは幼虫は食べて美味、種油に漬けて使へば瘤の藥だといふ。山椒魚は癇の藥、いもりは食べるのかつけるのか聞き落したが失戀の妙藥だといふことだつた。

斷つておくが、木曾の人がこんなものばかり食べて榮養をとつてゐるわけでは、決してない、誤解しないで欲しい。

最後にまだ蛙のことを言ひ殘したが、これは後章で賞讃的に記述することに

する。

二月三日。

文平さんが蛙を呑んだといふ話を茶摘が持つてくる。經緯を聽くとかうだ。

安藤茂一さんはふきのとうが大好きだと聞いたので、それならと本陣跡の雪を掘つてそれを探した。二三日續けて探したら、やうやく差上げられるくらゐの數が出來たが、さうしてゐる時、一匹の蛙を冬眠から掘り起してしまつた。恰度その場に信夫ちやんといふ一年生になる文平さんの長男が居合したので、見せると、呉れと言つてそれを持つて歸つた。それから先は茶摘は自分で見たことではない、信夫ちやんが話してくれたんだが、文平さんは子供が持つて歸つた蛙を見ると、およしなさいねと止める妻君の忠告をしりぞけ、蛙を水洗ひしてケロリと呑んでしまつたといふのである。

「どんな蛙だつた？」

「どんな蛙つて……」

「青、いや緑色をしてゐた？　それとも褐色の……。」

「普通の蛙だつたよ。」

「大きさは？」

「親指の半分ぐらゐあつたよ。」

「それを呑んだつて、まるごと？……本當かなあ。」

「だつて信夫ちやんがさう言つたよ。」

「……………」

信じ難いことだつたので、わたしは默りこんでしまつたが、栄摘はそれが不滿だつたのかもわからない。それから、いつかそんなことも忘れてゐた或る日の夕方のこと。栄摘が——裏の畑に圍つておいた大根を掘つてゐる筈の栄摘が、

息を切らしたやうに部屋に馳けこんできた。そして、何事が起つたのかと目を瞠るわたしに大事を囁くやうにして、文平さんが本當に蛙を呑んだと告げた。
「また蛙見つけたの？」
「大根を掘つてゐたら居たんで持つて行つたのよ。そしたらね〝おゝ！〟つと喜こんで……。」
わたしは菜摘が巧まず眞似たその〝おゝ！〟から、文平さんが親類にでも巡り合つたやうな喜びかたを想像して、思はず噴き出してしまつた。
「そして本當に呑んだ？」
「水洗ひちよつとして、呑んだわ。」
愈〻これはえらいことになつたとわたしは思つた。どういふつもりなんだらうと、その意を汲みかねた。食べたといふのなら考へかたもあるが、呑んだとあつては、何か藥のつもりででもあらうか、これはどうしても確めておかなく

てはならない、後學のためにもと考へた。

「文平さん蛙つてものは、食用蛙は別としてさ、食べられるもんですかな。」

わたしは午後の茶時に訪ねて雜談をしながら、それとなく訊いて見る。

「そ、それあ、たべ、食べられますとも。」

「どんな蛙でも？」

「青蛙です。」

「うまいですか？」

「う、うまい、まづいではない。蛙は、い、胃の藥です。」

すると矢張り料理して食べる？」

「いや、そのままで結構です。」

「そのままで結構つて、呑んぢまふんですか。茶摘が、どうもさうらしいと言ふのを聽いたんですけれど……溫度が恰度いいつてんで、胃の中で鳴き始めた

らどうします。」

「い、いや、大丈夫です。咽喉を通るときに、ち、窒息してしまひます。」

「窒息してもですね……どうも話が凄いな、蛇なんかの消化器と人間のとは構造が異ふんぢやないんですか。」

「大丈夫です。もう、み、三日經ちますが、なんともありません。」

さう言つと文平さんはニヤリと笑ひ、それから啞然としてゐるわたしに、暫く沈默した後で、春になつたら、今年はうんと蛙を捕へて食べるんだと、いかにも肚を決めてゐるやうな話しぶりである。

わたしは歸つて、擒に向ひ、これからは餘り文平さんのゐる前で跳びはねるんではないよと戒めて、ニヤリ、文平さんの笑ひを笑つた。

二月十七日。

故藤村先生の誕生日にあたる日である。御存命なら七十五歳になられる。この夜、楠雄さんの綠屋で、原一平さん、安藤茂一さん、末木利一さん、それにわたしと都合五人で一夕の集會を持つた。原一平さんは藤村先生から楠雄さんを託されて、馬籠で農事の指導を承つたひとである。飯倉で鄕里の大先輩に會つたこと、それから楠雄さんを預るやうになつた經緯について、色々と珍らしい話が出た。

二月十九日。

東京、大礒、小田原に用事がたまつたので、わたしは今早曉、馬籠を發つて木曾路の東の入口になる平澤に來た。

馬籠が木曾路の西の入口になつて、あの芭蕉の句碑や諏訪神社があるのと同じ、この平澤にも芭蕉の同じ句を刻んだ石碑があり、諏訪神社がある。ただ、

馬籠が山の背を走る中仙道にあつて、四圍の眺望を恣いままにすることが出來るのにくらべると、こちらはV字型の谷間、そして太平洋に入る木曾川の流とは反對に、下は犀川、千曲川、信濃川となつて日本海に入る奈良井川が奔流してゐる。馬籠から出て來た木曾路をふり返ると、視野の兩側を奧に狹ばまる山の彼方に、鳥井峠が横向きに谷を塞いでゐる。

ここに初めて來たのは一昨年の六月一日。滴るやうな新緑の候であつた。二度目に來たのは去年の四月四日で、その時は例年になく寒く、春とは名ばかりだつた。今年は道の凍みも解けて、ここにも早、春の氣配があつたが、さうはいつても、馬籠の海拔五百米より更に四百米も高く、木曾路名うての寒いところである。夜が更けるにしたがつて淩々と冷氣が骨に徹へた。

去年の四月、二度目に來た時のことが頭に泛ぶ。あの時の寒さは痛烈を極めて、驛の歩廊で東上する汽車を待つてゐる時など、本當に氣が遠くなりさうだ

つた。
後で聞けば、しかしその寒さも一日かぎりのことで、翌日からは嘘みたいに暖くなつたといふ便り。春に向ふ暖かさが續いてゐる時、一日の峻烈な寒さが來て、その後が直ぐ又暖くなつたといふので、この時の寒さは妙に印象にのこつたが、ああさうだつたのか、あれは「冬」が別れの握手のつもりでした仕業だつたのかも知れないと氣づく時が來たら、過ぎ去つた「冬」が改めて懐しいものに思へたことを覺えてゐる。

・・・・

奈良井川の川音が谷間に響いて、今夜の寒さは、わたしを仲々眠らせない。

原一平氏

「――あれは、ああ、今上陛下がまだ皇太子殿下の時分でした。歐羅巴留學からお歸りになるといふので、全國からだつたらしいんですが、縣でも郡から二名づつ青年が選ばれて奉迎申上げたことがありました。わたしが藤村先生を飯倉に訪ねて行つたのはその時のことで、なにしろ鄉土の大先輩ではあるし、豫め挨拶もしないでお目にかからうといふわけだつたもんで、會つて貰へるか貰へんかといふことより、ただ何だか恐ろしいやうな氣がしたもんでしたが、事情を話すと、ほんとに快く會つて下さいましてね、農事のことなどわたしの知らないことまで詳しく訊かれて、それあだいぶ長い時間お邪魔しました。――

あれは、もう大正十年九月、二十五の時のことでした。」

語る原一平氏は本年五十歳、神坂村の村長さんである。

一平さんの家は清水屋といひ、馬籠部落西入口の車屋の坂を登つた右側三軒目の舊家がそれである。代々の主が皆誠實をもつて聞えた人であつたらしく、一平さんもその血を享けたか、その點はわたしが說明するよりも、藤村先生がただ一度の面接で長男楠雄君をこの人に托して百姓にすることに決められたその事實が、何より雄辯に物語るものといへよう。

「お祖父さんといふ人が、これがまた非常な敬神家だつたんですつて、」

と小園女史は前置して話される。「本陣前に津島さまといふ小さな祠があつたことはいつかお話しましたね。一平さんのお祖父さんがこの前を通られる時は直ぐわかつたといふことです。なにしろ大變な敬神家だつたもんで、『一二一二々々』つて……。」

「何ですかそれあ。」

「いえ、掌を合せて拜み拜み、通らうと思つても、勿體なく恐多くて通れない、一二々々つて仲々思ひきりが出來なく、最後に『三ッ！』と叫んで、漸く前を通り過ぎる。それでやつと氣がすんだらしいですが、歸りは歸りで同じことを繰返されるんで、うちでは『それお歸りだ』つて障子の穴から覗いたもんですつて。」

「一平さんのお祖父さんに當る人がねえ……何といふ人？」

「平兵衛」

　父君を松太郎といひ、一平さんの上二人は女、下は善平、三平といつて、一は哲學、一は史學專攻の篤學者と聞いてゐる。噂のことで眞僞のほどはわからないが、哲學者の善平氏が嘗て神坂村に居を構へた時の話に、人里離れた山中での暮しで、倒した木を一本そのまま端の方から釜にくべて風呂を沸したとか、

地面を凝視めて半日も動かなかつたことがあるとかいふ話を耳にしたことがある。餘程可笑しいことか珍らしいことでもあるやうなその時の話手の口振りだつたが、わたしはこんなことからでも、また平兵衛といふ人のことからでも、原一平といふ人を少しでも深く識らうとするその手懸りがあるのではなからうかといふやうな氣がするのだつた。

わたしはもう四年間もこの人を視てゐる。が、このくらゐ初も終もなく淡々として渝りない人をまづ見たことがない。寡默、謹嚴、鄭重とそのやうな德を一身に具へた人で、——それなら風采はと問はれれば、凡そ、その姓名から想像される人とは背丈も肉附も反對の人で、口には歯が一本しか見えず、大き過ぎるかと思はれるロイド眼鏡がいつも鼻の先で危く止つてゐる。

「それでもなあしお前さま、一平さまもこのところ供出米のことでは、よつぽど苦勞が多いと見えてなあし、めつきり痩せて……あの眼鏡が鼻の先を拔け

るといふ話だぞなあし」

かういふ表現で村人に親しまれてゐる一平さんである。

風采はともかく、いつから目立たない人だが、しかし、その目立たなさの奥に目立つてくるものがある。誠實である。藤村先生が看破されたのはこの一點であつたのだらう　飯倉片町に先生を訪ねて行つた折のことを訊くと、言葉では盡せない當時の記憶が歷然と蘇つてくる風で冒頭に誌したやうなことを語るのであつたが、改めても一度、

「餘り農業のことを詳しく訊かれるで、まこと吃驚りこいちまつたよ。」

と、今もつて恐縮してゐるやうな一平さんである。

「楠雄さんは幾つだつたんでせう。」

「ううん……と、十七だつたかな。」

「で、馬籠にいよいよ來るやうになつたのは？」

「その、ううん……と、翌年だつたから十八の……。」

と、そんなことを言ひながら、一平さんが文箱から出して見せた藤村先生からの手紙の中から、わたしは次のやうなものを拾ひ出した。

その後御便りしようと思ひながらこの一月半あまりといふものは處女地刊行の準備などにて隨分いそがしい日を送つて居まして心ならずも御無沙汰しました

積雄のこと御尋ね下され難有く存じます同子も漸く試驗を終へましたかねて四月には小生同伴歸省の上にて御願ひしたき心組でしたが處女地の創刊を目前に控へ思ひの外小生の身も忙しく只今の分にてはこの仕事を手放して行きかねる事情に迫られ昨今なぞは毎日のやうに印刷工場の督促に外出奔走の有樣ですからいつそ歸省はこの夏まで延ばし暑中休暇を待ちて新し

慕い參をかね子供等同道久々にて故鄉の地を踏みたいと思ひますその上にて貴宅の御事情等もゆつくり伺ひ楠雄の將來に就いても御相談を願ひたいと思ひますそれまでのところは楠雄も從前通り中學の方へ通はせて置くことにいたしましたどうも手紙の往復ぐらゐにて常人の將來を定めてしまふことも心元なく矢張楠雄を引連れ實際に貴地を踏みたる上にても遲くないことと考へ右樣の方針にいたしました何卒御含置き下され猶楠雄のことにつきては幾重にも宜しく御願ひ申上ます（中略）

○

いろ／＼委しく申上げたく思ひますが今夜はこれにて失禮します――三月十八日

島崎生

原樣

先日は御手紙難有く拜見しました墓石も無事届きしよし貴兄はじめ御地の諸君にはいろ／＼と御手數を煩はし御厚志深く御禮申上ます

當地よりは楠雄鶏二蓊助の三人來月初めに福島の高瀬家まで參りそこにて小生を待合せることにいたします小生は柳子引連れ來月の十日頃に當地を立つ心組です兎に角福島まで參りそれより子供等同道にて直ちに御地へ向ひます四人も子供引連れての旅ゆゑ御地着の上は永昌寺にでも御厄介になりたく存じます

御地も夏のさかりにて耕作其他に御多忙の時と想ひ皆さんの御邪魔になりはしないかとそれを心配します兎に角御地へ參るのは來月の十日頃と御承知置き下さい

御地皆々樣へもよろしく御傳へ願ひます昨日は蜂谷義一兄より御便りに接

しました
用事のみ草々

島崎生

七月二十八日

原一平様

猶〻當地出發の日取も今すこし先へよりて決定しましたら又〻申上ます

「――夏だつたなあ。」

と、さう言つて、楠雄さんは二十四年前の感懷を新にしてゐる風である。すると一平さんは一平さんなりに、

「さうだ……夏だつたなあ。」

と言ふ。七八の二人の年齢の違ひは、當時こそ若かつたが、今の楠雄さんは

既に白髪が濃い。その白髪の濃い、そして既に三人の子の父親である楠雄さんには、まだ春樹といふ名の父親がこの世のどこかに生きてゐて、なにくれとなく息子のことを案じてゐるやうな氣が、わたしにはあの晩年の寫眞の中の藤村先生を視てゐるとするのだが、「養子風塵間」といふやうな心持で書いたと述懷されたあの「嵐」の中の、子を思ふ片親のこまごました心勞を、次の手紙から汲んで、いまさらに胸うたれる。

楠ちやんも丈夫にお暮しのよし何よりと思ひます今日鐵道便に托し落合川驛留置にて柳行李一個差出しましたこの手紙をお受取り下さる頃には荷物は必ず着いて居ますから面倒でも停車場まで受取に行つて下さい受取の紙はここに同封します

今回の荷物は先の半分も重くありません(書籍のために先の荷物は重かつ

たのです）中に味付海苔が入れてありますから皆さんでおあがり下さいそれから最近に「飯倉だより」のために寫した寫眞を一枚入れて置きました明治學院の制服も古くなりましたが右は島へでも行く時に役に立つかと思つて入れて置きました

別に小爲替にて只今金十圓お送りしますから足袋等はそちらで買ひ求めて下さい其他何か入用のものは（シャツ、股引、サルマタ、下駄の類）そちらで求めて下さい今回は綿入を送りますが中に二枚ほど入れてある單衣は寢衣にして用ひて下さい

朝夕はそちらは大分涼しくなつたことと思ひます東京も秋めき何となく空氣も爽かで今は好季節です

來月の十五日頃には西丸さんの家の人達がそちらへ參るさうですから楠ちやんの許をも訪ねることでせう

先日父さんの近著二冊（飯倉だよりは楠ちやんへ、エトランゼエは原さん宛にて）御送りして置きましたから御覧下さい當方皆々無事です

九月二十七日

父より

父さんは楠ちやんの將來を樂しみにして居りますせい〳〵農業の研究を心がけてやつて下さい

「――そして、楠雄さんは一平さんの家に何年ぐらゐ居たの？」

さう尋ねるわたしの前で、楠雄さんは指折り數へ、一平さんは天井を仰ぎながら昔の日を追ふのであつたが、いよいよ楠雄さんの緑屋が完成してここに百姓として馬籠永住の住家が出來るまで、まる四年一つ釜の飯を食べたといふ。

「この手紙は莫迦に重いな。」

さう言つて葉書の後から拾ひ上げた昭和二年三月二十九日附の手紙。先づ一平さんに目を通して貰つてからと思つて差出すと、一平さんはちよつと眼鏡をづり上げてから分厚な原稿用紙二枚にぎつしり書かれた文面に目を落してゐたが、或るところまでくるとニタリと笑つて、

「ああ、さうか。」

と渡し、中途で、それを楠雄さんに渡した。楠雄さんも或るところまで讀んでくると、フフンと笑ひ、それでも興味深げに最後まで讀んで行つた。

「どうぞ。」

「いいですか、讀んでも？　それでは。……」

原　一　平　樣

（前略）

いろ〳〵楠雄のために相談相手となつて下さるよしをも承り何より心強く思つて居りますそれにつき過日から手紙で申上げたく思ひながら今日まで差控へて居りました外でもありませんがそれは楠雄も適當な生涯の伴侶を見定め行く〳〵身を堅めねばなるまいと思ふことですいつぞやお話のあつた御地の上ノ扇屋の娘の妹にあたる人はまだ高等小學を今年卒業する位の年頃に聞きますが私も楠雄の意志を確めその話を貴兄までお耳に入れて置きたく又お母上樣にもそのため御配慮を煩はしたく思つて參りました私の考へには楠雄もまだ年が若いししますから周圍の事情その他先方の親も悅んで承知して呉れ一切がそれを許すやうでしたら婚約の點までに話を運んで置いて頂きたいと思つて參りましたそして今二三年は先方の人の成長を待つことにしたいと願つて居ります實はその話はこの正月に楠雄上京の節いろ〳〵と話し合つて見ましして私もそれならばよからうと考へ貴兄まで申

上げて見るつもりで居ましたのですこれはさう急ぐことでもありませんがさうかといつて等閑に附し置くべき事柄でもなく先方の縁談などの始まらない中にと思ひ兎に角この手紙を差上げます委しいことは楠雄ともよく話して見て下さい楠雄は先方の容貌等に重きを置いてゐないやうですからさういふ人ならば反つて農家の主婦となるのにふさはしく私も考へて居りますこのことはいつか拜眉の上でと思ひましたが一應お耳に入れて置きたく今日は要點のみ認めました

三月二十九日

島崎春樹

「上ノ扇屋の娘の妹といふのは誰のことです。」

「今の房子さんです。」

「末木利一さんのお父さんかその時は存命だつたんですね、それで娘の妹か、

姉さんは現在……？」
「亡くなりました。」
「絲屋に移つて何年ひとり暮しをしたの、楠雄さん。」
「ううん……と、四年ぐらゐかな。」
「ぢや結婚したのは幾つの時？」
「二十七。」
「房子さんは？」
「二十。」
絲屋といふ屋號は、藤村先生は「嵐」の中で言はれたやうに「四方木屋」を希望されたらしかつたが、息子の考へに委されたといふ話である。

楠雄さんは今年四十二である。だから馬籠來住二十四年になるわけだが、こ

の間足掛三年だけ緣屋を空けて、家族あげて東京に移つたことがある。今から思へば、そして東京空襲があんなに激しくならなかつたら、今もつて東京に居たらうと思ふが、あれこれ思ひ合せると矢張この人は父親が決めたやうに馬籠から離れられない約束にあるとの感が深い。

どういふわけで楠雄さん一家が馬籠を引上げるやうなことになつたのか、そのへんの經緯は詳かにしない。けれども東京郊外に家も土地も買つて住つたことから考へると、相當深い事情と牢固たる決意があつたものと見ても差支へなからう。それにもかかはらず、この擧が僅か三年たらずで又元に戻つたわけは、前に話した戰線が帝都まで後退したことにもよるが、もう一つの大きな理由は父藤村の死である。

「親父が死ぬつてんで、東京に行つてたやうなもんだ。」

楠雄さんはさう言つてゐる。わたしもさう言はれると、そんな氣がしないで

もない。東京に移つても、綠屋はそのまゝにして、いつでも歸つて來られるやうにしてあつたことを考へ併せても。しかし、實際のところ父親の死に目に會つたのは鷄二君だけで、楠雄さんは間に合ふところに居たものを、電報遲延のためや何かで、結局それも叶はず、死後に驅けつけたやうなわけであつた。

父親死去の翌十九年になると、まづ鷄二君がセレベスのマカッサルへ軍屬畫家として出發した。次いで蓊助さんが中支へと同じく軍屬畫家として發つて行つた。

そして、戰爭もこの頃になると、斷じて神州に一機も入れじなどといふ咆哮に對する國民一般の不信は漸くたかまり、疎開問題も從つて考慮されるやうな空氣が日增に濃厚になつて行つた。

楠雄さんは家族を馬籠に歸すことに決め、自分は勤先に近いアパートで自炊生活をして艱難を乘切る腑を固めた。

ところが忘れもしない、その年の十一月一日のことである。わたしは正午近く楠雄さんを訪ねて、二三日後に控へた馬籠行の打合せをしてゐると、折から警報のサイレンが鳴り出して、それが今までになく物々しく、異様に方々から聞えて来るのである。警戒警報には好い加減に馴れてゐたので、又かと舌打したほどだつた。が、

「空襲警報かな？」

「……空襲警報だ！」

と、わたしたちは思はず顔見合はせた。そして、この帝都に初めて響きわたる空襲警報を更に確めようと、暫く無言のまま耳を澄してゐたが、間違ひない。

「矢張り空襲警、……」

「ちよッと默つて、何か言つてる。」

楠雄さんが後を言はうとするのを、わたしはさう押へた。附近を吼鳴つて歩

く癇高い女の叫びがある。

「空襲警報発セラレタリト雖モ、敵機ハイマダ帝都上空ニハ来テオラン！」

わたしたちは兎も角退避することにして、　に出る仕度をし、廊下まで持ちこんでゐた靴を片手にぶら下げて階下の玄関へと走つた。そして退避壕とは名ばかり、土を掻出した露天の穴に蹲んだ。

この空襲による被害は取立てて言ふほどのこともなく済んだらしかつたが、しかし地上の狼狽ぶりを嗤ふかのやうに、悠々と侵入して来て悠々と帰つて行く米機の自信のほどは、わたしたちの眼の前ではつきり實證された。

次いで帝都人にその惨害を先づ見本的に示したかのやうな空襲が、十一月末日神田美土代町から鎌倉河岸一帯に亘つて行はれた。この時は楠雄さんは家族の様子を見に、またわたしも用があつて孰れも馬籠に行つて帰つて来てゐた。

或る日のこと、楠雄さんからわたしの勤先に電話があつて、話がある會ひた

い、といふことである。訪ねて見ると、まだ確認されたわけではないがと前置して、鶏二君が死んだらしいといふ。なんでもセレベスからボルネオの方に飛んだ飛行機が着水の時海に突こんだ。その乗客の中に島崎鶏二といふ名が見えた。同名異人の場合もあることだから、さうと決めてしまふのは尚早かも知れないが、なにしろ鶏二などといふ名はまづ他に例が尠いからと内々海軍省の知人から話があつたといふ。四月に發つて八月一杯に歸つて來ると言ひ殘して行つた鶏二君である。が、その後は便りのことも餘り耳にせず、八月が既に十二月になつてゐたので、わたしたちの推測も勢ひ暗い方に傾いて、言葉もなかつ
。

「……で僕、色々考へたんだけど、」

と、なかば相談的ともとれる樣子で楠雄さんが話を切り出したのは、そんな悲しい內報が入つてから幾日も經たない頃のことであつた。「……色々考へたん

だけど馬籠に歸らうかと思ふんだが……」

「馬籠に？……會社の方はどうして？」

「罷めてしまつて。」

「さう……。」

わたしたちの間にはちよつと沈默があつた。

けれどもわたしが默つたのは、話の意外なのに吃驚りしたがためではなかつた。それどころか、よくそれまで決心したと思つたくらゐだつたのだが、直ぐにはそれを言ひ出し得なかつたまでである。

わたしが楠雄さんを識るやうになつたのは、藤村先生が亡くなられた時に始まる。ところが、それまでは馬籠で百姓をしてゐる人とばかり思ひこんでゐたのに、東京で會社勤めをしてゐるといふ話。これはわたしも意外だつた。ふるさとのことをあんなに懐しく語られた先生、農業で立つ息子にあれほど大きな

喜びと、期待をかけられた先生を識つてゐる人だつたら、楠雄さんから馬籠を離しては考へられないのである。「嵐」の讀者には尙更のことに違ひないであらう。

「馬籠に歸るつてね。……しかし歸つてどうするの？」

「一平さんにも、相談した上でと思つてゐる。」

「さうね、一平さんにね、それあいいな。會社の方を思ひ切つても、今後やつて行けるなら、それに越したことはない。で、いつ歸ることにするの？」

「まだそこまではつきりしてゐないけど、だいたい二十五日頃にしようかと。」

「歸ると決つたら出來るだけ速く引上げることだな。まごまごしてゐると、どうせ碌なことはなささうだから。」

そんなことがあつてから、また一週間ばかり過ぎたころ、十八日にわたしは木曾谿に行かなければならない用事が起きたので、そのことを言ひに楠雄さん

を訪ねたが、話してゐるうちに、二十五日と言はず、同じ歸るなら一緒に行かないかといふことから、楠雄さんも遂にその氣になつた。荷物はあるし、少しでも混雜を避けたい氣持から、朝九時八王子發の列車にしようといふことまで申合せるやうな慌しいことになつたのだつた。

　ところが當日八王子驛に行つて見ると、その朝から九時始發の列車が廢止になつたといふ。新宿發十時何分かの列車を摑まへようと後戻るにしてはもう間に合はないので、半分は諦めて、その列車が來るのを待つことにしたが、果して超滿員で足懸りも見附からない騷ぎである。仕方なくわたしたちはこの列車を見送つて、次の列車のために、せめて立川までで も後戻つて待つて見ようといふことにした。人混みに揉まれてゐると、楠雄さんは兎に角、わたしはその日のうちに木曾谿に著かなければこの旅行が全く無意味になつてしまふといふ心配から、眼も血走る思ひだつたが、さうしてゐるうちにも一種の度胸が出來

て、行けないものはどうにもならないではないかといつた氣持。やや平靜を取戻すと、東京生活をたたんで馬籠に歸らうとしてゐる楠雄さんの旅姿が改めて目につくのであつた。

右手にラジオの包、左手に衣類の包、例によつて背負袋を背負つて、戰鬪帽に國民服に綿布の編上靴と色褪せたカーキ一色の服裝。リュックの口が半開きになつてゐるのは紐が切れてしまつたのだといひ、便箋、貯金帳、帳面、新聞紙、衣類、筆箱などがゴッチャ混ぜになつて顏を出してゐるのも可笑しく哀れなのである。思へば嘗て一嵐一の中で藤村先生に伴はれて馬籠に歸つた太郞君である。その太郞君の再度の歸鄕にわたしが附添つてゐるといふのも、これも何かの緣であらう。

わたしたちは辛うじて次の長野行に足を突こむことが出來た。「叫喚怒號」列車は、八王子では案の定一人の乘車も許さず、山國へと谷間を縫つて登つて行

つた。

甲府で車を切られる憂目に遭つて萬事休したかと思つたが、僅かに外氣を入れてゐた二等車の窓の中に哀願した結果、漸く同じ列車を逃がさずにすんだ。それ以後は事無きを得て、深夜の木曾谿に辿り著き、三留野驛で楠雄さんと別れたが、二驛先の落合川驛には迎ひが出てゐるに違ひないといふ氣から、わたしは楠雄さんのことはもう心配しなかつた。ところが二日後馬籠に行つて見て、事實は想像と全く相違したことを知つた。

三留野から落合川までは約二十五分。楠雄さんがそこに著いた時は、やがて十二時にならうといふ眞夜中であつた。頼みにしてゐた迎ひの者は誰も見當らなかつた。どうして泊らなかつたのと訊くと、でも一刻も早く歸りたくてと速懷する楠雄さんは、リュック一つでも容易ではない驛から馬籠まで、ただ登りに登る約一里半の山徑を、東京を發つた時の旅裝のままで登つたといふ。

二三時ごろでしたでせう。表の戸を叩く音がするので、開けましたら、今にも死にさうな聲をして歸つて來たんでせう。あの時くらゐ吃驚りしたことはありませんわ。」

妻君の房子さんは、思ひ出し笑をし、楠雄さんは楠雄さんで、その時の疲勞困憊がまだ拔け切らない樣子で、弱い笑を聲にする。濟んでしまへば可笑しさが先にたつが、それでもこの山深い「ふるさと」に身を置いて見ると、歸つて來てよかつたと思ふのは、ひとり楠雄さんばかりではなかつた。

歸鄕の挨拶は、さて何を措いてもしなければなるまいといふことになり、その集りを催したのは、それほど後のことではなかつた。關係深い人に十人ばかり寄つて貰つたが、この席に原一平氏を見つけたのは言ふまでもない。顏の小さい割には大きすぎるロイド眼鏡が相變らず鼻の先で止つてゐるこんな一平さ

んは、末席に謙遜して目を伏せてゐた。何も彼も楠雄さんの今後のことがこの人の、あの思慮深さうな愼みの中で考へられてゐると思つて見ることは、楠雄さんのために慶びに堪へなかつた。

その事があつてから既に正月を三度迎へた。そして、この四月三日祭日の朝のことである。一平さんはわざわざ自分で訪ねて來て、漸く閑になつたから都合がよかつたら遊びに來ないかといふ挨拶である。供出米のことで殆んど役場に泊りこみだといふ噂を聞いて遠慮してゐたが、是非一度そのうちにお邪魔したいと先頃願つておいた、その返事である。

十四度も馬籠に來て、たいがいのことは見聞きしてゐたわたしだが、ただ一ケ所この一平さんの家にだけは上つたことがなく、どんな日中でも手探りせずには入つて行けないほど内部が暗いといふ大袈裟な話に、想像の手懸りを求め

るくらゐだつた。

座敷に通されて、暗い部屋から陽を一杯に浴びた庭を見ると眩しいくらゐであつた。わたしは思はず聲をあげてその庭の造りに目を瞠つた。

「よくまあ、あんな素晴らしい巖を庭に取入れたもんだなあ。」

母屋と土藏とで庭の三方を圍つた殘りの一方には、惠那山に續く富士見臺が見える。この頂を蔽ふてゐた雪も流石にこの數日來の暖かさに斑になつた。山國の、それもこのやうな舊家でなくては見られない古寂びた趣きが、家にも庭にも人にもあつて、緑青の美に見惚れるやうな味がある。

「綠屋の庭を造る時に一緒に造つて貰つたんですが、藤村先生は未完成のやうだと仰有つてゐました。いやあ何だ彼だつて戰爭騷ぎで庭どころではありませんでした。」

「見事な巖ですね。」

「梵天山から運んで來たものです。」

一生を拔きの職おあないんですか。しかし、それにしても、こんな山國だから出來ることですね。」

庭に坐つて床の間を仰ぐと島崎正樹翁の軸が懸つて、萬物靜觀皆自得　四時佳境與人同とある。又、假表裝のままだが、藤村先生自筆で特に一平さんの請ひに應じて贈られたといふ「唄の好きな石臼」が、壁面を飾つてゐる。

石臼ぐらゐ唄の好きなものはありません。石臼ぐらゐ、又、居眠りの好きなものもありません。冬の夜長に、粉挽きの唄一つも歌つてやつて御覽なさい。唄の好きな石臼は夢中になつて、いくら挽いても草臥れるといふことを知りません。ごろ〳〵ごろ〳〵石臼が言ふのは、あれは好い心持だからです。もつと、もつと、と唄を催促して居るのです。そのかはり、すこ

し手でもゆるめてやつて御覧なさい。居眠りの好きな石臼は何時の間にか動かなくなつて居ます。そして何時までも居眠りをして居ます。父さんのお家の石臼は青豆を挽くのが自慢でした。それを黄粉にして、家中のものに御馳走するのが自慢でした。山家育ちの石臼は爐邊で夜業をするのが好きで、皹やあかぎれの切れた手も厭はずに働くものゝ好いお友達でした。

一平さんの語るところによると、この童話が好きで好きで堪らないのださうである。さてこそ藤村先生も書いて與へられたのだらうが、先生の書としては珍らしいもののやうである。

一平さんの所藏で更に珍らしいものは、「嵐」の原稿である。改造に掲載された時の原稿をそのまま和綴に製本したもので、裝幀は紺一色の布地、ただ嵐

の一字が墨書してあるだけである。表紙を開けると謹呈の文章が毛筆で誌してある。一讀して、眺めてゐると、二十四年前も現在も同じこと、ただ當時と異ふのは、草葉の蔭から、

「一平さん、どうぞ楠雄を宜敷くお願ひしますよ。」

と賴んでいらつしやるやうに思へてならないのである。——

緑屋は馬籠部落の中心に在る。だから、そこが空家になつてゐることは、この部落で一番大事な前齒が缺けてゐる見たいなものだつたらうが、今日は納まる人が納まつてゐる。一平さんの一本しかない齒と同樣、この前齒、こんどはガッチリ入つたかと思ふ。

山歌

馬籠に行けば行くで、まだ幾日も經たないうちから海邊の家に歸る日のことが氣になりだし、海邊の家に來れば來るで、すぐまた、馬籠に歸る日のことが、わたしの滯在を慌しくさせる。

そこで。わたしは今海邊の家の裏山に登り、蜜柑畠を縫つてゐる小徑に腰をおろし、ステッキの上に重ねた兩掌に顎をついて、呆けたやうに眼を、夕暮近い相模灣に落してゐるのである。……

あと十日もしたら、わたしは落合川驛の露天の步廊に佇んで、今わたしを名古屋の方から運んで來た汽車が汽笛一聲、鐵橋を渡つて、木曾路第一のトンネ

ルに這入るその後姿を見送つてゐるだらう。

夜明けの六時から東海道線を走つて來て、時計を見ると、十七時を少し廻つてゐる。

驛前はすぐ木曾川。ダムになつてゐるので、瀞の美しさである。わたしは先づ運送店に寄つて電話を借りる。

「神坂の郵便局ですか。菊池ですが、今歸つて來たところです。久代さんはおいでゞ？　ああ、久代さん、今落合川に著いたところです。恐れ入りますがね今歸つて來たつてね、隱居所に傳言て下さい、それから楠雄さん、利一さん、安藤さんがたにも、賴みます、今から上つて行きます。」

わたしは料金を拂ひ、それから四股を踏むほどの心構をして、馬籠まで約一里數丁の、ただ登りに登る山徑に第一歩を踏み出すだらう。

藤村先生が道しるべと書かれた最初の石碑は、トラックにぶち折られたかし

て、二つに轉がつてゐるだらうが、わたしは運送店の前からすぐ土堤の上の鐵道を横切り、森林鐵道の軌道内を小一丁歩いて、最初の道しるべから這入つて來る神坂村への山徑に出る。

赤土の、山水に洗ひ流されたやうな徑で、ゴロゴロと大石小石、足の踏み場もない。左から右へと大きく弧を描くやうにして行手の丘の端に登つてゐる徑の兩側は、上下とも段丘をなした田圃である。――たいがい丈夫な靴でもここを二三回往復したら、まづ底が二つに折れるだらう、とわたしはそんなことを思ひながら、そろそろ肩の荷を氣にし、喘ぎ始めるであらう。最初の小さな松林がある。そこには路傍に、腰をおろすのに相應はしい石がある。汗を拭きながら振り返つて見ると、まだいくらも來てゐないのに吃驚りするが、木曾川のダムも鐵道線路も、既に飛行機からでも見るほどに下になつてゐる。

その線路を東海道線に、そのダムの滿々たる水を海と見て、わたしは海邊の

家の裏山からする眺めを、ふと懐しく思はないだらうか。……

徑は又、左から右へ大きく弧を描いて登つてゐる。その先端の一筋の徑を同じ方向に動いてゐる人の點が見える。その又彼方に惠那山が大きく、いくぶん右に傾いで頭を現はす。

「えらいところですなあ、皆もさう思つて吻ッとしたのださうですが、わたしも實は『ああ、やつと馬籠に著いた』と思つて……。」

團體で神坂に登つて來た木曾谿の先生たちの述懷であるが、このあたりの部落は大久手といひ、まだ岐阜縣に屬してゐて、落合川驛から馬籠までの十分の一といふところである。わたしが初めてこの山徑を登つたのは昭和十八年十月七日の曇つた夜更けだつたが、チラチラするこのあたりの人家の灯を見た時は、矢張り救はれたやうな叫びをあげたものだつた。

「到頭來ましたね、馬籠に。」

そして、楠雄さんや鷄二君、利一さんなどに笑はれたことは勿論である。

大久手の部落の中頃に地藏さまが祀つてある。わたしはその前を通りながら脫帽して心持頭を下げるに違ひない。戰時中、家族を神坂に殘して上京する時、わたしに萬一のことがありましても家族だけはどうぞお護り下さいますやうにと心に祈つてこの前を通つたあの時の哀しい氣持が、ふッと胸に來るに違ひない。――わたしは物々しい神さまなんかより、ヨダレかけを懸けたあなたが好きですよ、とそんな冗談も、ことによつたら言つて通るかも知れない。

徑はやがて凄い登りになる。最近、馬籠の人が總出で新しい道を拓いたり、修理したのもこの邊からだ。步きよい點では舊に優るが、それでも、登りを、降り

にしたわけではない。丕道程の半分といはれる「休み岩」に辿りつく頃は、冬でもまづグッショリ汗を掻く。

神坂の村長さんは、戰時中は蜂谷朝吉氏がこの役を勤め、終戰後は前にお話した原一平氏が選ばれた。戰時中も終戰後も村長さんの忙しさは傍眼にも氣の毒なほどである。地方事務所が木曾福島に在るので、やれ相談だ、會議だと、その忙しさは一日置き見たいな印象を受けるのだつたが、そのつど、神坂の村長さんはこの長い山徑を往復しなければならないのだ。「休み岩」で一と息入れてゐる村長さんと一緒になつたことが再三あつたが――わたしはこの「休み岩」で凉をとりながら、村長さんの帽子について思ひ出すであらう。

それは朝吉さんのも一平さんのも古さにおいて甲乙がない。神坂村はじまつて以來、村長たる人は代々この一つの中折帽子を引繼いで行くことになつてゐ

るのではなからうかと怪しむほど、それは古く、埃を被つた上から汗痕が滲んでゐる。鍔が並はづれて廣く、糸屑が所々に垂れて、褐色とも鼠色とも灰色ともつかぬ異樣な色をしてゐる。孰れにしても、しかし、中折帽子であることには間違ひない。――皆さんの中には、いつか馬籠に行かうとして、或ひは馬籠からの歸りに、神坂村の山徑で、或ひは落合川驛あたりで、そのやうな中折帽子を頭に乘せてゐるか、ズボリと被つてゐるかしたもの靜かな、伏目がちの御人を見かける人があるかも知れない。人よりも帽子をよく見て下さい。それが古ければ古いほど神坂の村長さんであるパーゼンテイジが高いわけです。

今井登志喜教授から中學時代歷史を教はつたことがある。何かの折の雜談に、教授が中學生時分、峠越えの通學の往き歸りに、その峠の上に小石を一つづつ運んで一日一日の勉學の勵みとしたといふ思ひ出話が出たことを覺えてゐる。たしかこの話も長野縣でのことのやうに記憶してゐるが、わたしは何もそれを

思ひ出したからといふのではない、けれども寂しい山徑を往き歸りするうちには、その時その時の想ひを何等かの形で記念しておきたいといふ氣が、とかく起きるものらしい。ここを登つて來てこの「休み岩」で一と息入れる時には、わたしもいつ頃からかそんな氣になつて、小石をその都度ここに置いて見た。そして、五つか六つまではやつたであらうか。結局、石運びが主になり、通るたんびにそんな考へに縛られるのが面倒くさくなつて、廢めてしまつた。廢めてしまつてからも、わたしの小石は暫くそのままになつてゐたが、石の方でもわたしが通るたびに氣を使ふのが面倒くさくなつたのか、この頃は、いつからともなく、どこかへ行つてしまつた。

「休み岩」からする展望は、落合町を遙か下に見て、ダ・ヴィンチ考案飛行人間圖をそのままに、ふわりふわりと飛んで見たいやうな誘惑を感ずる。それは恰度わたしが、蜜柑畠にゐて、脚下から擴がつてゐる海に、ちよつとダイヴィ

ングをやつて見たいといふ衝動に驅られるのと相通ずるものがあるやうだ。

「あれは大正十二年頃のことでしたらうか、藤村先生がお見えになつた時のことでした。落合川から馬籠まで、樹蔭の無いのはえらいだらうと仰有つて、プラタナスの苗木を百本ばかり寄贈されたことがありました。有難く、みんなでそれをこの徑に植ゑましたが、氣候が適さないのか、土地が合はないのか、殆んど育たないで、僅かに二本が漸く殘つてゐるだけです。」

その二本のプラタナスが、「休み岩」の先約二丁ほどのところ、徑の右側に細い山水の流を挾んで生えてゐる。高さ六尺に滿たないまだ幼樹で、このあひだ降りて來る時には、羞かしさうに芽を噴いてゐたが、今ごろは微風に葉をそよがしてゐるであらう。

先日安藤茂一さんと別れしなに、このプラタナスは永久に失くしたくない、

由緒を誌した板をそこに建てたいと語り合つて來たが、ことによつたら、安藤さんの手でそれが建てられてゐるかもわからない。

この二本の幼樹から約十間ばかり離れて、ちよつと足を踏込めさうもない岩ばかりの荒地の中にポッリと一本、柿の木のやうな老樹が生えてゐる。ナンジャモンヂャだささうだ。

——

ここまで登つて來れば、あとは中仙道に出るまでもう一と息。わたしの足は撥む。境界は確とわからないが、この石のところ邊で……と言つて利一さんが教へてくれた岐阜縣と長野縣との境界、そこを跨ぐやうにして、わたしは歩くことであらう。

中仙道まで辿り著けば、右は新茶屋から十曲峠の下り道だ。新茶屋に行つて見ないことも久しいが、

あの句碑のある前の家の、雪の二月の或る日——さう、あれはわたしが先生歿後、最初の御誕生記念の二月十七日を上松で送つてから、その足で馬籠に来て、おゆふさまにお目にかかつた、そして利一さんに送られて十曲峠を落合町へ下つた日のことだ——あの日のなんでんの赤い實がいつ思ひ出しても眼に染みるやうに紅い。

山徑の印象は暫く平凡になる。昔のままの石疊の個所が處々ある。坦々として——と形容したいところが、そんなところさへも灯なしでは夜道は一歩も歩けない凸凹道、曲りくねつた道である。

二十分も歩くと諏訪神社の杜が眼に入る。

わたしは禰宜さまの宮口老人に挨拶しようとちよつと道を歪げるだらう。

「おや、誰方かと思つたら……これはこれは、今歸りかなし。」

さう言ふ禰宜さまは、島崎正樹翁に教はつたことのある老人である。わたしはまた正樹翁の字かと思つた、と評されるほど、故翁の筆蹟そのままの書をよくする人である。

嗣子の宮口さんも顔を出されるであらう。それとも夫妻ともまだ國民學校のお勤めから歸つて見えてゐないかな。晩年の東郷元帥に似てゐる宮口さんはいつも温厚な人柄を思はせるあのニコニコ顔。そこに妻君も出て見えるだらう。一年生を受持ながら、寺田寅彦博士の「觸媒」などを讀み、時には可愛ゆくて可愛ゆくて堪らないといふ風に、わたしにこんな話をして聽かせる婦人である。

永昌寺に寫生につれて行つたんです。そして、ほれあそこに三本大きな檜があるでせう。あれを寫生させませうと思つたんですの。そしたら皆一生懸命脱

めつこしてゐる見たやうでせう、いまに描き始めるだらうと心待ちしてゐるのに、いつまで經つても、いつかうそんな樣子も見えない。ただむつつり默りこんで、難しい顔をしてゐるのです。變だなと思つて到頭健といふ子をつかまへて訊いて見たんですの。そしたら、返事がふるつてるぢやありませんか『あんなでかい木を、こんな小さな紙にどうして描けすカ！』ですつて。これにはわたくしも參りました」

諏訪神社の前を通つて行くと道は降り坂になる。降り切つたところで水邊に胡桃の樹のある木橋を渡る。次は疲れた脚に長い「石屋の坂」となり、登りきつたあたりの右手に「首曝しの岩」がある。最後に、そして農會の倉庫のそばから、胸を衝くやうな「車屋の坂」になり、吻ッとしたところが馬籠の西入口となるのである。

わたしは三浦屋に聲をかけて安藤茂一さんに挨拶するだらう。

それから郵便局のドアの間から顔を入れて、久代さん、さつきは有難うと言ふだらう。

「只今歸りました。」

次は綠屋に寄つて、楠雄さん、只今！　いづれ東京の話は後ちほど……と挨拶する。それからそろそろ暗くなつて足もとの危い道を登り、本陣跡の畑の小徑づたひ、やがて大黒屋の內庭に入り、隱居所に著く。

三疊と八疊と、そして天井の低い中二階の隱居所である。去年四月から家族を住まはした家である。茱摘は學校の關係から海邊の家に預け、今は母と幼兒と、わたしの留守は二人暮しの家である。

電燈の傘は戰時中のまゝで、赤い灯が疊に光を圓く落してゐる。わたしの坐

ゐ位置は、床の間と袋戸棚を背後にして、「飯倉だより」によると、藤村先生が幼い頃、この隱居所にお祖母さんを訪ねた時、お祖母さんが背後の袋戸棚から味淋を出して飮んだ、とあるそのお祖母さんの位置である。

わたしは文平さんが作つてくれた大机を寢臺代用にして、その上に眠つてゐる幼兒の顏を覗きこみたいと思ふだらう。が、汽車の長旅の間には、或ひは天然痘や發疹チフス患者に接してゐないと、どうして保證されよう。わたしは眞面目に考へてちよつと控へる氣になるかも知れない。けれども結局は精神力に賴つて怖る怖る幼兒に顏を持つて行くだらう。そして微かな寢息を聽きとるまでは安心しないであらう。

わが宿のいささ群竹吹く風の音のかそけきこの夕かも

幼兒の微かな寢息と障子の外の竹叢を渡る風と・・わたしはこの時初めて馬籠に歸つて來たことを沁々感ずるであらう。

「おッ、こんなところにゐたんですか。」

聲のする方を見ると、通男君がわたしを見上げるやうにして蜜柑山の徑を下から登つて來る。手に吊し籠を下げてゐる。

「どこに行くの？」

「豌豆を採つてきます。」

さう言ひながら彼はわたしの前を通り過ぎたが、やがて振り返ると、

「蜜柑の花が匂ひますね。」

と言ひ、その後からまた「蜜蜂がブンブン・・・・」

と、人の好い笑ひを笑つて、蜜柑畠の奧に姿を消した。

海上一面、淡く白を刷いたやうな展望の中に、遠く稲村ヶ崎あたりに薄陽が部分的に射してゐる。

——今度、馬籠に歸つたら……とわたしは考へる。今度馬籠に歸つたら、第一に薪拾ひに行かなければならない。この間發つ前に、拾ひに行つてくれと頼まれたのに、つい忙しいのを口實に行つてやらなかつたが、今頃は大きい薪ではどうにもならないあのコンロのことだ、薪が無くて困つてゐるかも知れない。拾ひに行く先は「バンビの森」である。本當の名は青野といふところにあるから、「青野の森」で通つてゐるのだが、いかにも仔鹿のバンビの棲ひを思ひ出させるやうな深い、それでゐてすこしも氣味悪くない檜と杉の森なので、自家ではいかにも愉しい話題を提供してくれる森であるところから、こんな名が與へられてゐるのである。

最近——といつても今年になつてからだが——この森に行つたのは二月の頃であつたらうか。茶摘と相談の上、ハルさんを誘はうといふことになつて、普段なら永昌寺の下を通つて山口村の方へ歩いて入つて行く路をとるのだが、この時は大黒屋の裏畔づたひにハルさんの家へ登つて行き、お薬師さまのそばを通り、二三度山径を登り降りして「バンビの森」の方へ歩いた。

讀者の中には、去年の末わたしがこのハルさんを馬籠の乙女の中から選んで貰つて海邊の蜜柑山に働きにつれて來たこと、そして愉しく皆で蜜柑もぎをした日のことを記憶されてゐるかたもあらう。そのハルさんは、海邊の家の人々に別れを惜しまれて馬籠に歸ると、まだ一と月と經たないうちに嫁さまに話が決つたやうなわけだつた。式は陽春四月ごろとか人傳に聞いてゐたが、新しい家庭を營むその新しい家の建築材はいつさい「バンビの森」から切り出されるともいふ噂だつた。

十貫餘も入るあの籠に蜜柑を背負つて山を降りるハルさんが、皆と一緒に一と息入れたのは、今わたしが腰をおろしてゐるあたり、そして結婚後、海邊の家の夫妻に寄せた消息の端に――もう一度でいい、御地に行きたいと何度思つたか、また思つてゐるかわかりません。懐しいままに、あの裏の蜜柑山の小徑から眺めた眞鶴の方の景色を、馬籠から見える中津の夕暮の灯に思ひ描いてゐます云々と書いたその位置である。

「ハルさん、式はいつ擧げるの？」

「……」

「だいたいのところさ。海邊の家の小父さん、小母さんが、わかつたら報せて貰ひたいつて言つてたよ。何かお祝をしたいらしい。だから葉書でもいい、何とか言つてあげなければ、悪いよ。」

ハルさんは、わたしがさう言つてもただ默つてゐて、返事をしない。羞しくて言へないのか、或ひはまだ日が本當には確定的でないから默つてゐるのかと色色に考へるのだつたが、いつまでも默つてゐる樣子に、何か諦めに似たやうな哀しいものが感じられるのはどうしたものだらう……。わたしは、ああ、こんな話に觸れてはいけなかつたのかと、内心狼狽してしまふ。

が、しばらくして、ハルさんは思ひつめたやうな樣で獨り言のやうに言ふのである。

「おら、も一度、蜜柑山に行きたいと思つとるよ。」

薪拾ひに行く途すがら、こんなことを話し合つたこともあつたが、それにつけても思ひ出されるのは、いつか栃ヶ洞の家を訪ねた時、七十四になるお婆さんが歎いたあの述懷である。

「……それでもなお前さま、わたしがあんまり顏を見るたびに賴みますので、

電燈屋さんも可哀想と思つたかしてなあし、「お婆さま、安心さつせれ、今に電燈がつくやうに、おら何とか骨折つてやるで。」と一と頃は言つてくれたもんで、ああ有難や、これでわたしも生れて初めてわが家に電燈がつくのを見て死ねると、シンから樂しみにしてゐましたが、それも早や、こんな時世になつてしまひましたのでなあし……

「中津の方から嫁入つて來る時には、行けども行けどもこんな山坂登つてなあ……いつたい、どこまで山の中につれこめば氣がすむんだらうと思つてなあし、腹が立つやら、心細いやら、哀しいやら……來て見れば御覽のとほりの山の中の一軒家でなあし、その時の淋しかつたこと、情けなかつたことといつたらありません。

股引をはいた人で、時たま訪ねて來る人があると——わたしの里の中津の方では普段男は股引をはいてをりますでな——今度は今度はと、賴めば嫌とは言

ふまいと思つてなおし、どのくらゐこの家をおいて（拔け出て）つれて歸つて貰はうと考へたことがあつたかわかりませんが、さう思ひながら、お前さま、早やかれこれ五十年になります……。」

死なむといふにあらねども
涙ながれてやみがたく
ひとり出て佇みぬ
海の明けがた海の暮れがた
――ただ靑くとほきあたりは
たとふればふるき思ひ出
波よする近きなぎさは

けふの日のわれのこころぞ

今度馬籠に歸つたら、わたしは「パンビの森」に訪ねて行くであらう。けれども嘗ての日、一緒に行つた茶摘もゐなければ、ハルさんもゐない。ハルさんには殊によつたら田圃のくろで逢ふかも知れないし、もしさうだつたら、ハルさんは姉さん被りの手拭を取つて、キチンとしたお辭儀をするだらう。そして、いつお出になりましたと、標準語を使つて捺へ目な挨拶をするだらう。その後で、蜜柑山の小父さん小母さんにも變りはないでせうかとも言ふであらう。足は泥にまみれ、晩烏蓑を背につけて、或ひはもう嫁さまになつて働いてゐるかもわからない。

薪拾ひに草疲れたわたしは、生々しい檜の切株に腰をおろし、恰度今、蜜柑山の小徑でぼんやり海を見てゐるやうな恰好そのままに、棒切れの上に重ねた

兩掌に顎をのせて、ぼんやり地面に眼を落してゐるかもわからない。すると、そして、これは屹度さうだと言つてもいい、數日前のことになつてしまふ今日この一と時の、あの汀の波の音が、遠くなつたり、近くなつたりするであらう。

………………

附記――文中の和歌は大伴家持作、詩は佐藤春夫作「殉情詩集」中「ためいき」の終節である。

附錄地圖

木曾路略圖
塩尻
贄川
平沢
奈良井
奈良井
木
曽
川
御嶽山
赤沢
上松
須原
野尻
三留野
川
田立村
坂下
山口
妻籠
蘭
川
峠
馬籠
落合川
新茶屋
十曲峠
恵那山
飯田
名古屋
E
S

馬籠及其附近略圖
峠
N
E
W
S
塩沢ばし
下
り
坂
川
本陣跡
永昌寺卍
山口村←
梵天山
石屋ノ坂
諏訪神社
新茶屋句碑
十曲峠
霧ヶ原
湯舟沢
坂下町へ
中津川町

あとがき

わたしが馬籠に行き始めたのは、書中で既に語つたやうに、藤村先生が亡くなられてからのことである。遺髪埋葬式が夜明け前の萬福寺として名高い永昌寺で行はれたのが昭和十八年十月九日でその時だつたから、まだまる三年にはなつてゐない。その間に大磯と馬籠を往復することと十八回、馬籠に滞在中側へは岐阜縣とか愛知縣を六數日を必要とした北信の旅の往復を數へると二十數回にも及ぶだらう。何回往復した、何回往復したと云ふのは水臭い、面白くない、あなたはもう馬籠の人間だ、と楠雄さんは仲々巧いことを言ふが、このくらゐ出たり入つたり、いや登つたり降つたりしてゐるうちには、血に、心に、言葉につながるふるさと、と藤村先生が嘗て神坂村に贈られたとき皆に語られたといふ言葉が、單に言葉の綾としてでなく、そののつぴきな

らなさが、よく解つてきた。家族を移し村人との交渉に深入りして見て一層その感が深い。そのやうな意味では、馬籠行はわたしにはいい勉強になつたと思つてゐる。
馬籠行第六回目、即ち昭和二十年四月一日からわたしたち一家は、大磯の家はそのままにして、馬籠本陣跡に殘つてゐる由緒深い隱居所にしばしの假寓を見出した。そして終戰後の十一月十日、この日わたしは海邊の蜜柑山に來てゐたのだが、電報で長男が生れたと云ふ報せを受けた。最初の子供から十五年目のことである。本書に收めた一聯のものが、大磯と馬籠と小田原在の蜜柑山とで書き綴つたものであることや、家庭ではこのやうなことがあつたことを本書繙讀の便宜上述べておかなければなるまい。
この本が一貫した企畫と構成とを持つたものでないと云ふ點から考へるならば、《馬籠》と銘打つことは避けるか、さもなければ書題に忠實にこれをベデカ案内書的に誌すべきであつたかも知れぬが、その孰れともつかぬ妙に物語めいたものとなつてしま

つたことは、譬へば窓硝子も無いボロ汽車で危く窒息しかけたほどの暗黒のトンネルを抜けた時に感ずるやうなあの抒情性の然らしむるところ、未曾有の混亂の中で、わたしの通風筒を馬籠に見出したからである。明るい牧歌的な面のみがとかく照明される結果に終つたのはそんな故でもある。だから、わたしは《馬籠》を補はることにまだまだ未練を感じてゐることも書添へておきたい。

本書に收めた文章は既に第十五回目の馬籠行までのもので、東京新聞を初め新文化、文藝、新潮、藝林閒歩等にそれぞれ分載、連載したものを再整理したものである。野田宇太郎氏には終始激勵を忝ふした。この激勵なしにはおそらくこれだけの稿を纏め上げることは出來なかつたらうと云ふことを思ふと、合作とすべきか一番妥當のやうにさへ感じられるくらゐである。安藤茂一、末木利一、大脇文平、宮川長太、鈴木岩右衛門氏等、それから大磯驛の幹部の人々、その他になほこの本を今上梓するに際して馬

純や海邊に記念しておきたい友人知己は擧げれば限りがない。鈴木保德氏にはわたしの最初の本からいつも裝幀の御厚意を頂いてゐる。併せて感謝の意を表したい。

昭和二十一年晩夏

菊池重三郎

昭和二十一年十一月十日印刷
昭和二十一年十一月十五日發行

馬籠　定價貳拾八圓

著者　菊池重三郎

發行者　森一郎
東京都麹町區内幸町二ノ三

印刷者　小坂孟
東京都牛込區市谷加賀町一ノ十二

印刷所（東京二）　大日本印刷株式會社
東京都牛込區市谷加賀町一ノ十二

配給元　日本出版配給株式會社
東京都神田區淡路町二ノ九

發行所　東京都麹町區内幸町二ノ三（幸ビル）　東京出版株式會社
振替東京五〇二五番
電話銀座（57）七三九二番